大津遺跡

—農免農道整備事業田鶴浜
西部２期に係る発掘調査報告書—

1995

石川県立埋蔵文化財センター

大　津　遺　跡

―農免農道整備事業田鶴浜
西部２期に係る発掘調査報告書―

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は平成３年度に実施した農免農道整備事業田鶴浜西部２期に係る緊急発掘調査報告書で、石川県鹿島郡田鶴浜町に所在する大津遺跡の報告をおこなっている。

2　調査は石川県農林水産部耕地建設課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。調査に係る費用は県農林水産部耕地建設課の負担による。

3　本書に係る現地調査の期間、面積、担当は以下のとおりである。

　調査期間　平成３年９月３日～同年12月18日

　調査面積　約1,000㎡

　調査担当　調査第一課課長中島俊一、調査第二課主事川畑　誠（いずれも現在）

4　事前協議および現地調査の実施に関しては下記の関係諸機関のご協力を得ている。

　県農林水産部耕地建設課、県七尾土地改良事務所、アジア航測株式会社

5　現地調査でのグリッド測量、空中写真図化作業はアジア航測株式会社に、また出土遺物などの整理作業は平成４、６年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に、それぞれ委託して実施した。資料整理、図版作成、写真撮影などに関しては下記の方々のご協力を得ている。記して感謝申しあげる。

　谷口克好（門前町教育委員会長期研修生）、小林正史、大藤雅男、田畑　弘、松田英博、野村祥子、竹田倫子、伊藤康子、小堀厚子

6　本書の編集は中島が担当し、以下のように分担執筆した。

　第１～４章　　川畑

　第５章第１節　　本田秀生（調査第一課主任主事）

　第５章第２、３節　中島

7　本書における挿図などの扱いは以下のとおりである。

（１）挿図中に指示した方位は座標北である。また断面図の水準線に付した数値は海抜高（単位ｍ）である。

（２）挿図の縮尺は図中に明記した。

8　調査によって得られた実測図、写真などの記録資料と出土遺物は、石川県立埋蔵文化財センターが一括保管している。貸し出しなどをおこなっているので有効に利用していただきたい。

目　次

第１章　位置と環境…… 1

第２章　調査の経緯と経過…… 5

第３章　調査の概要…… 7

第４章　遺構…… 8

　第１節　竪穴状遺構…… 8
　第２節　土坑…… 8
　第３節　溝…… 20
　第４節　その他の遺構…… 23

第５章　出土遺物…… 27

　第１節　縄文時代の土器…… 27
　第２節　石器…… 46
　第３節　弥生時代以降の土器…… 46

第1章　位置と環境

第1節　地理的環境

大津遺跡は石川県鹿島郡田鶴浜町大津に所在する。田鶴浜町は、日本海に突き出した能登半島の中央部に位置し、七尾西湾を北に臨む。町域は東西約8㎞、南北約6㎞の逆三角形を呈し、面積約30㎢を測る。地形からみれば、南側は赤蔵山（標高179m）を中心とした緩やかな丘陵地帯となる一方、北側には七尾西湾に流下する二宮川、三引川、深見川、大津川が小規模な沖積平野を形成する。

大津は田鶴浜町の西北部に位置し、北側で鹿島郡中島町に、また西側で羽咋郡志賀町に接する。現在こそ干拓事業の進展により水田風景を呈するが、本来は七尾西湾に面する北東側は大津入り江、大津潟が存在、平野部は残る三方に迫った丘陵端部にわずかに展開するのみであった。集落域は、その狭少な平野部に沿って帯状に細長く点在、当時は集落の間際まで入り江であったとされる。この大津を特徴づける地理的な要因として、大津入り江・大津川を介し、七尾西湾（内浦側）と志賀町側（土田盆地、外浦側）を最短距離で結ぶ水陸交通の要衝であることがあげられる。これは大津の地名の由来を『能登名跡志』が「此村、昔は徳田佐渡守と云し領主ありし比、諸事運上して船着なる故大津の名」と説明する点からもうかがえる。なお、この地理的要因を生かして幕末～明治にかけて大津川を利用した幅8間、深さ5尺、総間数9,6743間の運河が計画されたものの、実現をみなかった。

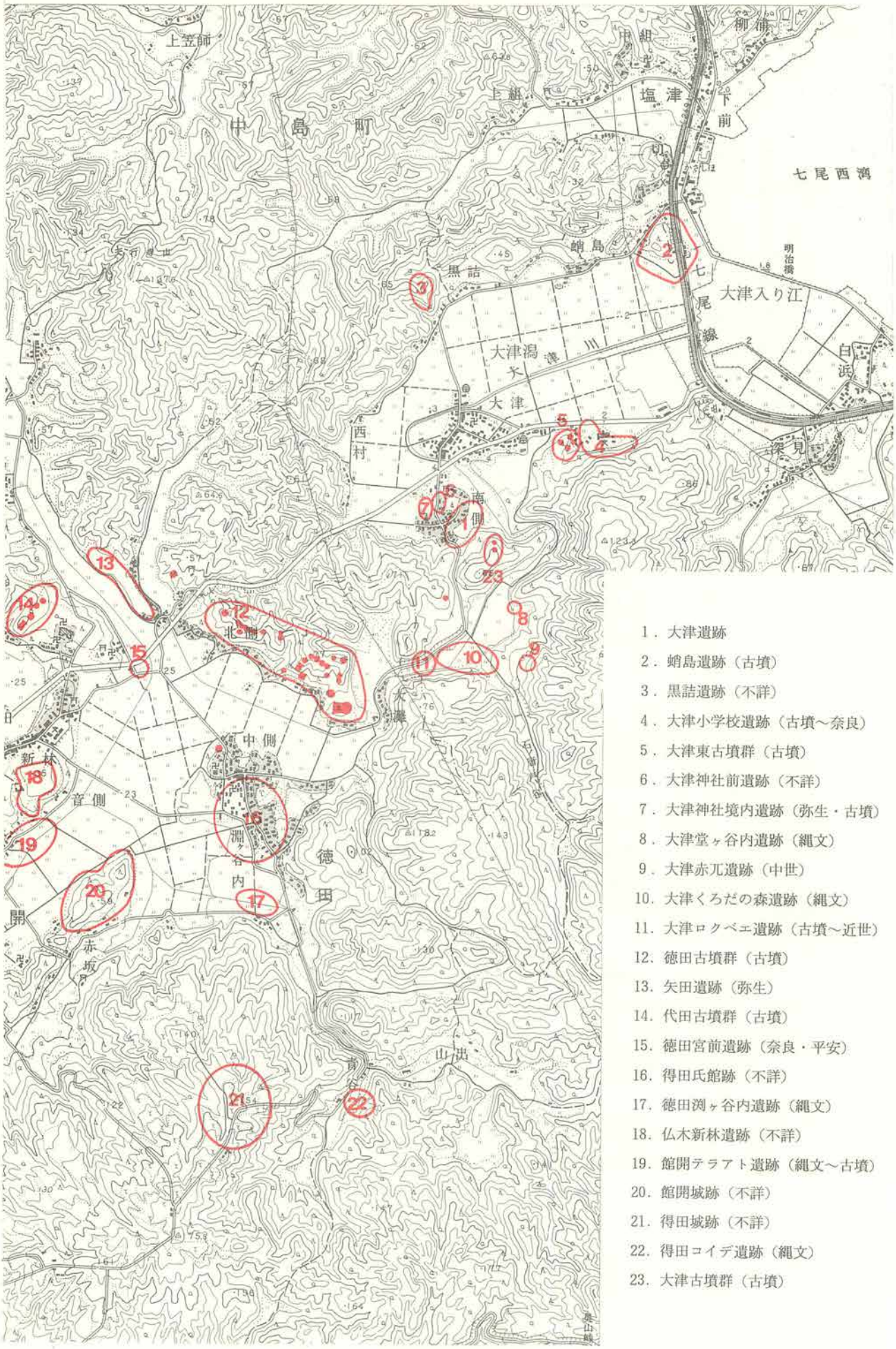
さて、大津遺跡は大津の集落の中心からみて南側の舌状に張り出した低丘陵上に位置する。ちょうど先述の大津川が丘陵間を抜けて低湿地部に出る箇所にあたり、標高約6～7mを測る。現在は畑地、住宅地、神社などに利用されている。

第2節　歴史的環境

大津遺跡周辺の縄文時代は、世界的規模の大海進（氷河性海水面上昇運動）により、現在より2m前後海水面が上昇していたと考えられている。第2図のとおり、本遺跡は入り江の奥深くの低丘陵の突端部に位置しており、著名な能都町真脇遺跡と類似した立地状況を示す。本遺跡が学史的に重要な地位を占めるに至ったのは、大津八幡神社宮司故小柳房延氏の業績によるところが大きい。氏は大正時代以来、周辺地域で地道な調査・遺物採取をおこなわれている。その成果は大正12年に刊行された『石川縣史蹟名勝調査報告』第壱輯の中に「此地方ハ地域少ナレドモ一方七尾湾ニ面シ後方羽咋郡高浜方面ニ通ズル渓谷ノ要部ニ当ルヲ以テ古代住民ノ一中心地点トナリシモノノ如シ」と記述されたことに始まり、『田鶴浜町史』などにも詳しく紹介されている。現在までの調査・研究で、本遺跡は早期、前期中・後葉～中期後半まで定住的に営まれた本地域の中心的集落のひとつであったことが判明している。また周辺の丘陵部には大津赤兀遺跡（中期後葉～後期前葉、晩期～弥生時代初頭）、大津堂ヶ谷内遺跡（中期）、大津くろだの森遺跡（中期～晩期）などが点在、県立埋蔵文化財センターの発掘調査で衛星的な集落の様相が次第に明らかとなりつつある。

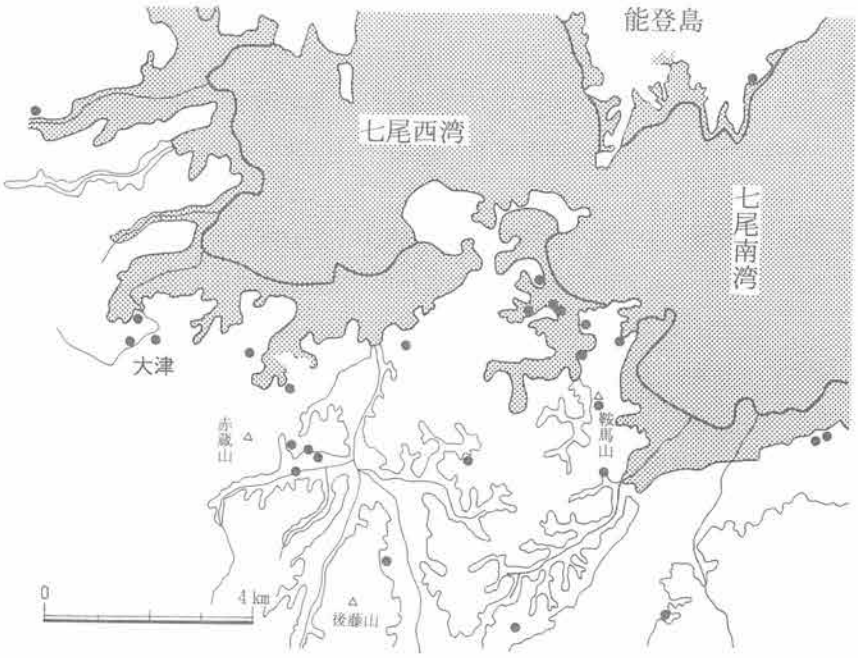
続く弥生時代は、本遺跡で中・後期の土器が出土したほか、大津神社境内遺跡、矢田遺跡などから土器の出土をみるものの、その実態は不明である。そのうち、近接する大津神社境内遺跡からは細形銅剣をモデルにしたと考えられる小型有樋式石剣が採集され、北陸では数少ない出土例のひとつとなる。

古墳時代に入ると、周辺丘陵部で古墳群の築造が活発化する。本遺跡南西約1㎞の丘陵上には25基からなる徳田古墳群が存在、灯明山古墳（徳田1号墳）は墳長約85.5m、後円部径約50mを測る古墳時代前期の前方後円墳であることが判明している。地理的環境で述べた交通の要衝を押さえる土田盆地の首長の奥津域に位置付けられよう。また本遺跡南側には大津古墳群（円墳3基）が存在する。うち大津1

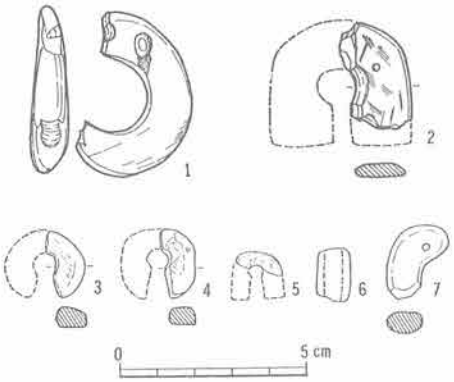


1．大津遺跡
2．鯖島遺跡（古墳）
3．黒詰遺跡（不詳）
4．大津小学校遺跡（古墳～奈良）
5．大津東古墳群（古墳）
6．大津神社前遺跡（不詳）
7．大津神社境内遺跡（弥生・古墳）
8．大津堂ヶ谷内遺跡（縄文）
9．大津赤兀遺跡（中世）
10．大津くろだの森遺跡（縄文）
11．大津ロクベエ遺跡（古墳～近世）
12．徳田古墳群（古墳）
13．矢田遺跡（弥生）
14．代田古墳群（古墳）
15．徳田宮前遺跡（奈良・平安）
16．得田氏館跡（不詳）
17．徳田渕ヶ谷内遺跡（縄文）
18．仏木新林遺跡（不詳）
19．館開テラアト遺跡（縄文～古墳）
20．館開城跡（不詳）
21．得田城跡（不詳）
22．得田コイデ遺跡（縄文）
23．大津古墳群（古墳）

第1図　周辺の遺跡（S＝1／25,000）

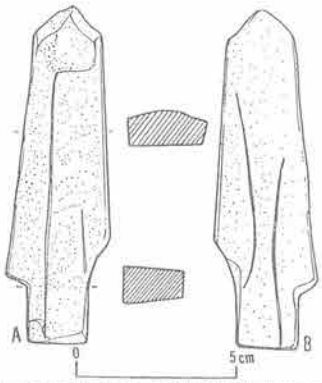


スクリーントーン部分は縄文時代推定海部を示す。『田鶴浜町史』を再トレース

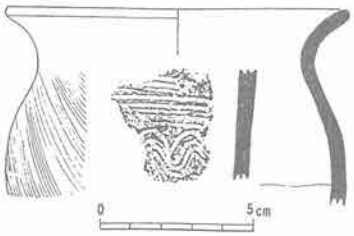


1 環状垂玉　2～5 玦状耳飾　6 管玉　7 勾玉

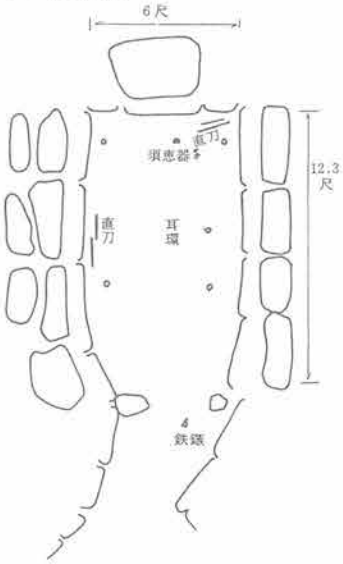
大津遺跡出土の石製品（『田鶴浜町史』より転載）



大津遺跡出土の小型有樋石剣（『田鶴浜町史』より転載）



大津遺跡出土の弥生土器（『田鶴浜町史』より転載）



大津1号墳の石室略図（『田鶴浜町史』より転載）

第2図　大津遺跡出土遺物他

号墳は両袖式横穴式石室（長さ約3.7m、幅約1.8m）をもつ径約10mの円墳で、金環・銀環・直刀などが出土している。これらの古墳群の築造を可能とした集落遺跡の様相は、大津ロクベエ遺跡で古墳時代前期の、また大津ロクベエ遺跡や本遺跡から5世紀末以降の遺物が出土しているが、いずれも断片的資料にとどまる。

古代では、本遺跡を含む能登地方は「日本書紀」、「続日本紀」に大化年間～延暦年間にかけて人・船・食料などを調達・運搬した記事があることから、東北征服の戦略基地として重視されたことが判明している。この様相は天平18（746）年から5年間越中国国司として赴任した大伴家持の能登巡視の際に詠んだ「鳥総立て船木伐るという　能登の島山　今日見れば　木立繁しも　幾代神びぞ」の歌からもうかがい知ることができる。また能登地方は養老2（718）年に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を割いて立国、その後天平13（741）年に越中国に併合、天平勝宝9（757）年に再立国するという変遷をたどる。本遺跡周辺は『和名抄』記載郷のうち、能登郡熊木郷に含まれた可能性が高い。周辺の遺跡では大津ロクベエ遺跡（7世紀末～10世紀）、製塩土器を出土した大津小学校遺跡、また徳田宮前遺跡などが確認されている。

中世になると、本遺跡周辺は能登国鹿島郡笠師保に属し、戦国時代後期には三宅伊賀守と大津氏の領するところとなる。承久3（1221）年に能登国衙が作成した『能登国田数目録』によれば、笠師保10町2段との記載がある。また足利尊氏と弟直義が対立した観応の擾乱の際に、鹿島郡三引保赤蔵寺にたてこもる北朝方の能登守護吉見氏頼を救援するため、長秀信が大津から打ち出し、南朝方の桃井直信等と戦ったとの記述もある。この戦闘の舞台となった赤蔵山は、中世修験道の聖域であり、後白河天皇の時には社僧120坊を置いて赤蔵山本宮寺と称している。集落遺跡としては、本遺跡で珠洲焼が出土したほか、大津ロクベエ遺跡で12世紀～14世紀初頭の畑地や、大津赤兀遺跡で信仰的空間を想像させる14～15世紀の溝などを確認している。また大津八幡神社境内や東側の丘陵端部には五輪塔、板碑など中世墓が点在する。

その後、当地は天正8（1580）年に織田信長より長連龍に領地として給され、寛文11（1671）には加賀藩の直轄領となる。家数は元禄16（1703）年に百姓34、天保15年には百姓113、頭振6と記されている。

なお、本遺跡出土の環状垂玉、玦状耳飾などの石器、土器は昭和39年9月に田鶴浜町文化財に指定されている。

引用・参考文献

田鶴浜町史編さん委員会『田鶴浜町史』田鶴浜町役場　1974

角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典』17石川県　角川書店　1981

宮下栄仁・垣内光次郎「赤蔵山遺跡採集遺物報告」『石川考古』第167号　石川考古学研究会　1986

唐川明史「灯明山古墳（徳田1号墳）について－中間報告－」『第42回石川県五学会連合研究発表資料』　1992

土屋宣雄・木立雅朗『大津ロクベエ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1993

石井由美・北野博司『大津ロクベエ遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター　1994

第２章　調査の経緯と経過

本遺跡は、大正12年に刊行された『石川縣史蹟名勝調査報告』第壱輯中で報告されて以来、能登地方を代表する縄文時代の集落遺跡として広く知られてきた。

今回、県農林水産部耕地建設課、七尾土地改良事務所を主管として鹿島郡田鶴浜町大津から七尾市に至る農免農道の整備計画が策定された。その計画路線に対して県耕地建設課と県立埋蔵文化財センターが遺跡の有無を協議、田鶴浜町大津地内に所在する本遺跡が事業の影響を受けることが判明した。そして平成２年度に県耕地建設課より事業実施に伴い影響を受ける範囲確認調査の依頼があり、同年６月１日に県立埋蔵文化財センター企画調整課が重機により試掘調査をおこなった。その結果、調査対象面積約2,000㎡のうち約1,000㎡で遺跡の存在を確認、事業実施前に発掘調査が必要であるとの回答をおこなった。

そして平成３年度に県耕地建設課の発掘調査依頼を受け、県立埋蔵文化財センターが約1,000㎡を対象とした発掘調査を実施することが決定した。

現地での調査は調査第一課が担当、平成３年９月３日～同年12月18日にかけておこなった。その後、平成４年度に出土遺物整理作業を、平成６年度に出土遺物、図面等の整理作業を社団法人石川県埋蔵文化財保存協会にそれぞれ委託して実施した。平成６年度は写真撮影作業、図版作成作業、原稿執筆作業などを直営でおこなった後、本書を刊行した。

以下、現地調査参加者、調査日誌抄録を記す。

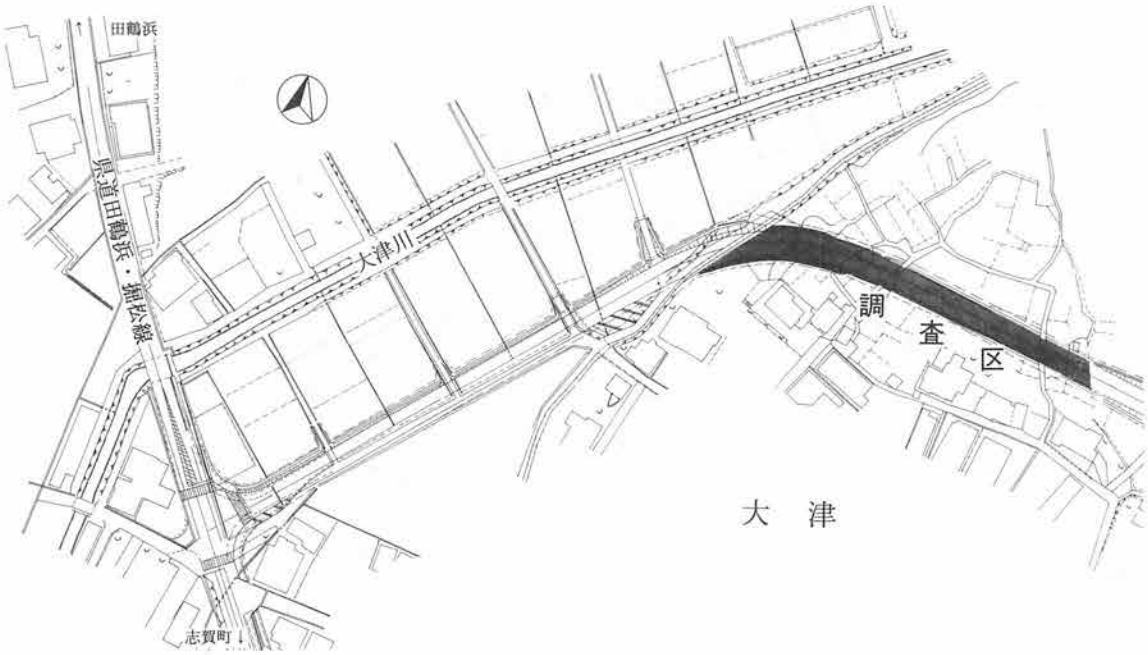
調査参加者

調　査　員　中島俊一、川畑　誠

調査補助員　松田英博、田畑　弘

長期研修生　谷口克好

作　業　員　浅瀬義信、岡田正一、岡田松枝、金岐春子、素波よしの、銭元ちよ子、谷渡すい、



第３図　調査区の位置

土本真佐子、時国久美子、前田しさの、輪瀬千代子（以上田鶴浜町大津）、橋口　進（中島町中島）、大原奈美子（七尾市池崎町）

調査日誌抄録

9．3～ 9.11　現地確認、プレハブ設営をおこなう。

9.12～ 9.20　重機による表土除去作業、除草作業、グリッド杭測量作業をおこなう。

9.21～10．9　ベルトコンベア搬入、設置作業の後、A～C区の包含層掘り下げ、遺構検出、遺構掘り下げ作業を実施する。併せて図面作成作業、写真撮影作業をおこなう。

10.10～10.18　C～F区の包含層掘り下げ、遺構検出、遺構掘り下げ作業を実施する。石・礫が地山中に多く存在するのに加え　湧水が激しく作業に難渋する。A～D区を完掘。

10.20～10.25　E～F区の包含層掘り下げ、遺構検出作業をおこなう。併せて図面作成作業を実施。

10.28～11．1　E～F区の遺構掘り下げ作業、図面作成作業を実施する。

11．5　J～L区の重機による表土除去作業をおこなう。

11．6～11.14　G～I区包含層掘り下げ作業。J～L区の補助杭設置作業をおこなう。連日の雨により、湧水量が増加、排水溝を切るものの作業がほとんど進まない。雨の合間に遅れている図面作成作業をおこなう。

11.15～11.22　J．K区の包含層掘り下げ作業をおこなう。包含層がかなり厚く、また作業員の人数が減ったため、作業が遅れ気味となる。金ケ崎小学校の児童が現場見学、体験発掘をおこなう。

11.25～12．5　J～L区の遺構検出、掘り下げ作業を急ピッチで進める。併せて図面作成作業を実施する。

12．6～12．9　図面作成作業を引き続き進める。A区より順に土層ベルトを取り外しながら、遺構清掃作業を実施する。

12.10～12.15　遺構掘り下げ作業をほとんど終了する。遅れ気味の図面作成作業を進める。また航空測量作業の準備のため、遺構清掃作業、ベルトコンベア撤去作業を順次実施する。

12.16　調査区排水、清掃作業をおこなう。田鶴浜町文化財審議委員視察。相馬小学校の児童が遺跡見学をおこなう。

12.17　航空測量作業を実施。天候が比較的安定していたため順調に進む。機材整理作業を実施する。

12.18　図面作成作業、機材整理、撤収作業をおこない、現地作業を終了。

第３章　調査の概要

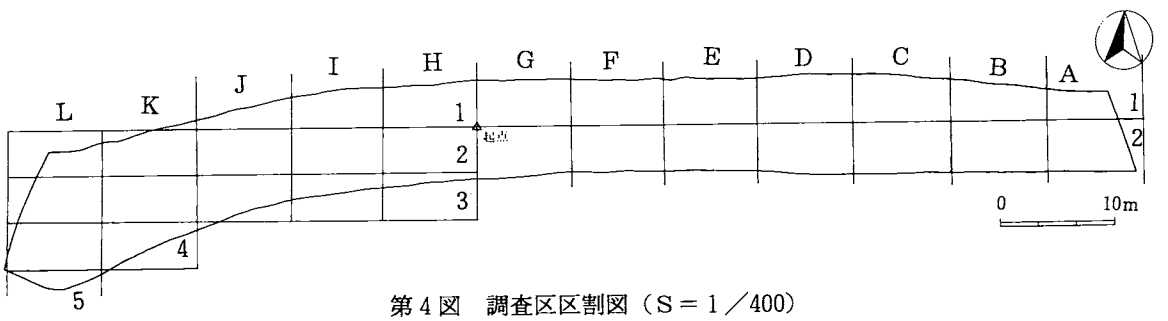
本遺跡の発掘調査は農免農道整備事業田鶴浜西部２期に係るものである。現地調査は平成３年９月３日～同年12月18日にかけて事業予定区域内約1,000㎡を対象に実施した。

調査区の区割りの起点は、大津集落裏手を東側より直進する農免農道が県道田鶴浜町・堀松線に接続するため南東に向けてカーブを始める農道センター地点に設定した。そして区割り中心線は、この農道直線部分のセンターラインと一致させ設けている。グリッドは第４図のとおり、東西方向は10ｍのメッシュをかぶせ、東側から順にＡ～Ｌ区と、また南北方向はＧ区以東は区割り中心線より北側を１区、南側を２区と、Ｈ区以西は区割り中心線より北側を１区、南側は５ｍごとに２～５区とした。なお先述の調査区区割り起点杭はＨ－１区南東端にあたり、区割り中心線は１区と２区の境に一致する。

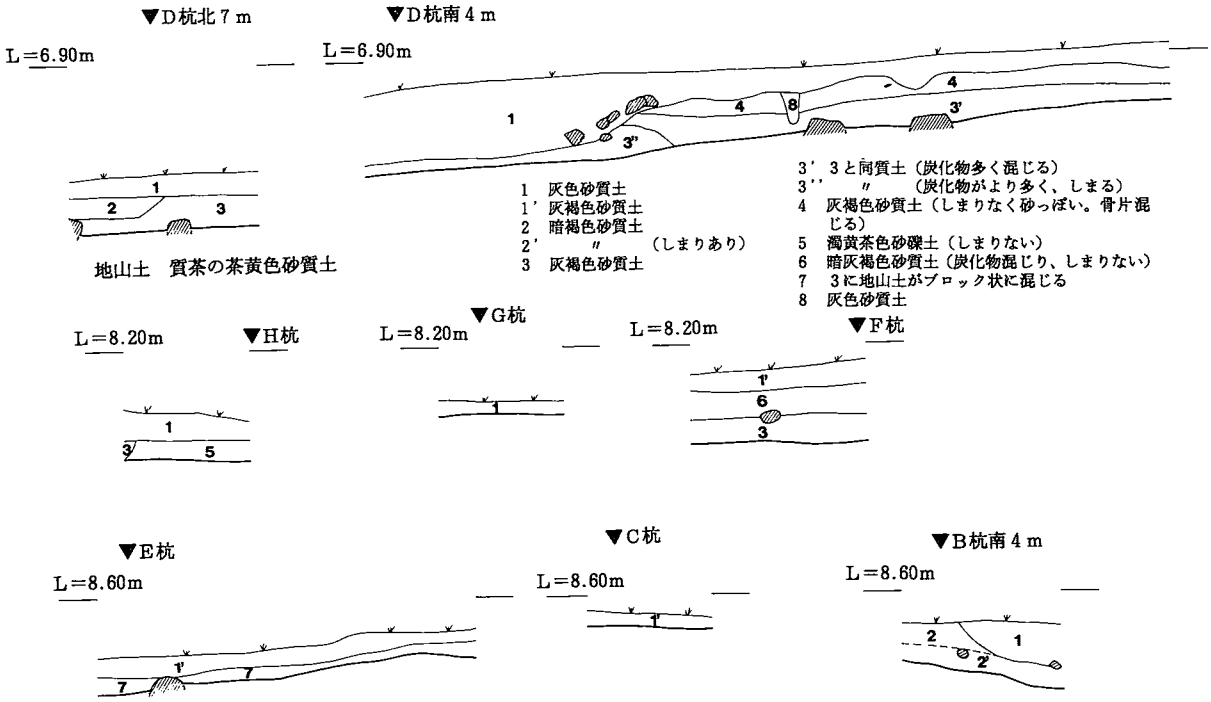
基本土層層序は、上層より耕作土（灰色砂質土）、中世以降の土器が混じる暗褐色砂質土または暗灰褐色砂質土、縄文時代～古代の土器が主に混じる灰褐色砂質土～濁黄茶色砂質土、地山土（石・礫が多く混じる黄茶～茶黄色砂質土）となるが、調査区両端を除き耕作面から地山面まで厚さに乏しく、一様の堆積状況を示さない。特に地山面までの浅さに乏しい部分（Ａ～Ｊ区）では、包含層はほとんど存在せず、遺物も近・現代に属する遺物が縄文土器と同一土層の中から出土している。地山土は１ｍ以上の石が非常に多く混じる黄茶～茶黄色砂質土を基本とするが、Ｄ区以東は礫が比較的少なく安定した状況を呈する。また地形から見れば調査区の大部分が低丘陵上に位置、Ａ区中程以東およびＬ区中程以西は急激に標高が下がり、低湿地に至る。ちなみに標高は、Ｂ～Ｄ区は8.00～8.40ｍと最も高く、Ｅ・Ｆ区は7.30～7.40ｍとやや鞍部に、Ｇ～Ｉ区は7.40～6.80ｍと安定した後、Ｊ区以西は北西側に向けて緩やかに下がって行く（6.80→5.40ｍ）。

調査の結果、縄文時代早期末、前期中・後葉～中期後半にかけての遺構と中世以降現代までの遺構が重複して検出できた。遺物の出土状況からみてＣ～Ｌ区で前者の、Ａ～Ｃ区で後者の遺構が多い傾向が認められる。特にＡ区東端の傾斜面土層中からは中世以降の遺物が集中している。また遺物の出土をみた弥生時代～古墳時代の遺構は明瞭に確認できなかった。検出した遺構は竪穴状遺構２基、土坑34基、溝10条、ピット100以上、不明遺構２基、石組遺構１箇所などである。前述の地山面までの厚さに乏しい理由により、竪穴状遺構、土坑、ピット、不明遺構の一部が縄文時代に属する他は、遺構の時期を特定することはできなかった。

遺物は、縄文時代早期末、前期中・後葉～中期後半、弥生時代後期、古墳時代中期～後期、中世後半～近世の土器・石器・石製品の他、骨細片が出土した。特に骨細片はＥ区以西の包含層、遺構より、いずれも少量ながら出土したものの、遺存状況が悪く、時期を特定することはできなかった。しかし、遺構（土坑）出土のそれは、おそらく墓壙としての性格に由来するものと考えられる。



第４図　調査区区割図（Ｓ＝１／400）



第５図　調査区北壁土層断面図（Ｓ＝１／60）

第４章　遺構

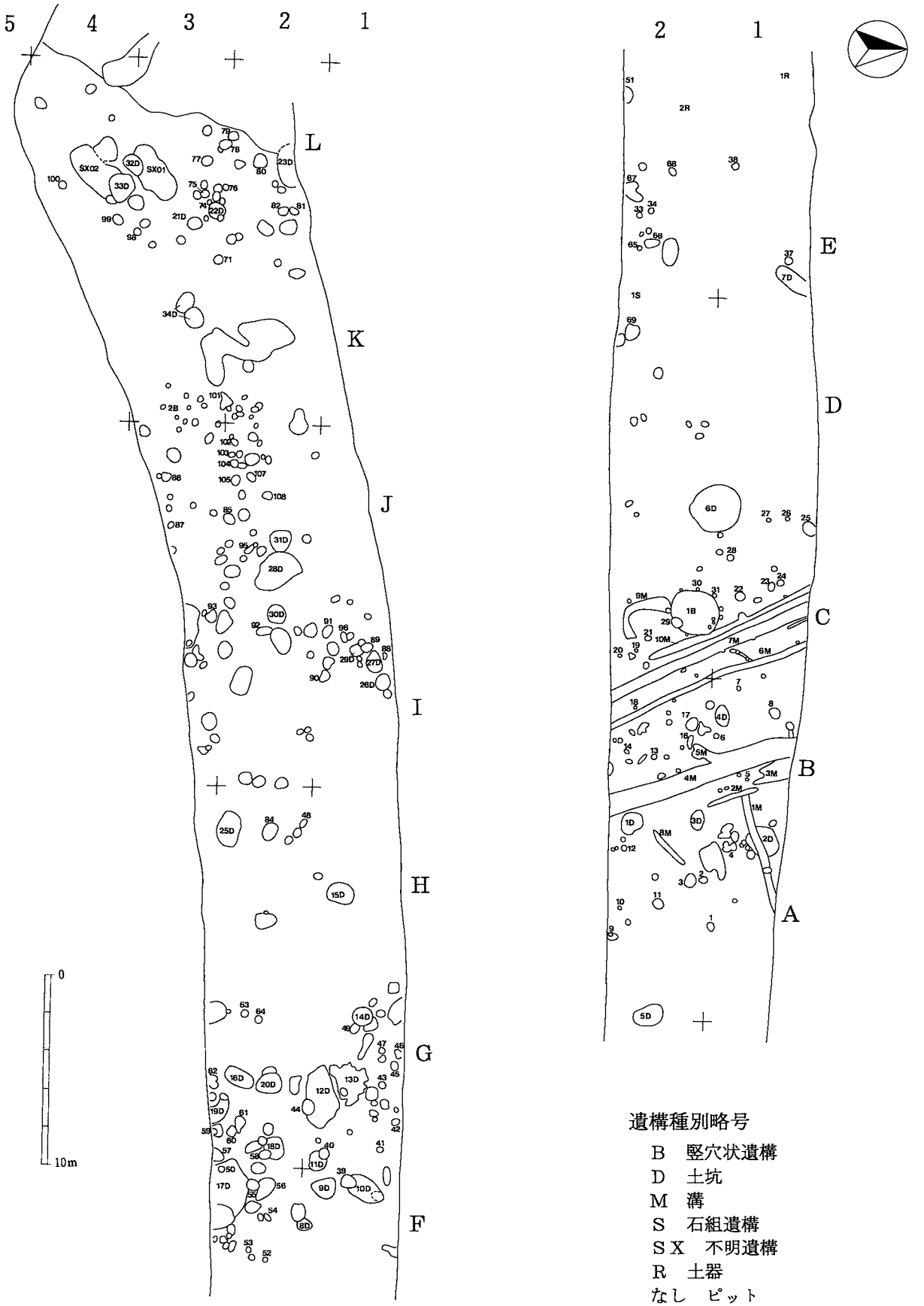
第１節　竪穴状遺構

１号竪穴状遺構　Ｃ－２区で検出し、縄文時代の竪穴建物と考えられる。平面円形を呈し、東西方向約220cm、南北方向約230cm、深さ約20cmを測る。壁は比較的明瞭に立ち上がり、平坦な床面では黒色炭化物層が１～２cmの厚さで確認できた。柱穴と考えられる径10～20cmの小ピットを周囲および床面北東端に伴い、周囲の小ピットは竪穴側に傾斜して掘られる。遺物は竪穴が廃絶した後に自然堆積土（暗褐色砂質土）から、ほとんどが出土している。完形のものはなく、図化できたのは第21図37の深鉢口縁部、第30図17の石錐、26の小型磨製石斧のみである。

２号竪穴状遺構　調査区の地山傾斜変換点のＪ、Ｋ－３区で検出した時期不明の遺構である。南側および東側の壁がしっかりと立ち上がることから、一応竪穴建物の可能性を考えている。削平度合いが著しく明瞭にプランを把握できなかったものの、隅丸方形を呈するようだ。東西方向310cm以上、南北方向400cm以上、深さ約15cmを測る。第13図にあるように柱穴となる可能性をもつ径20～30cmの小ピットには後述するピットとは別にナンバーをつけている（Ｐ－１～８）。縄文土器細片などが若干出土しているが、図化可能な個体はない。

第２節　土坑

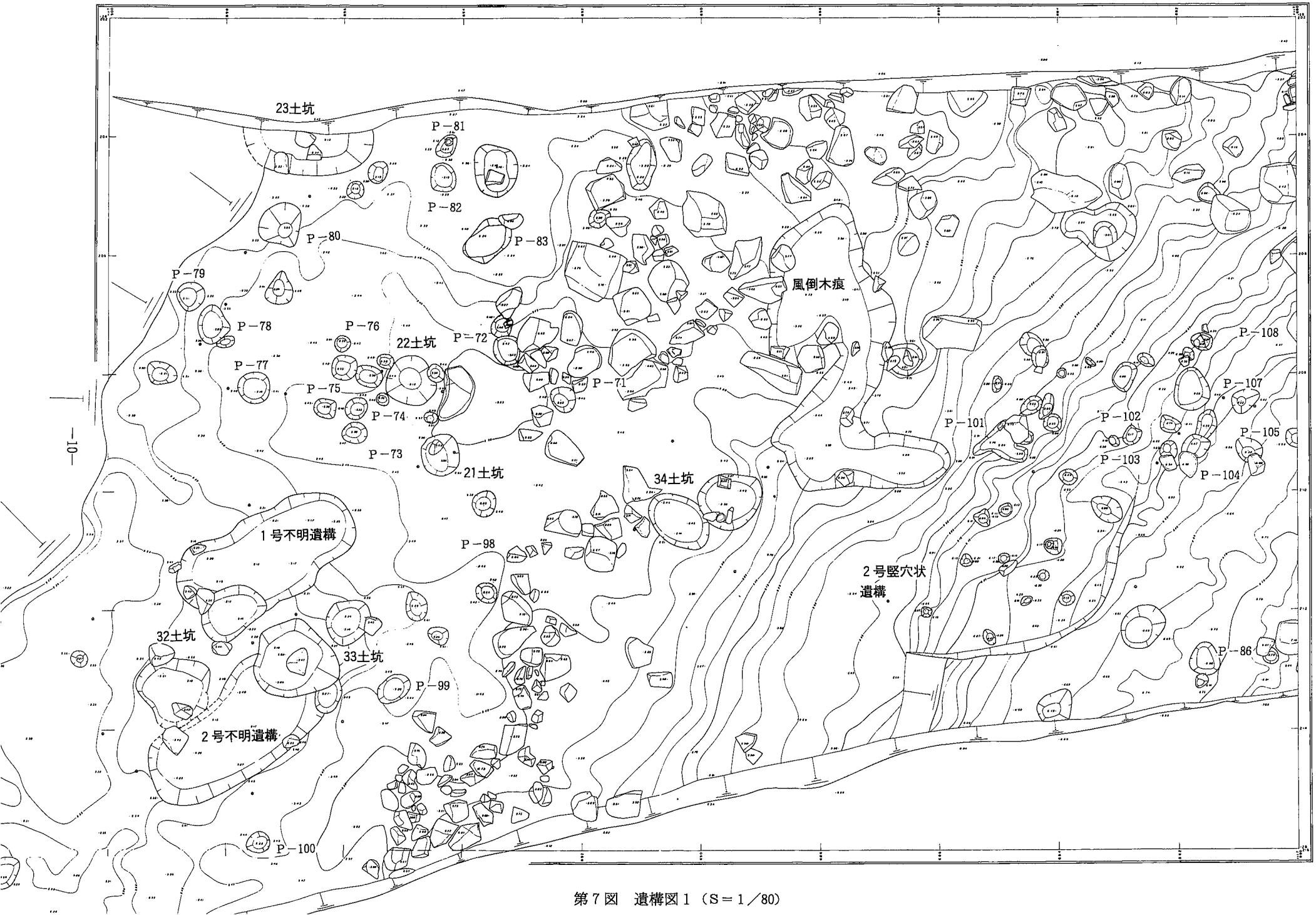
１号土坑　Ｂ－２区で検出し、近年の素掘り井戸と考えられる。やや崩れた隅丸方形を呈し、径約110cm、深さ約70cmを測る。覆土はしまりのない灰色砂質土である。第30図６、12の石鏃、13、14の石錐が出土している。



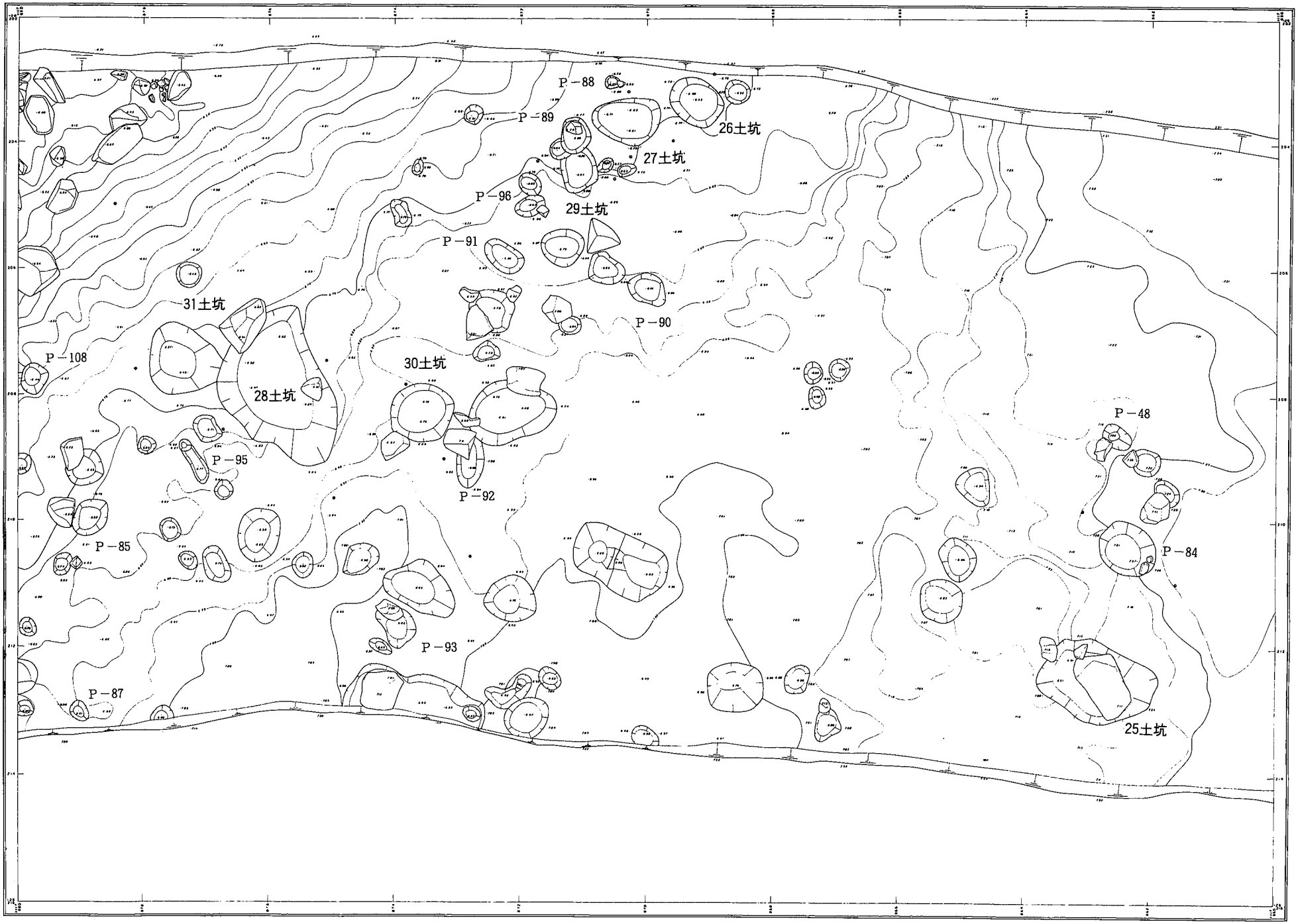
遺構種別略号

B　竪穴状遺構
D　土坑
M　溝
S　石組遺構
SX　不明遺構
R　土器
なし　ピット

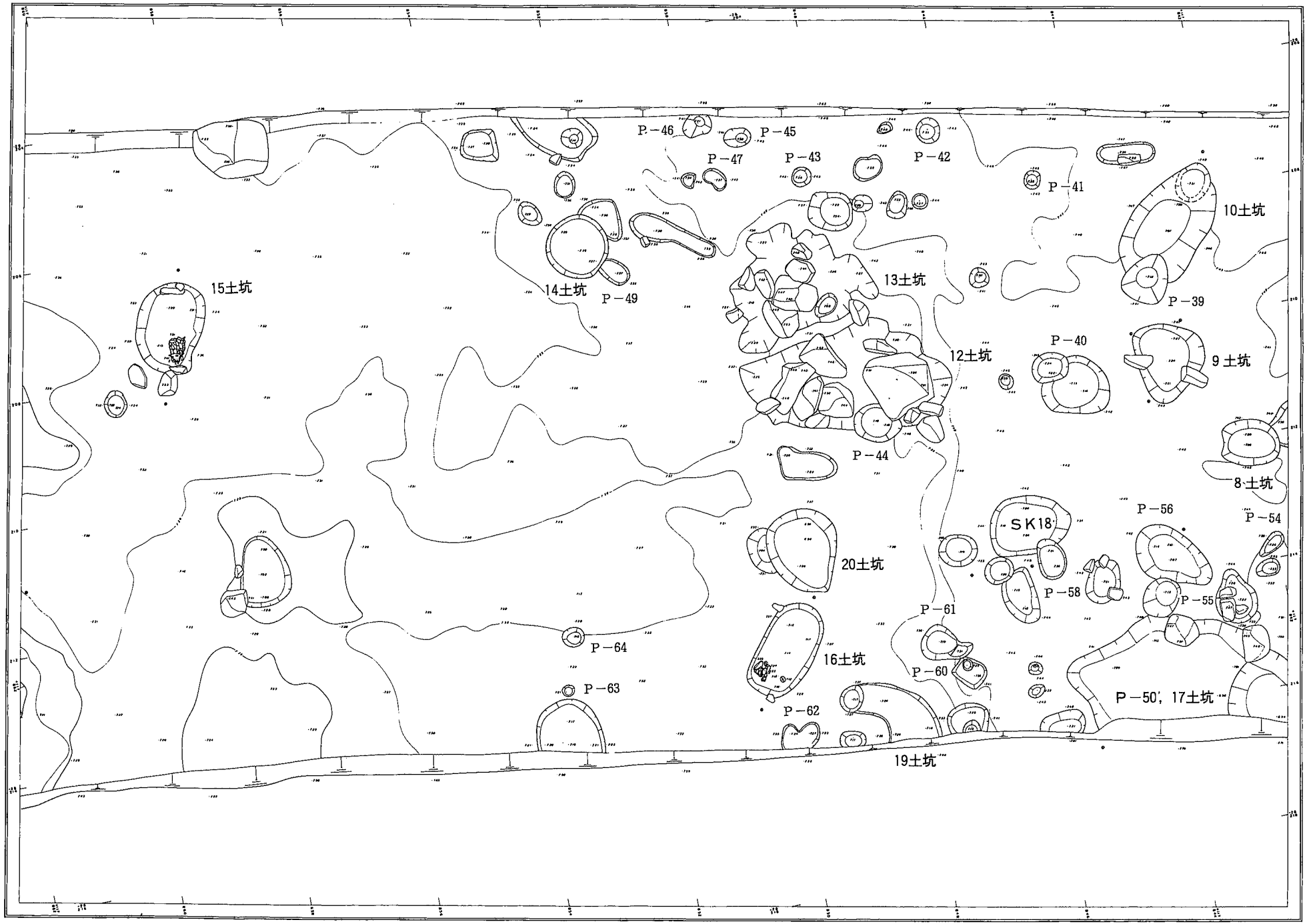
第６図　遺構分布図（S＝1／300）



第7図　遺構図1（S＝1／80）

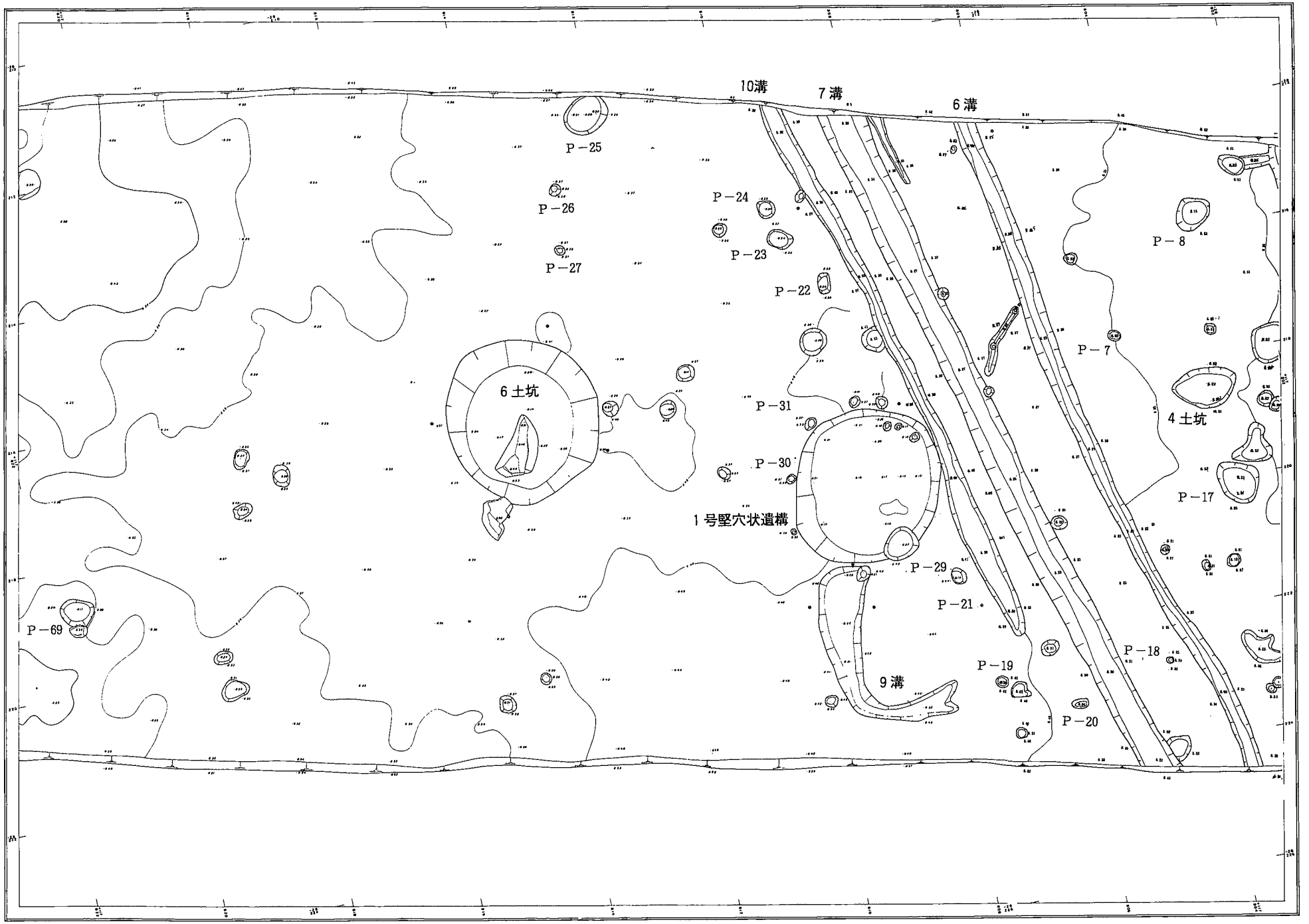


第８図　遺構図２（Ｓ＝１／80）

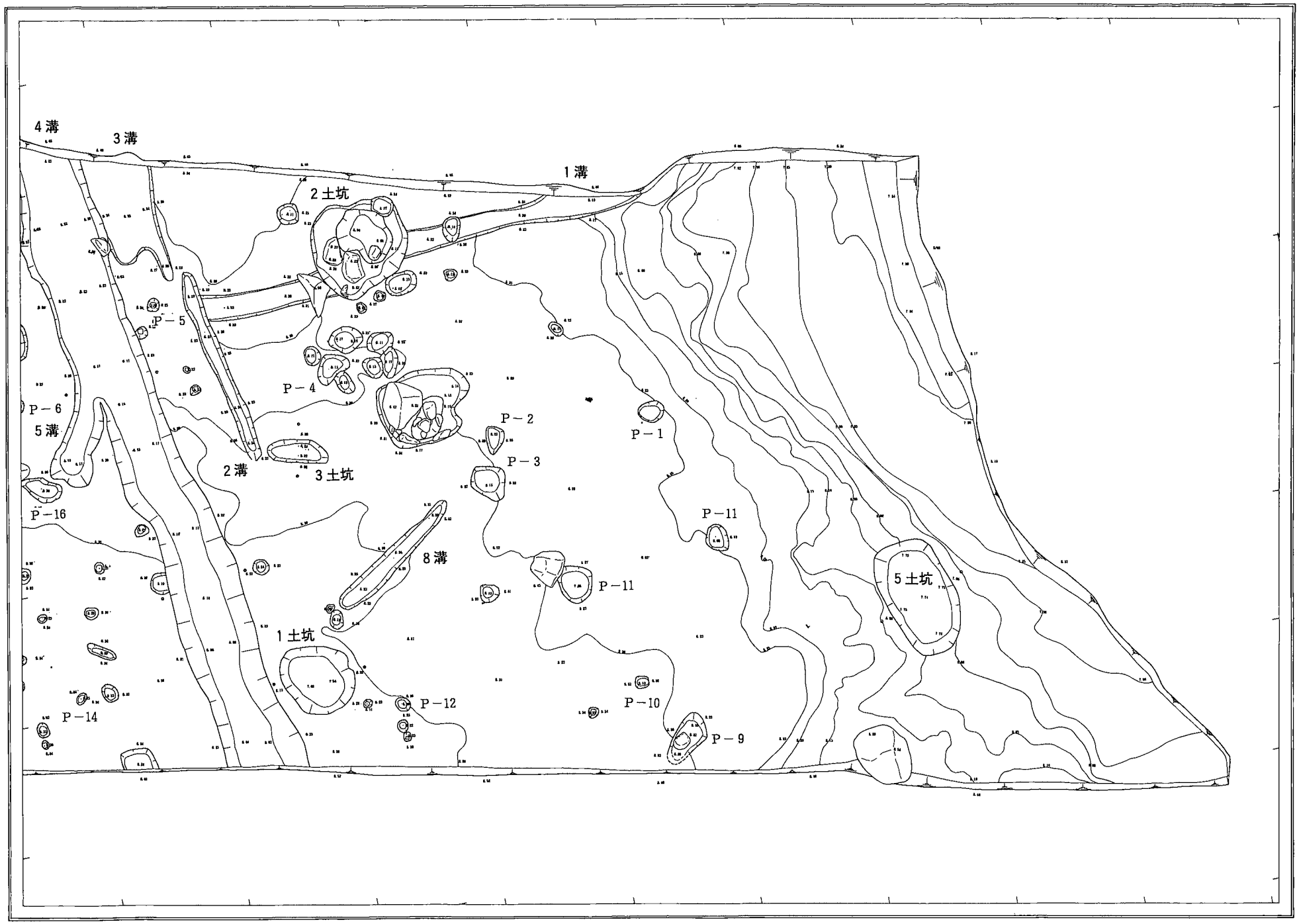


第9図　遺構図3（S＝1／80）

第10図　遺構図4（S＝1／80）



第11図　遺構図５（S＝１／80）



第12図　遺構図６（S＝１／80）

2号土坑　B－1区で検出し、1号溝に切られる。地山中の石を掘り起こした近代以降の穴と考えられる。かなり崩れた円形を呈し、径約150cm、深さ約20cmを測る。覆土は汚れた暗褐色砂質土の単層で、20～40cmの石が多く混じる。

3号土坑　B－2区で検出し、2号溝に切られる。長軸98cm、短軸36cm、深さ10cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。図化可能な遺物は出土していない。

4号土坑　B－1区で検出し、長軸約100cm、短軸約65cm、深さ12cmを測る。覆土は濁茶褐色砂質土で第28図200の深鉢底部が出土している。

5号土坑　A－2区の地山傾斜変換点で検出し、風倒木痕と考えられる。隅丸長方形を呈し、長軸約180cm、短軸約110cm、深さ約35cmを測る。壁はしっかりと立ち上がり、覆土はブロック状の地山土が多く混じる茶褐色砂質土である。

6号土坑　C区で検出し、縄文時代に属する。当初、竪穴建物の可能性を考えたが、底面中央部付近で1m大の自然石が地山にくい込んで確認できたため、性格不明の土坑とした。円形を呈し、径240～260cm、深さ約25cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がる。覆土上層の暗褐色砂質土より第24図95の深鉢がまとまって出土している。

7号土坑　F－1区で検出し、縄文時代に属すると考えられる。隅丸長方形を呈し、長軸180cm以上、短軸約80cm、深さ約20cmを測る。覆土は上層より茶褐色砂質土、黄茶褐色砂質土、黄茶色砂質シルトとなり、細かい骨片が混じる。墓壙の可能性をもつ。

8号土坑　F－1区で検出し、縄文時代に属すると考えられる。やや崩れた楕円形を呈し、長軸約90cm、短軸約75cm、深さ約35cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質土で、第22図56が出土している。

9号土坑　F－1区で検出した。隅丸三角形を呈し、長軸約125cm、深さ17cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質土である。遺物の出土はないものの、覆土の色調より縄文時代のものと考えられる。

10号土坑　F－1区で検出し、縄文時代に属する。かなり崩れた楕円形を呈し、長軸約190cm、短軸約120cm、深さ約40cmを測る。壁はしっかり立ち上がるものの、底面は地山中の石のため凹凸が激しい。覆土は暗褐色砂質土を基調とし、炭化物が混じる。第21図41の深鉢口縁部が出土している。

11号土坑　G－1区で検出し、縄文時代に属すると考えられる。やや崩れた円形を呈し、径約100cm、深さ20cm強を測る。覆土は炭化物の混じる暗褐色砂質土の単層である。第32図39が出土している。

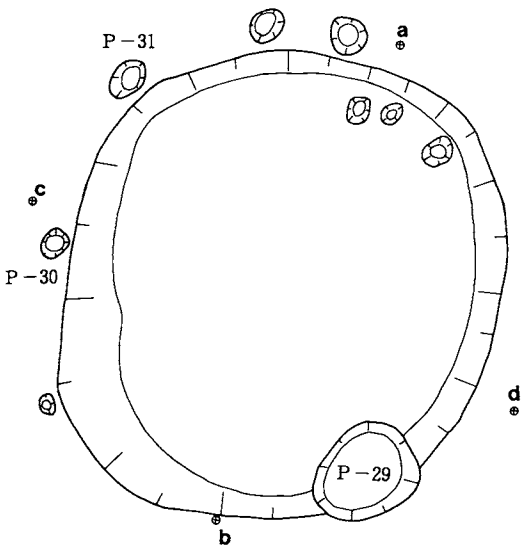
12、13号土坑　G－1区で検出し、地山中の石を掘り起こすための穴と考えられる。不定形な平面プランをもち、底面の凹凸は著しい。覆土の色調は包含層と同質である。13号土坑覆土中より第26図136が出土している。

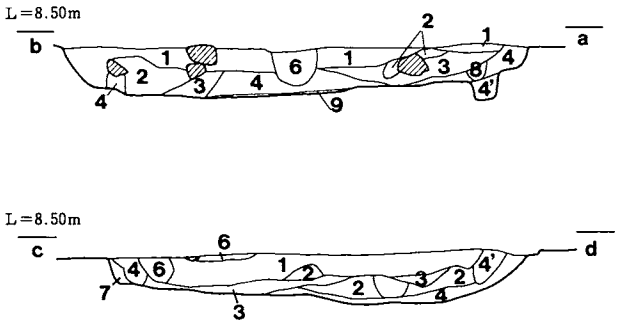
14号土坑　G－1区で検出し、ピット49を切る。円形を呈し径約100cm、深さ約11cmを測る。時期不明。

15号土坑　G－1区で検出した縄文時代の墓壙と考えられる。北方向に主軸をもち、やや崩れた楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。長軸約145cm、短軸約105cm、深さ約15cmを測る。覆土は上層より、暗灰褐色砂質土、灰褐色砂質土、褐茶色砂質土、にぶい褐色砂質土となるが、明瞭な骨片は確認できなかった。土坑南東端の遺構検出面のレベルに、北側に口縁部を向けて第23図89の深鉢が横位置で埋納されている。16号土坑と同様に土器をおそらく被葬者の足元部分に横たえて供献したものと考えられる。また第28図203も出土している。

16号土坑　G－2区で検出し、やはり縄文時代の墓壙と考えられる。北々東方向に主軸をもち、隅丸長方形を呈する。壁はしっかりと立ち上がり、底面は平坦である。長軸約160cm、短軸約85cm、深さ約14cmを測る。覆土は上層より、濁暗褐灰色砂質土、地山土・炭化物の混じる暗褐灰色砂質土となり、骨片は確認できなかった。暗褐灰色砂質土中、底面より約12cm上のレベルに、第24図90の深鉢を主軸方向北側

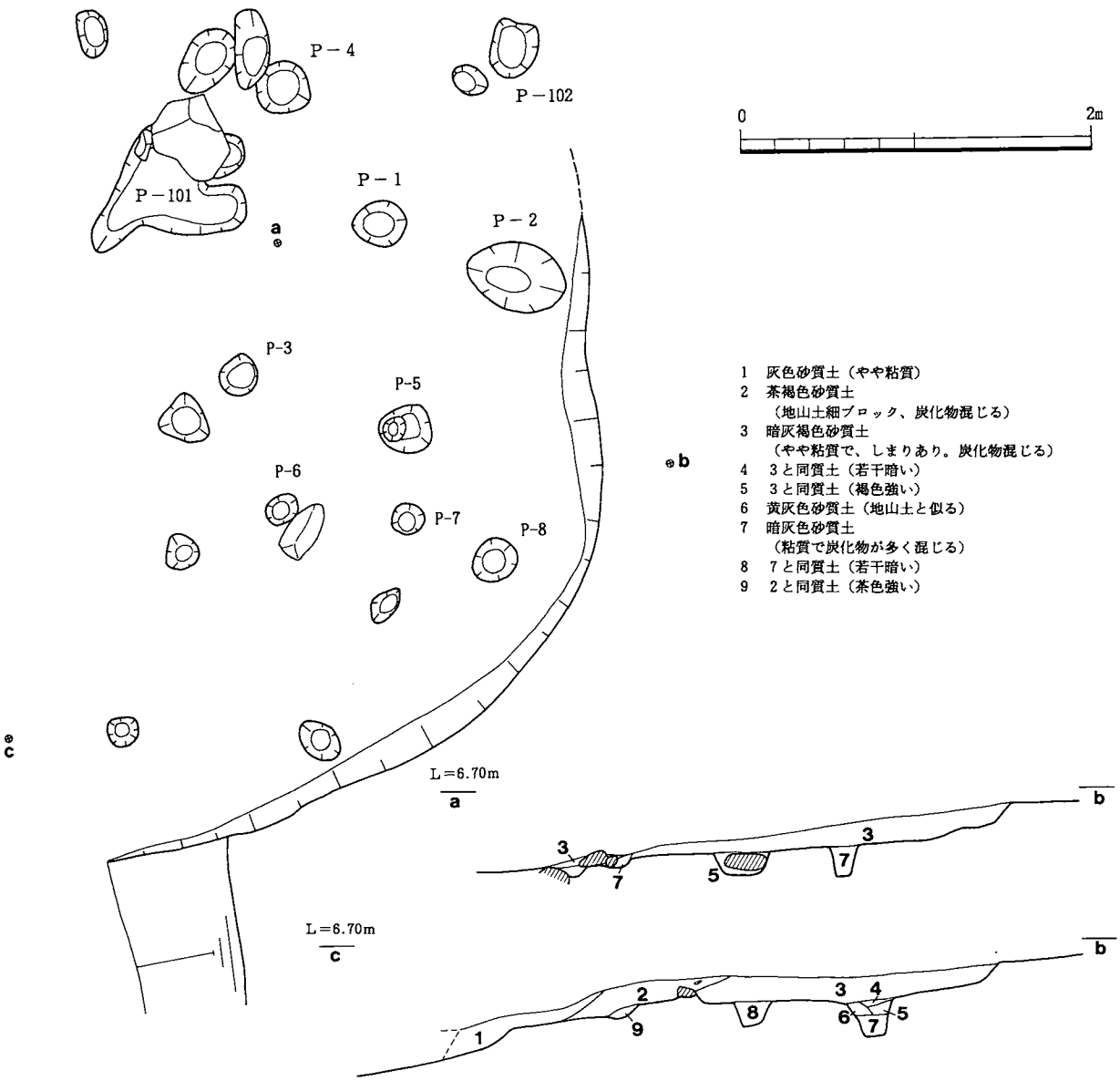
1号竪穴状遺構





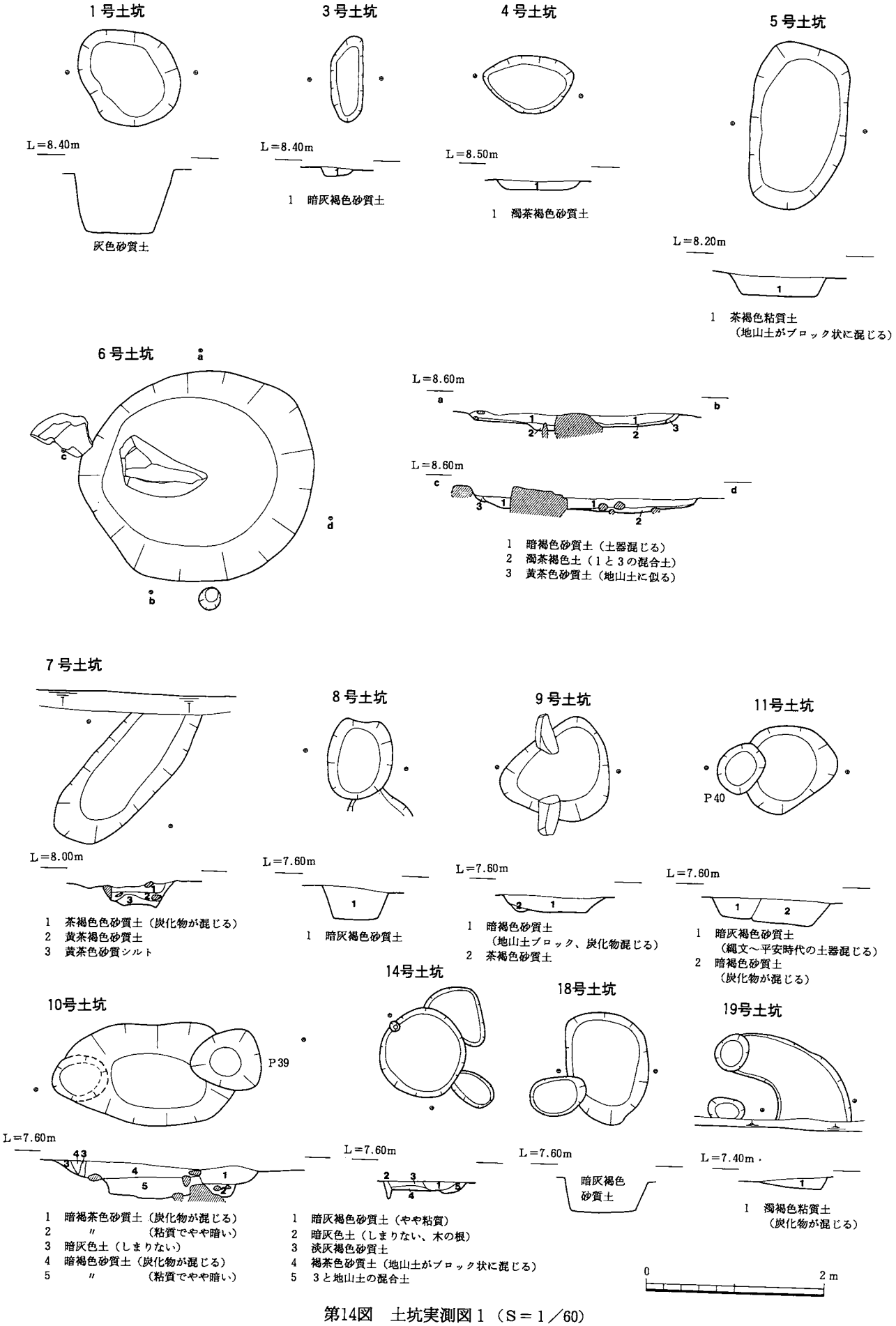
1　暗褐色砂質土（土器が多く混じる）
2　茶褐色砂質土
3　褐色砂質土（2と同質土）
4　黄茶色砂質土（　〃　）
5　2と同質土（褐色強い）
6　黒褐色シルト
7　黄茶色地山質土
8　3、4の混合土
9　黒色炭化物

2号竪穴状遺構



1　灰色砂質土（やや粘質）
2　茶褐色砂質土
　（地山土細ブロック、炭化物混じる）
3　暗灰褐色砂質土
　（やや粘質で、しまりあり。炭化物混じる）
4　3と同質土（若干暗い）
5　3と同質土（褐色強い）
6　黄灰色砂質土（地山土と似る）
7　暗灰色砂質土
　（粘質で炭化物が多く混じる）
8　7と同質土（若干暗い）
9　2と同質土（茶色強い）

第13図　1、2号竪穴状遺構実測図（S＝1／40）



第14図　土坑実測図1（S＝1／60）

に口縁部を向け、横たえて埋納している。

17号土坑　F－2区で検出した不定形な縄文時代の大型の土坑である。東西方向340cm、南北方向200cm以上を測り、壁はしっかりと立ち上がる。土層観察より自然石を入れながら意図的に埋められたと考えられ、後に第16図土層7～9、12を覆土とするピット（径約100cm、深さ28cm）、およびピット50がつくられる。前者のピットは覆土中に骨細片を含み、墓壙の可能性をもつ。17号土坑底付近より第26図151の深鉢、第31図37の磨き石を除き、遺物はほとんど出土していない。なおピット50には正位置に据えられた状態でほぼ完形の深鉢（第24図91）が埋められている。

18号土坑　G－2区で検出し、楕円形を呈する。長軸約130cm、短軸約95cm、深さ40cm弱を測る。底面は平坦で、覆土は暗灰褐色砂質土の単層である。図化可能な遺物がなく、時期不明。

19号土坑　G－1区に位置する溝状の浅い土坑である。幅50～80cm、深さ1～2cmを測り、覆土は濁褐色砂質土の単層である。出土遺物はなく、時期不明。

20号土坑　G－1区で検出した。近代以降の素掘りの井戸と思われる。やや崩れた楕円形を呈し、長軸約130cm、短軸約110cm、深さ約30cmを測る。覆土は灰色の泥土で、出土遺物はない。

21号土坑　L－3区で検出した縄文時代の土坑である。やや崩れた円形を呈し、径約70cm、深さ約22cmを測る。覆土底付近(第16図第4層)に骨細片が混じることから、墓壙の可能性をもつ。第22図63が出土している。

22号土坑　L－3区で検出した縄文時代の土坑と考えられる。略円形を呈し、2段に掘り込まれる。径80～60cm、深さ約30cmを測る。図化できる遺物は出土していない。

23号土坑　L－2区で検出した。長軸220cm以上、深さ約20cmを測り、覆土は暗褐色砂質土の単層である。出土遺物がないため、時期は不明である。なお24号土坑は欠番である。

25号土坑　H－2区で検出し、地山中の石を掘り起こすために掘られた穴と考えられる。覆土は暗灰色粘質土。

26、27、29号土坑　I－1区で検出した縄文時代の土坑と考えられる。やや崩れた楕円形を呈し、覆土は暗灰褐色砂質土を基調とする。図化可能な遺物はない。

28号土坑　J－2区で検出した近代以降の土坑である。覆土中に鉄筋を含む。縄文時代の深鉢（第21図33）が出土している。

30号土坑　I－1区で検出し、やや崩れた円形を呈する。径約95cm、深さ20cm強を測り、底面の凹凸が著しい。覆土は暗褐色砂質土で、図化可能な遺物は出土していない。

31号土坑　J－2区で検出し、28号土坑に切られる。やや崩れた円形を呈し、径約110～120cm、深さ約35cmを測る。覆土第1層中に骨細片が混じる。図化可能な遺物はない。

32号土坑　L－4区で検出し、1号不明遺構を切る。隅丸長方形を呈し、長軸約110cm、短軸約80cm、深さ約20cmを測る。覆土は暗灰色砂質土の単層で、出土遺物がないため、時期不明である。

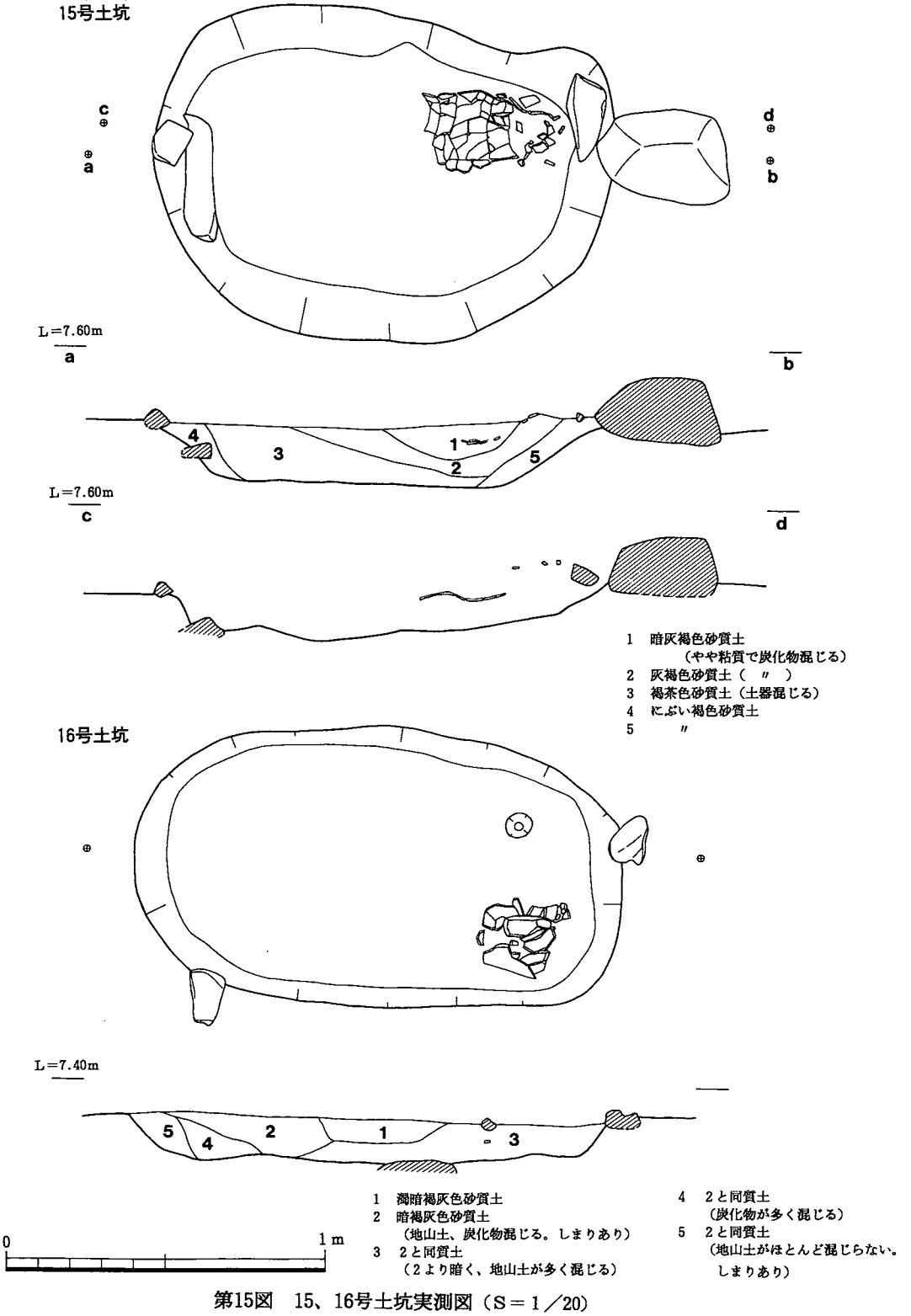
33号土坑　L－4区で検出し、2号不明遺構を切る。崩れた円形を呈し、径130～150cm、深さ約20cmを測る。覆土は上層より、炭化物の混じる暗灰褐色砂質土、地山土の混じる暗褐色砂質土となる。第23図88の深鉢が出土している。

34号土坑　K－3区で検出し、本来2つの土坑が隣接したものと考えられる。覆土が包含層と同じ色調のため、底付近まで掘り下げ、プランを確定した。2つの土坑とも楕円形を呈し、長軸110～120cm、短軸80～90cmを測る。黒色粘質土中に自然石、焼土、縄文土器、石器がおりかさなって堆積していた。遺物は土坑中最も多く出土している。土器では第20図2～4、第21図14、15、20、27～30、40、45、第22図53、62、65、82、第25図107、第27図178、第28図181、185、187、202、204、207、208、第29図217が、

また石器では石鏃（第30図２、７）、石匙（第30図15）、軽石（第30図25）がある。

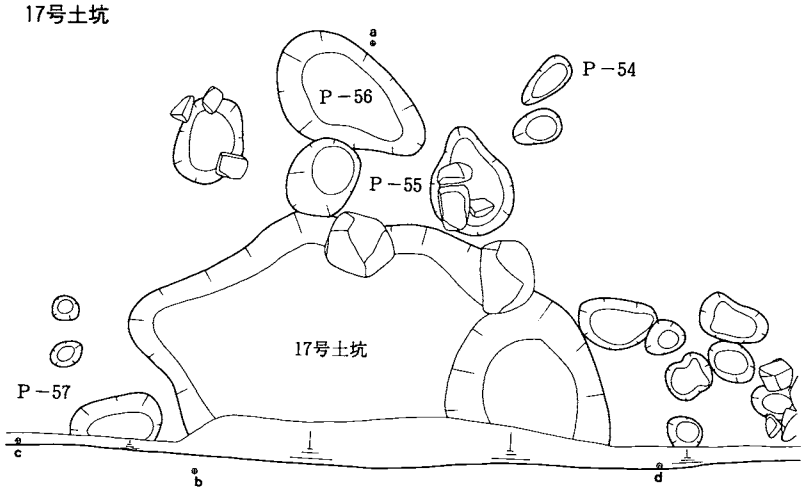
第３節　溝

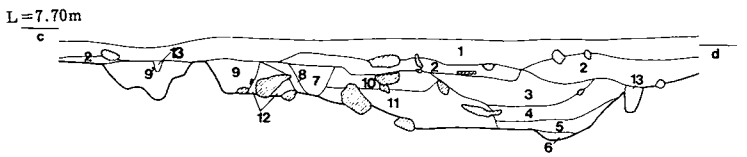
１～７、10号溝　Ａ、Ｂ区で検出し、それぞれ平行または直交する。調査区脇の集落から畑地に通じる現農道と方位が一致、覆土中に近代以降の遺物が混じることから、比較的新しい時期に属すると考えられる。覆土は暗灰色～暗灰褐色砂質土を基調とし、７号溝より第30図33の叩き石が出土している。



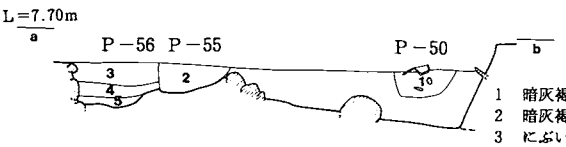
第15図　15、16号土坑実測図（Ｓ＝１／20）

17号土坑



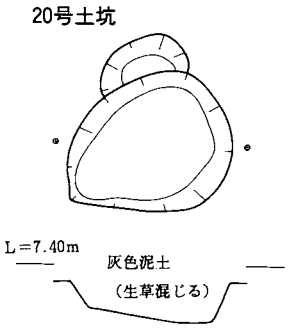


1　耕作土（灰褐色砂質土）
2　暗灰褐色砂質土
　（炭化物、土器が混じる）
3　茶褐色砂質土（　〃　）
4　〃　（地山土が混じる）
5　茶褐色砂質土
　（骨片、炭化物、焼土混じる）
6　暗灰色砂質土（粘性強い）
7　暗灰褐色砂質土
　（炭化物混じる）
8　7と同質土（やや明るい）
9　濁暗灰褐色砂質土
10　濁色砂質土と地山土の混合土
11　茶褐色砂質土と地山土の混合土
12　暗茶色砂質土（しまりあり）
13　暗灰褐色砂質土（杭痕）

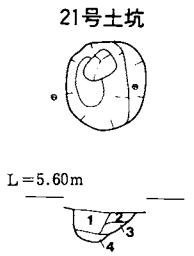


1　暗灰褐色砂質土（炭化物が混じる）
2　暗灰褐色砂質土
3　にぶい灰褐色砂質土
　（地山土ブロック状に混じる）
4　暗灰褐色砂質土
　（やや粘質で地山土ブロック状に混じる）
5　4と同質土
　（粘質で灰色強い）

20号土坑

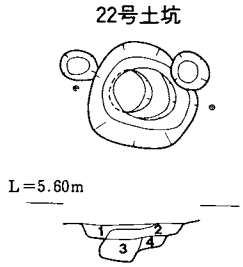


21号土坑



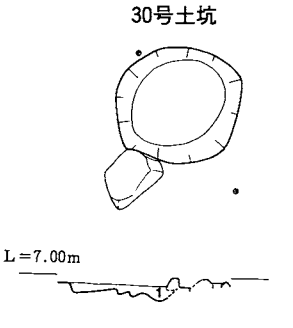
1　濁暗褐灰色砂質土
　（地山土がブロック状に混じる）
2　暗褐色砂質土
　（炭化物、土器が混じる）
3　にぶい暗褐色砂質土
　（地山土がブロック状に混じる）
4　暗灰色砂質土
　（少量の骨片が混じる）

22号土坑



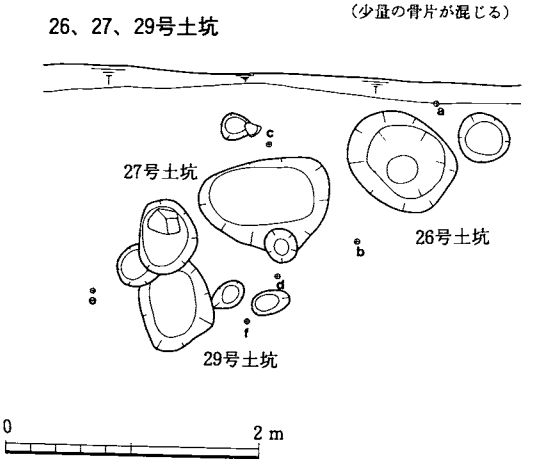
1　灰色砂質土と地山土の混合土
2　暗褐色砂質土と地山土の混合土
　（しまりあり、土器混じる）
3　暗褐灰色砂質土（しまりない）
4　2と同質土（礫混じる）

30号土坑

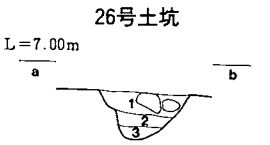


1　暗灰褐色砂質土

26、27、29号土坑

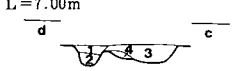


26号土坑



1　茶褐色砂質土（礫多く混じる）
2　暗灰褐色砂質土
3　〃　（粘質で、炭化物混じる）

27号土坑



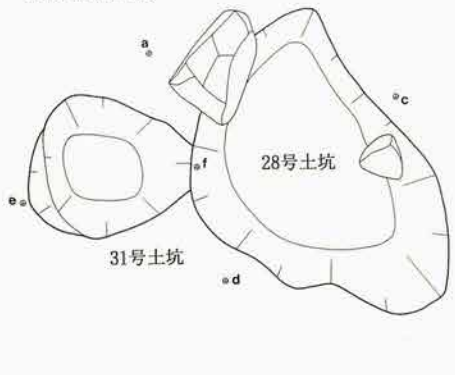
1　濁暗褐色砂質土
2　暗灰褐色砂質土（粘質で炭化物混じる）
3　暗灰褐色砂質土（炭化物混じる）
4　3と地山土の混合土

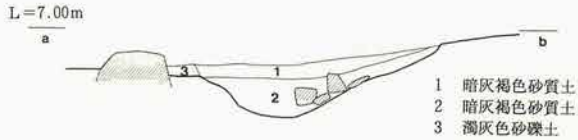
29号土坑

1　暗灰褐色砂質土（炭化物混じる）
2　濁褐色砂質土
3　濁茶褐色砂質土
4　暗灰褐色砂質土（やや粘質）

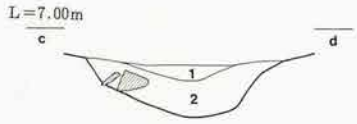
第16図　土坑実測図２（S＝１／60）

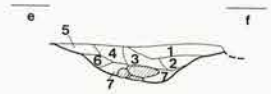
28、31号土坑





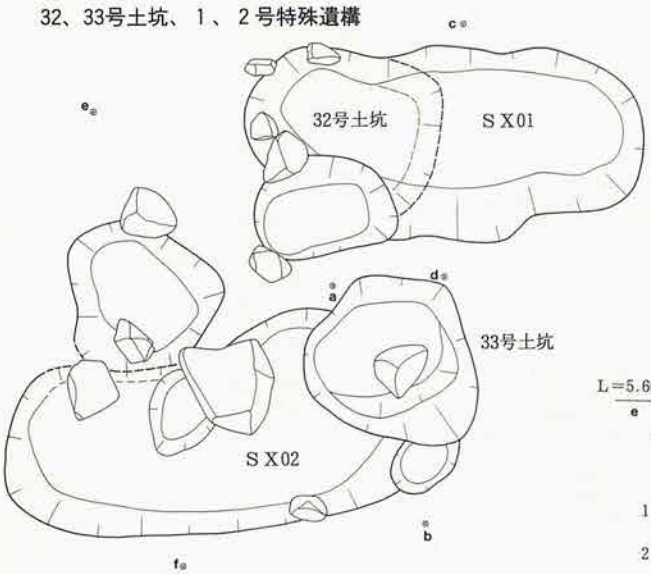
1　暗灰褐色砂質土（鉄筋混じる）
2　暗灰褐色砂質土（礫混じる）
3　濁灰色砂礫土

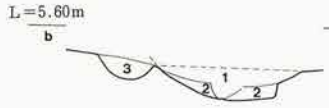




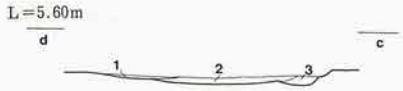
1　濁灰褐色砂礫土（骨片混じる）
2　暗灰褐色砂質土（しまりなく、炭化物混じる）
3　濁暗灰褐色砂質土
4　濁暗黄茶色砂礫土
5　暗灰色砂礫土
6　〃　（やや暗い）
7　褐灰色砂礫土

32、33号土坑、1、2号特殊遺構

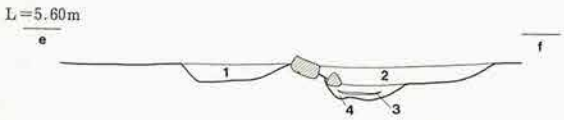




1　暗灰褐色砂質土（炭化物混じる）
2　暗褐色砂質土（地山土混じる）
3　暗茶褐色砂質土



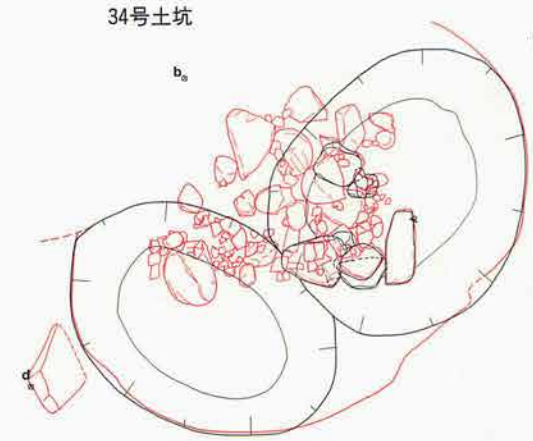
1　暗灰色砂質土
2　〃　（やや粘質）
3　濁黄茶色砂質土



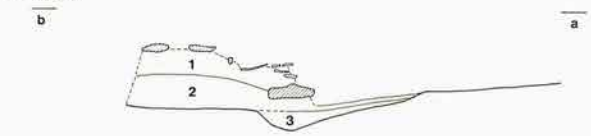
1　濁茶褐色粘質土
（灰色土がブロック状に混じる）
2　暗灰褐色弱粘質砂
（炭化物、土器が混じる）
3　赤茶色焼土（しまりあり）
4　暗褐色砂質土
（焼土粒、炭化物、土器が混じる）

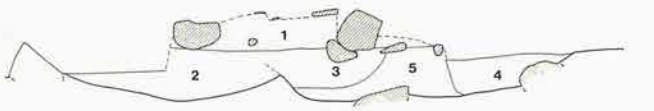
0　2 m

34号土坑



1　黒色粘質土（ぼろぼろとしている）
2　黒褐色弱粘質土（しまりあり）
3　黒褐色弱粘質土（地山土がブロック状に混じる）
4　1と同質土（比較的しまる）
5　淡茶褐色弱粘質土（地山土がブロック状に多く混じり、しまりあり）





0　1 m

第17図　土坑他実測図（S＝1／60、1／30）

8号溝　B－2区で検出し、覆土は暗灰褐色砂質土の単層である。遺物は出土していない。

9号溝　C－2区で検出したL字状に屈曲する溝である。覆土の色調、位置関係から1号竪穴状遺構に付属する施設の周溝の可能性が高い。幅20～70cm、深さ10～20cmを測り、肩部はしっかり立ち上がる。図化可能な遺物は出土していない。

第4節　その他の遺構

1号石組遺構　E－2区南端で検出した性格不明の石組遺構である。主軸を北方向にとりながら長方形に地山を掘り込んだ後、暗褐色砂質土で押さえながら10～50cm大の自然石を二重に配する。外側の石組は南北方向270cm以上、東西約150cmを測り、北・西側は比較的大きい地山土に入る石をそのまま利用、東・南側は人為的に石を配している。内側の石組は、さらに一段深くなり、西側を除いて20～30cm大の自然石をならべている。南北方向約120cm、東西方向約70cmの規模をもつ。覆土は包含層と同質の炭粒の混じる暗灰褐色砂質土で、しまりがない。覆土中より縄文土器細片が多く出土、弥生時代以降の遺物は含まれていない。第22図73、78、83、第25図113～115、120、124～126、128、第26図154、163、164、168、169、171、173、213を図化している。

1号不明遺構　L－3区で検出した楕円形の浅い落ち込みである。包含層と同質の覆土のためプランを明確に把握できず、地山土まで検出面を下げて確認した。そのため底部のみが残っている。長軸約320cm、短軸約100cm、深さ約20cmを測り、覆土は炭粒が多く混じる暗灰褐色砂質土がレンズ状に堆積している。縄文土器細片が出土している。

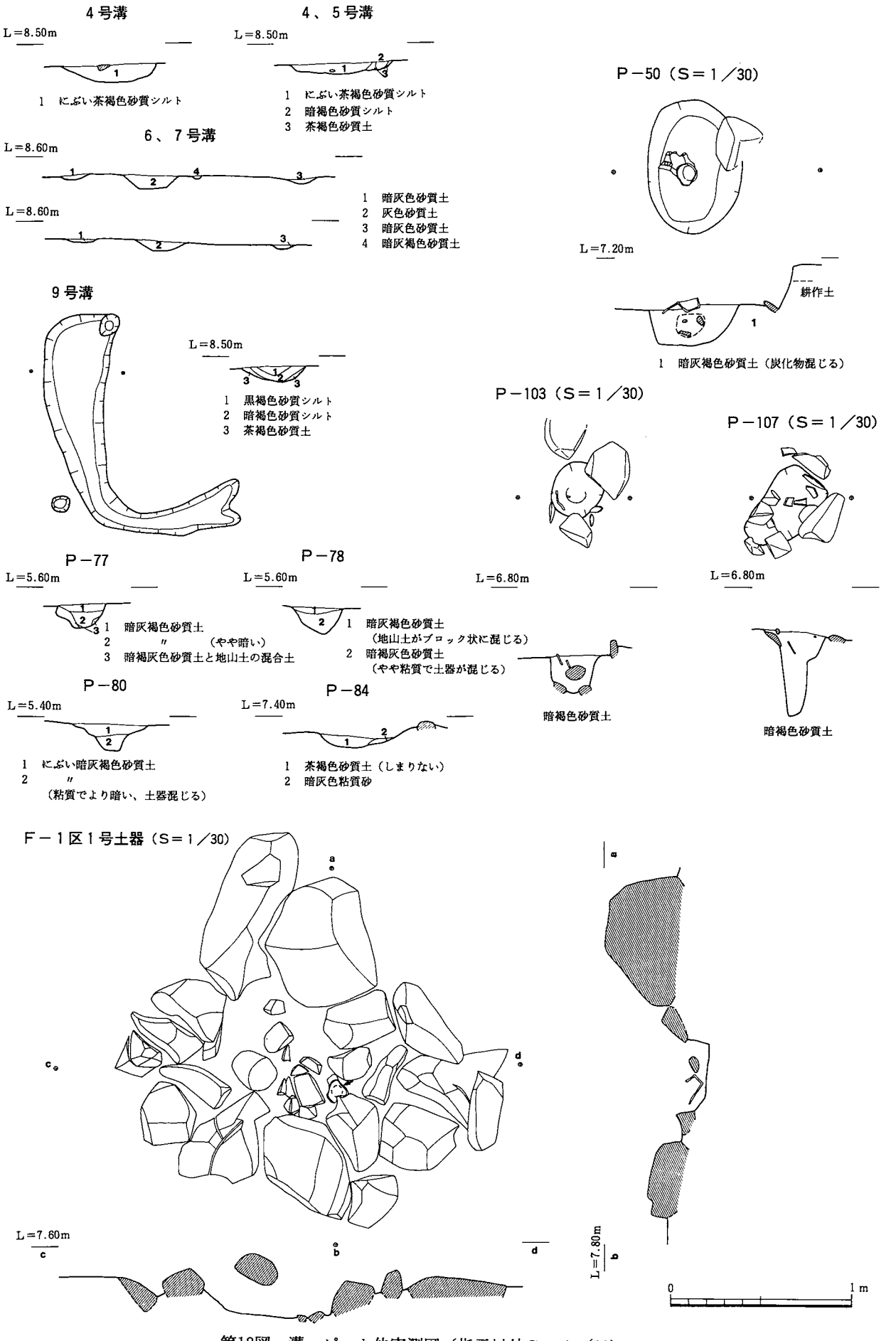
2号不明遺構　L－4区に位置し、1号不明遺構と並列する楕円形の浅い落ち込みである。1号不明遺構と同様な理由により底部のみを検出、長軸約350cm、短軸約150cm、深さ約20cmを測る。覆土は炭粒の混じる暗灰褐色砂質土で、一段深くなった部分には一部面をなす焼土層や、焼土粒・炭化物が多く混じる暗褐色砂質土が堆積している。縄文土器細片（第25図130）が出土している。

1号土器　F－1区の地山自然石の間のくぼんだ部分に据え置かれた縄文土器である。覆土は包含層と同質の暗灰褐色砂質土で、ほぼ完形の小型の鉢（第25図112）が南側に傾いて確認できた。

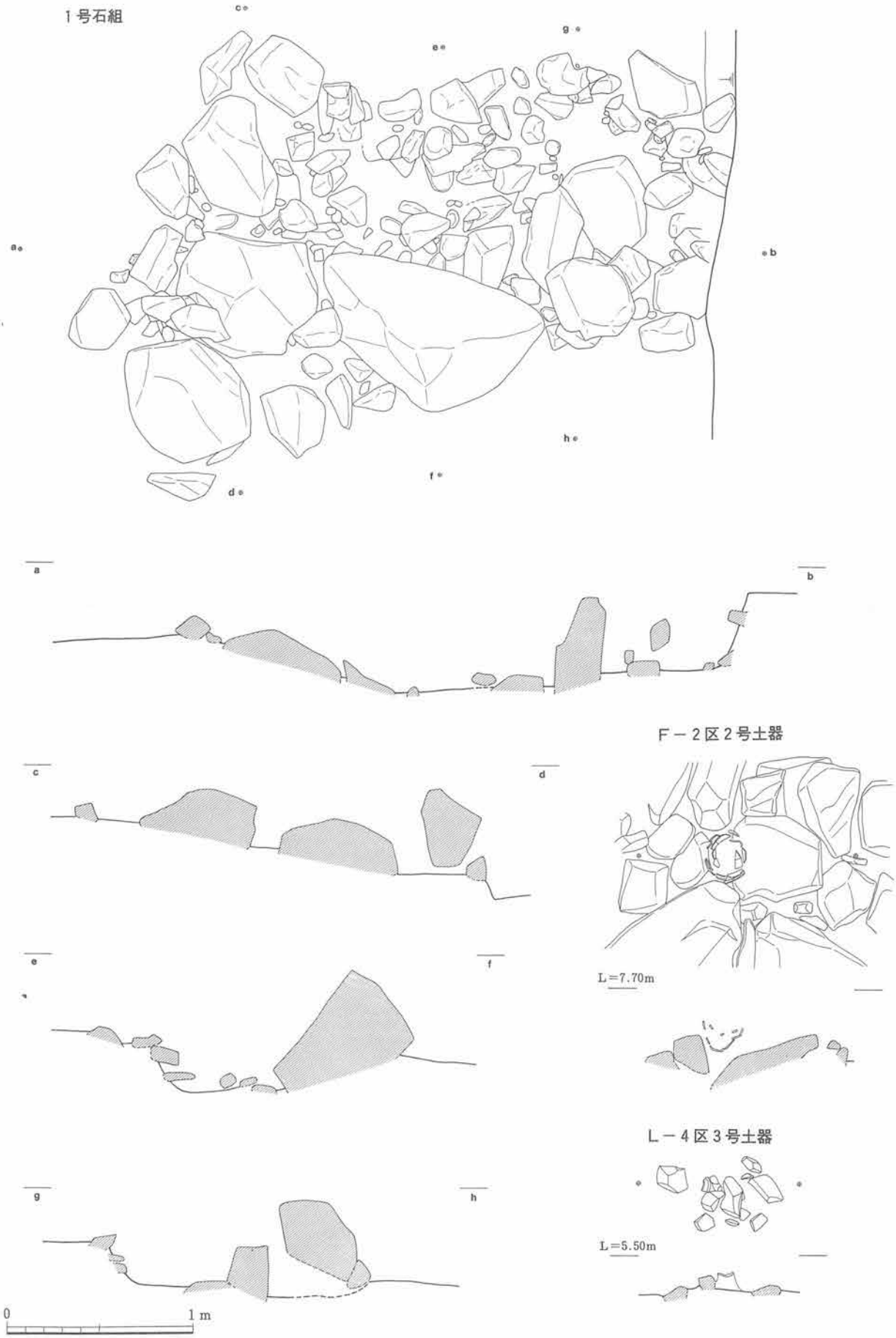
2号土器　F－2区で確認し、1号土器と同様の性格をもつと考えられる。自然石の間に第24図94の深鉢が南側に傾きながら据え置かれる。検出時は深鉢はつぶれ、上部破片が内側に重なっていた。深鉢内は暗褐色砂質土が充満、安山岩質剝片が1点入っていた。1号土器と同様に骨などは確認できなかった。

ピット　調査区では木の根、風倒木痕を含め、多数のピットを検出している。そのうち遺物の出土したピットのみにナンバーをつけている。規模、覆土は第1表を参照されたいが、明瞭に建物に復元できるものはなかった。なおピット70、94、97、106は欠番である。以下、特徴的なものだけ記述する。

ピット11から第32図22の土師器小皿（14世紀前半）が、またピット46から第32図20の弥生時代後期の甕底部、第31図40の磨石がそれぞれ出土している。ピット50には、第24図91の深鉢が底より約20cm上のレベルに若干北側に傾斜して正位置で埋納されている。同時に第30図30の叩き石も出土している。ピット62から近世以降の陶磁器片が、ピット63、64から古墳時代中期の土師器がそれぞれ出土している。ピット76覆土には骨細片が、ピット90覆土には焼土粒がそれぞれ混じる。ピット101から第22図74の縄文土器深鉢口縁部が出土している。ピット87、103、107には第24図92の深鉢口縁部が分かれて入っていた。ピット105より第28図190が出土している。ピット107は深さ約50cmの深い小穴で、図化できなかったものの、覆土上層には縄文土器細片が多く含まれていた。



第18図　溝、ピット他実測図（指示以外S＝1／60）



第19図　1号石組他実測図（S＝1／30）

第1表　ピット一覧表

ピットNo.	地区	径(cm)	深さ(cm)	土色他
1	A－1	32～42	7	茶褐色粘質土
2	A－2	30～42	4	〃（木の根）
3	〃	46×54	15	〃（〃）
4	B－1	56～30	16	灰色砂質土
5	〃	20×20	21	暗灰褐色砂質土
6	〃	20	8	濁暗灰色土
7	〃	16～20	14	暗灰褐色砂質土
8	〃	50	18	〃
9	A－2	90×44	13	〃（木の根）
10	〃	22×18	20	〃
11	〃	36～40	22	〃（木の根）
12	B－2	20	9	〃
13	〃	20～12	8	〃
14	〃	14	8	〃
15	〃	20	6	〃（木の根？）
16	〃	70×34	5	〃
17	〃	64～62	12	〃
18	〃	14	8	灰褐色粘質砂
19	C－2	18～20	4	濁暗灰褐色砂質土
20	〃	16	9	〃
21	〃	24～20	25	〃（柔らかい）
22	C－1	32×18	13	〃
23	〃	30～40	4	〃
24	〃	26	4	〃（柔らかい）
25	〃	56×71	7	灰褐色砂質土
26	〃	18	5	〃
27	〃	14	2	暗灰褐色砂質土
28	〃	26	23	濁暗灰褐色砂質土
29	C－2	50～56	15	濁灰色粘質土
30	〃	16	8	暗灰褐色砂質土
31	〃	18	5	〃
32	E-2上層	20	19	暗灰色砂質土
33	〃	22～14	11	〃
34	〃	20	21	〃
35	〃	26	12	〃
36	〃	82～140	8	暗灰褐色砂質土
37	E－1	34	19	暗灰色粘質砂
38	〃	36	12	暗灰褐色砂質土
39	F－1	80～70	29	暗褐茶色砂質土
40	G－1	48～56	21	暗灰褐色砂質土
41	〃	30	8	〃
42	〃	40	12	〃
43	〃	30	17	〃
44	〃	62～74	21	灰色粘質土
45	〃	30～44	13	暗灰褐色砂土
46	〃	46	20	〃
47	〃	24	6	〃
48	H－1	34～48	12	灰色粘質土(柔らかい)
49	G－1	34～50	9	暗褐色砂質土
50	F－2	52～75	22	暗灰褐色砂質土
51	〃	30～90	14	暗褐色砂質土
52	〃	22～24	12	暗灰色砂質土
53	〃	20～28	8	〃
54	〃	24～50	10	〃
55	〃	56～62	12	暗灰褐色砂質土
56	〃	134～84	35	第16図参照
57	G－2	70～	34	暗灰褐色砂質土
58	〃	64～44	24	〃
59	〃	60～	23	〃
60	〃	50×42	20	〃
61	〃	58	17	〃（やや暗い）
62	〃	60～	5	茶褐色砂質土
63	〃	20～16	11	暗灰色砂質土
64	〃	30～34	14	〃
65	E－2	20～24	9	記述なし
66	〃	92×50	17	〃
67	〃	90～	6	〃
68	〃	28	12	〃
69	D－2	44～50	21	暗灰褐色砂質土
70	—	—	—	欠番
71	K－3	44～40	25	暗灰色砂質土
72	〃	50×44	6	〃
73	L－3	18～22	14	濁灰色砂質土
74	〃	20	10	〃
75	〃	38	12	暗灰褐色砂質土
76	〃	28	6	〃
77	〃	54	25	第18図参照
78	〃	68～54	33	〃
79	L－3	46	25	暗褐色砂質土
80	L－1	76～80	28	第18図参照
81	〃	42～26	9	暗灰色砂質土(木の根)
82	〃	48～42	11	〃
83	K－2	80～54	16	〃
84	H－2	84～88	19	第18図参照
85	J－2	54	17	暗灰色砂質土
86	J－3	52	12	暗褐色砂質土(木の根)
87	〃	30	9	暗褐色砂質土
88	I－1	20	11	〃
89	〃	60～48	17	褐色砂質土（石多い）
90	〃	48～64	10	暗褐灰色砂質土
91	〃	40～70	20	暗褐色砂質土
92	I－2	90～44	6	暗褐色砂質土(木の根)
93	I－3	70～50	21	暗灰色砂質土
94	—	—	—	欠番
95	J－2	80×20	7	灰褐色砂質土(やや粘)
96	I－1	32～48	19	暗灰褐色砂質土
97	—	—	—	欠番
98	K－3	28～36	13	濁暗灰色砂質土
99	L－4	60～40	25	暗灰褐色砂質土
100	〃			灰褐色砂質土
101	K－1			〃
102	J－2	26～30	15	〃
103	〃	33～28	12	暗褐色砂質土
104	〃	36×40	14	暗灰色砂質土
105	〃	50～40	18	〃
106	—	—	—	欠番
107	J－2	56～74	50	暗褐色砂質土
108	〃	24～34	17～	〃

第５章　出土遺物

第１節　縄文時代の土器

本遺跡から出土した縄文土器は早期末から中期におよぶ時間幅を持つが、遺存状態が悪く、器形、文様の全体が窺えるものは少ない。また、その出土量は整理作業終了段階でＬⅡ型コンテナバット28箱にすぎない。本来であれば遺構単位で報告すべきであるが、一括性の認められる遺構が少ないため、出土した縄文土器を一括し、胎土、文様等により分類し、本遺跡を特徴付ける資料221点を図示した。

第１群土器（第29図209～212）

早期末に位置付けられる一群で、胎土に繊維を含む。209は表裏に条痕調整が施される。外面は右下がり、内面は口縁部を横、以下を右下がりに調整し、口唇部には刻みを施している。211は器面の荒れが激しいため判然としないが、外面に横方向基調の条痕調整を施すようである。210は表裏に縄文を施すものであるが、内面は荒れが激しく拓本では見づらい。外面は同一原体で施文方向を変え、羽状を表出する。212は無文地に波状の隆帯が巡るものである。隆帯上には刻みが施され、隆帯は上方が高く下方が低い断面三角形となる。東海系の入海Ⅱ式に比定される。

第２群土器（第20図、第21図、第24図94）

概ね従来の朝日Ｃ式に比定される土器群である。他遺跡の完形例からすると底部から開いて立ち上がり、同部で一旦くびれ、そこから再びやや内湾気味に開いて立ち上がり口縁にいたる器形を採るものが多い。本遺跡では全体の窺える資料はない。文様等から６類に分類した。

第１類（１、２、６～12）　口縁部文様帯にコンパス文が施されるものである。１は頂部の丸い波状口縁器形を採る。半裁竹管の内皮側で口縁上部から間隔を開けた位置から平行沈線文２条、コンパス文２条を密接させ繰り返し施文している。また、口縁端部内面には断面形が丸みを持つ沈線が１条引かれ、口唇部は外面側を撫で調整することにより丸みを持たせている。

２は頂部に瘤状の突起を持つ山形の波状口縁器形を採る。まず、波頂部から１条の垂線を頸部に、波底部からはこの垂線の下端に向け１条の沈線を引き下ろし、山形の波状口縁とこの沈線で大きな菱形を２分する三角と波底部を頂点とする三角の区画を作り出していると考えている。その後、口縁端部からやや間隔を空け、竹管の内皮側で片側を重ね３本一組の平行沈線、間隔を開けコンパス文１条の繰り返し施紋が行われている。コンパス文は一部波状化した部分が認められる。波頂部の平行沈線の交点には中央に刺突の施された円環状モチーフが置かれている。

９も波状口縁器形と考えられる。２条２組の平行沈線で菱形の区画文を表出し、これにコンパス文と爪形文が組み合わされる。破片が小さく数も少ないため文様構成は判然としない。また、平行沈線は重ねて引かれるため間隔の狭い４本の沈線となっている。

６～８、10、11は前述のものと同様な文様構成を採ると思われる。10は頸部に１条の刺突文列を持ち、これが文様帯の下端を表している。６、７は波状口縁で６は押圧、７は爪形文が口唇部に施される。ただ、いずれの個体の平行沈線も１の様に規則正しいものではない。８はコンパス文が多段に施される。11はコンパス文と爪形文が組み合わされ施文されている。

12は施文具不明の地文上にコンパス文が引かれるものである。地文は一見細かい撚糸文の様に見えるが、穴の底が尖っている。土器片下端には半裁竹管による平行沈線が２条、１列を重ねるように引かれているのが確認できる。

第２類（13～21）　口縁部文様帯に爪形文および爪形文類似の文様が施されるものである。13は口縁端部に半裁竹管の内皮側で一端を重ねるように４条の平行沈線文を巡らせ、この下に爪形文に似せた縦

位の短沈線列を並べている。この下は平行沈線文が３条引かれ、再び縦位短沈線列となる。14は別個体だが同様な文様構成となろう。15～17は平行沈線間に爪形文を施すものである。15、17では２列の爪形文が平行沈線間に施され、16、17は文様帯の下端に１条の爪形文例が確認される。

18は多条の平行沈線文間に爪形文が施される。爪形文は半裁竹管の両端を交互に移動させる施文方法を採り、爪となる部分の痕跡を残さない。平行沈線文は間隔を開けて３条確認できる。

19～21は平行沈線文が施されないものである。19はやや幅の狭い爪形文列を多段に巡らせ、その中に半裁竹管の内皮側をやや長めに引いた爪形文列を１条配している。20は連続爪形文列を３段巡らせ、その下位に刺突文列を１列配する。最下位の連続爪形文列と刺突文列は胴部の縄文帯に重なって施文されている。21は幅の広い連続爪形文列とそれより幅の狭い爪形文列を交互に配するもので、やはり最下位の爪形文列は胴部の縄文帯上に施文されている。この２点は後述する第６類と同様の文様構成を有する。

第３類（30～33）　口縁部文様帯に平行沈線文を多条に引くもので、30、31、33は水平方向に引かれている。32は平行沈線文が菱形を描くようである。

第４類（３～５、22～29、34～36）　口縁部文様帯に縄文が施されるもので、第１類～第３類の胴部となるものも含めた。３は口径30cmの平口縁の深鉢形土器である。胴部下半を欠くが底部から内湾気味に開いて立ち上がり、途中で一旦くびれ再び内湾気味に開いて立ち上がる器形となるものと思われる。口唇部は頂部から外面にかけて撫で調整が行われ丸みをもたせている。器形外面にはＲＬ、ＬＲの縄文原体を横帯施文し、帯内で原体を持ち変えることにより、２帯で一つの菱形を描出する部分が認められる。口縁部には半裁竹管内皮側で平行沈線文を２条巡らせるが、下位の１条は片側が器面から離れ気味で、３本の沈線となる部分がある。くびれ部付近には１条の爪形文列が配される。

４は波頂部に瘤をもつ山形の波状口縁器形に復元した。３と同様な器形だが口縁部の開きが３に比べ強い。地文の縄文、口縁部の文様構成とも３と同じであるが、口縁端部の平行沈線文は半裁竹管が重ね引きされ、雑然とした沈線文となっている。また、くびれ部の爪形文も３とは趣が異なる。

５は小さな山形突起を４単位有する深鉢に復元した。山形突起は外側から押圧を加えられ口縁内側に入り込む。器面の乾燥が進んだ段階で施文されたのか地文の縄文ははっきりとしない。羽状の痕跡が認められるものの、４とは異なり山形突起の下位に菱形構成を記すような施文方法ではない様である。口縁端部には半裁竹管で２～３条の平行沈線文を引くようだが同様にはっきりしない。口唇部は突起部分を除き平に撫で調整されている。

22、23は同一個体と思われる。３と同様な器形、文様構成と思われるが、口縁部の開き方は４に近く、くびれ部の爪形文を爪形文に似せた縦位の短沈線列に置き換えている。24～29も同様な文様構成を採る土器の口縁部破片である。27、29は口唇部に押圧が加えられ小波状口縁となる。26は口縁端部内面に隆帯が貼つけられている。34～36はくびれ部に爪形文を配するもので第１類～第３類の胴部片を含む。いずれの縄文も羽状を構成する。35の原体は０段多条であろう。

第５類（37、94）　器面を無文とするものである。37は直線的に開き口縁端部付近でやや直立気味に立ち上がる平口縁の深鉢と思われる。94は底部からやや丸みを持ち外反気味に開いて立ち上がり体部内位付近で一旦内屈し、再び開いて立ち上がる深鉢形土器であろう。

以上は基本的に胎土に繊維を含む土器で、口述する第６類に比べ器壁が厚い。８、９は灰白色を呈しやや他とは趣が異なる。

第６類（38～47）　器面に連続爪形文を施すもので基本的に胎土に繊維を含まない。北白川下層Ⅱａ式に比定される個体である。波状口縁（42～44）と平口縁（38～41）があり、口唇部端面に爪形文を施すもの（38、39、42）と口唇部内面の角に爪形文を施すもの（40、41、43）、無施文のもの（44）があ

る。38は山形の突起を有する口縁で突起2単位以上が一組となり配されるものと思われる。また、43は口唇内面に爪形文を施した後、さらに刺突文を加えている。連続爪形文は平行に多段に施文されるもの（38～40、43～47）と鎖状（41）、格子状（42）のモチーフを描くものがある。44は口縁端部からやや間をあけ、湾曲の弱い爪形文が施される。47には連続爪形文列間に別種の爪形文列が1列組み込まれている。48は口縁を無文とし、くびれ部に連続爪形文列を置いている。

第3群土器（第22図49～71）

概ね福浦下層式に比定される土器群である。本遺跡では出土量が少なく、器形全体が窺えるものはない。

第1類（49～51）　縄文を地文とし、口縁端部に爪形文列を配する類である。49、50は2条、51は1条の爪形文列を配している。地文の縄文は非結束の羽状縄文（49、51）と斜縄文ＬＲ（50）がある。

第2類（52～59）　無文地の口縁部文様帯に平行沈線と爪形文で文様を描くものである。52は平行沈線文を間隔に空け2条巡らせた後、その間と下位に爪形文列を配している。54は頸部に半裁竹管の内皮側で片側を重ねるようにして3条5本組の平行沈線を巡らせた後、その上位と下位の平行沈線に爪形文を施している。それより上位には同一の工具で格子目文を描き、交点には半円状の刺突が施されている。53は刺突が円環状となるが同様な文様構成となろう。55は口縁に半裁竹管の内皮側でやや間を置いて2条の平行沈線を引き、その下は片側のみを当てて1本の沈線を引いている。その後、2条の平行沈線間および沈線との間に爪形文を施している。その下位の文様帯には縦位の平行沈線を間隔を空けて引いている。口唇部には粘土を貼付け三角の突起を作り出し、外面には刺突、内面には三角形の印刻を施している。56も同様な文様構成を採るが、口縁端部の平行沈線、爪形文が1列となり、以下の文様帯には格子目文が加わるようである。

57～59は1条の平行沈線に爪形文が充塡されるものである。いずれも三角形のモチーフを描いている。57、59は口縁端部に爪形文を充塡した平行沈線を1条巡らせているが、58は平行沈線を伴わない爪形文列2条に置き換えている。59は鉢形の器形となるものであろう。三角のモチーフの他に円環状の刺突が施されている。

第3類（60、61）　無文地の文様帯に円環状の刺突を施した縦位の平行沈線を何本か引き下ろし、この間を横位基調の平行沈線で充塡するものである。60では弧状の、61では斜めの平行沈線が充塡されている。

第4類（62～64）　縄文地に半裁竹管による横位の平行沈線を巡らせるものである。62は1条の平行沈線間に爪形文を充塡し、63は1条の平行沈線の上下に押し引き状の爪形文列をそれぞれ2条施している。64は片側を重ねた形で2条の平行沈線を引き、上位の平行沈線間に間隔を開けた刺突を施している。平行沈線の上位は、若干の間隔を開け爪形文列が置かれるようである。

第2類～第4類は諸磯ａ式に類似し搬入品を含むと思われる。

第5類（65～71）　無文地の文様帯に爪形文列を施すものである。65、66を見る限り、文様帯の下位は縄文が横帯施文されるようである。第1群第6類のものより幅の狭い工具を用い、爪形文列も間隔を開けて施している。66を除いては多条に施文されており、施文位置は第1類第6群の爪形文列の間か両端となっている。北白川下層Ⅱｂ式あるいはそれを模倣した土器であろう。

第4群土器（第22図72～87、第23図、第24図90～93、95、第25図96～111）

蜆ケ森式とそれに伴う外来系の土器群である。本遺跡の主体的土器群であり、器形の窺えるものの多くは墓坑と考えられる土坑から出土している。

第1類（72～77）　口縁部の文様帯に粘土紐の貼付けによる隆起線文を施すものである。72は円環状

のモチーフを描いている。73は粘土紐を貼付けたときの爪の痕跡が残る。74は口縁端部からやや間隔を開け３本の隆起線を横位に巡らせるもので、最上位の１本は口唇部から貼付けられ緩く弧を描きながら下位の２本と平行になるように延びている。また、口唇部には刻みが施される。75は縄文施文後に粘土紐を貼付けている。76は粘土紐の上面を撫でつけるが、貼付けの際の爪の痕跡が確認できる。

第２類（77～82）　土器口縁の文様帯部分を比較的幅の狭い粘土紐の積み上げで製作するものである。この粘土紐は外傾接合されその下端部を土器器面より飛び出させることによってやや細目の隆起線を作出している。基本的に隆起線上面の撫でが顕著である。77、82は隆起線の上面に粘土紐の接合の際の押圧痕が、78～80には粘土紐下端を押し付けた際の（あるいはこれと同時に粘土紐の下端を引き出しているのかも知れない。）爪痕跡が残る。81は微隆起線状となり、その部分以外はきれいに撫で調整されている。

第３類（83～93）　土器口縁を無文とするもの、あるいは器面全体を無文とするものである。88は底部から内湾してに開いて立ち上がり、胴部中位で一旦直立した後、今度は外反して平縁の口縁にいたる器形を取る。口径28cm、口縁外面無文部および土器内面に幅の狭い粘土紐接合痕を残す。無文部以下は横位の羽状縄文が施される。85も同様な土器と思われる。92は88と同様な胴部器形の波状口縁の土器であろう。89は径10cmの底部から外反気味に立ち上がり、器体中位で胴部最大径をとり、今度は内傾し、頸部から外反し直線的に開く器形となる。口縁は４単位の波状口縁で底部は上げ底となる。推定口径29cm、胴部最大径は23.7cmである。口縁の無文部には粘土紐接合痕が残り、以下は横位の羽状縄文となる。90は全面無文の土器である。底部から僅かに外反しながら開いて立ち上がりそのまま口縁にいたる。底径10.5cm、口径20.7cmで、器体の内外面に粘土紐の接合痕を残す。91は底部から直線的に開き口縁に至る器形となる。底径7.5cm、口径18.3cm、口縁部を粘土紐接合痕を残した無文とし、以下は横位の羽状縄文を施す。93は91、92のどちらかと同じであろう。口縁部を無文とする土器は無文部を残して縄文を施文するという方法をとる。また、無文部の粘土紐接合痕は明瞭なものではなく、僅かに残るといった程度のものが多い。外傾接合するものも認められるが、そうでないものも多い。

第４類（86、87）　無文地に縦位に粘土紐を貼付するものである。86では内湾する口縁に細い棒状の粘土紐が２本１組で、87では半円形の突起状にしたものが縦位に貼付けられている。

第５類（95）　器面全面を横位の羽状縄文で覆うものである。底部から僅かに内湾気味に開いて立ち上がりそのまま口縁にいたる。口縁よりでは湾曲がやや強くなり、口縁部は僅かに内屈している。底径11.7cm、口径24cm、最大径は口縁直下にあり25cmである。羽状縄文は帯内で原体を変え、菱形を構成する様である。

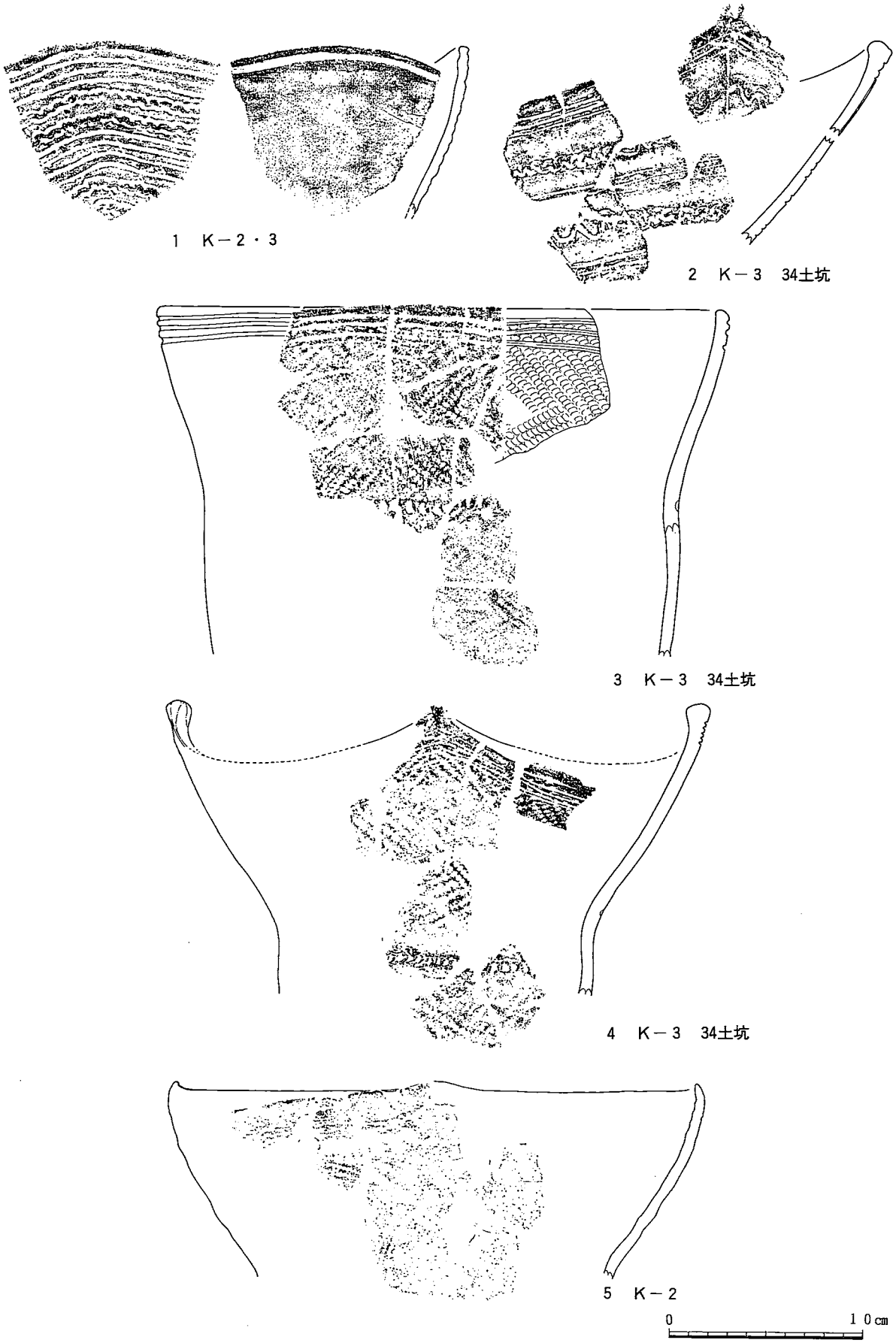
第６類（96～98）　格子目文を施すものである。96は口縁に爪形文と水平刺突を施した隆線を交互に２段配し、以下に半裁竹管で斜格子目文を描いている。格子の交点には円環状の刺突が施される。97は斜格子目文を施すが円環状の刺突はなされていない。98は水平方向の沈線に斜めの沈線を加えるもので施文具は棒状の工具である。諸磯ｂ１～２式と思われる。

第７類（100）　沈線で文様を描くものである。99は半裁竹管で口縁端部に口縁に平行した沈線を引き、以下は同様な工具で渦巻紋を描くようである。諸磯ｂ２式の沈線文系の土器であろう。

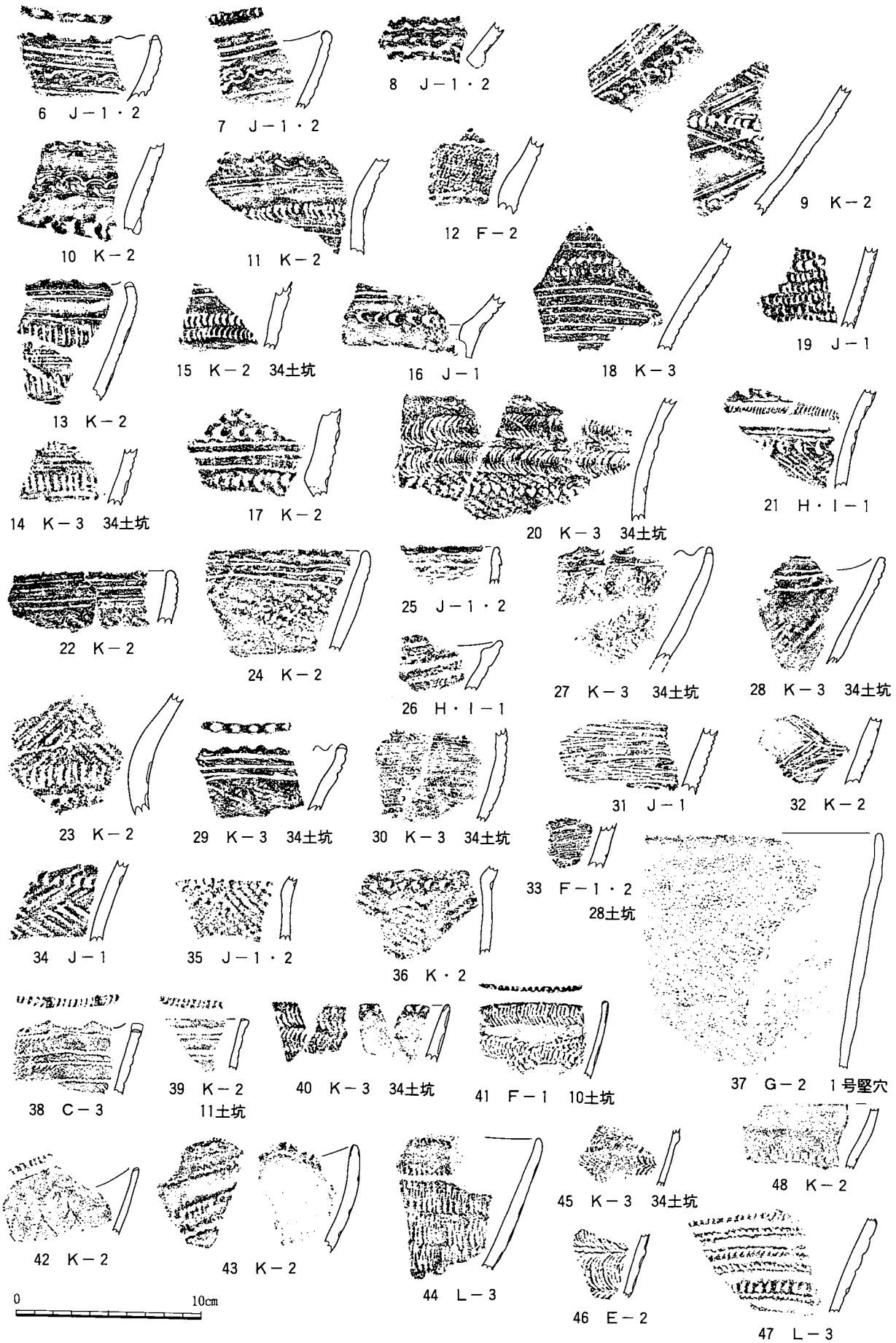
第８類（99）　強く内湾したキャリパー状の口縁部をもつ土器である。器面が荒れているため地文を持つのかはっきりしない。粘土紐を横位に貼付けるもので、口縁端部は水平に、以下３条は波状にそれ以下は再び水平に貼つけられる。諸磯ｂ２式の浮線文系の土器であろう。

第９類（101）　縄文地文の施されたくの字に短く内屈する口縁端部に、爪形文に施すものである。

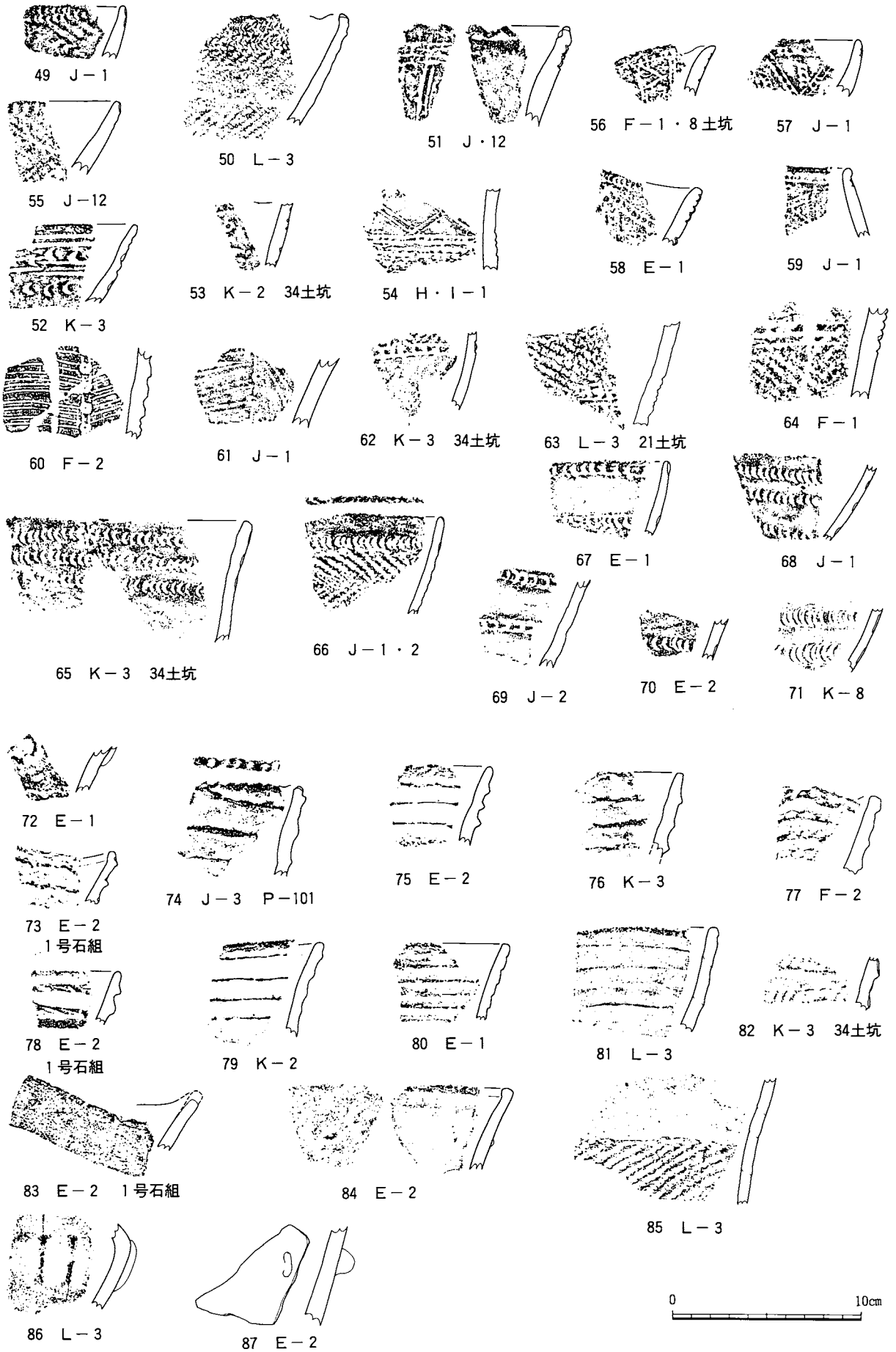
第10類（102～104）　諸磯式系の浅鉢と考えられものを一括した。102は無文地に沈線で文様を描くも



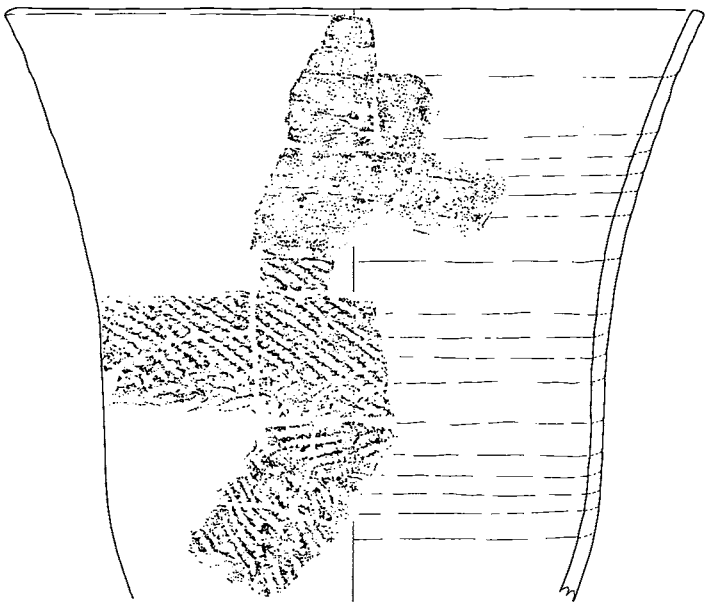
第20図　縄文土器実測図（S＝1／3）



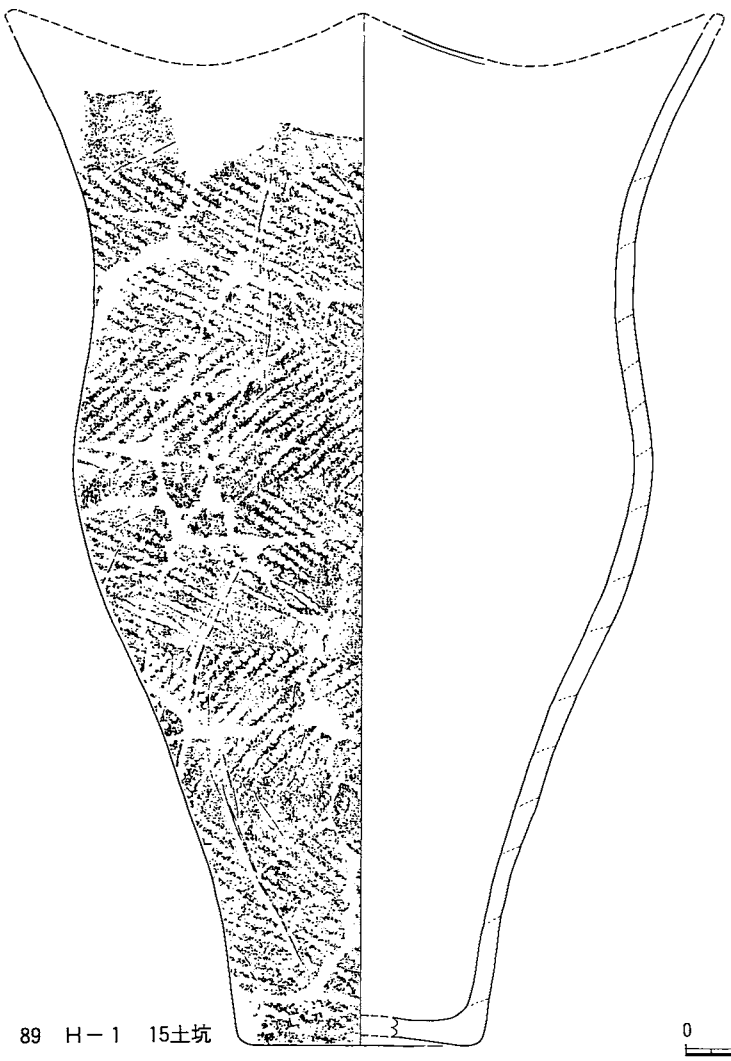
第21図　縄文土器実測図２（S＝１／３）



第22図　縄文土器実測図３（S＝１／３）



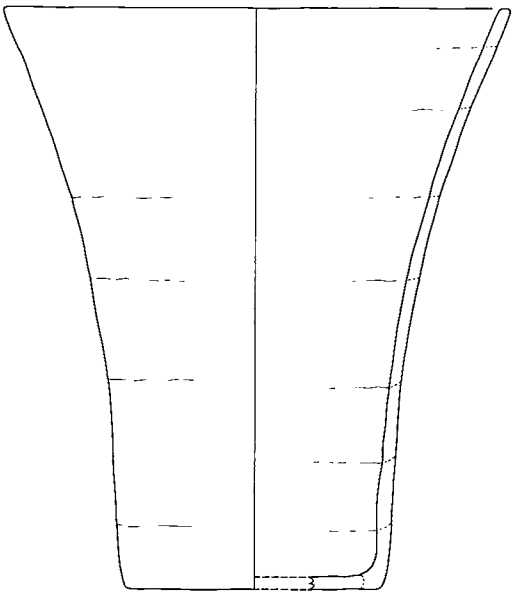
88　L－4　33土坑



89　H－1　15土坑

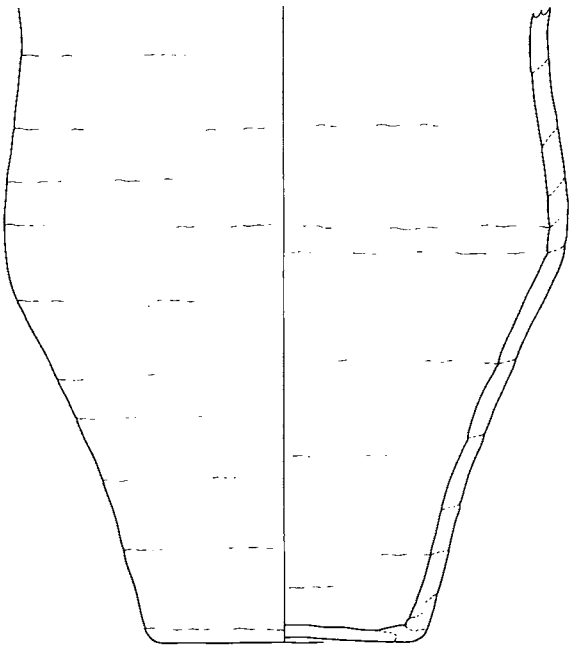
0　10cm

第23図　縄文土器実測図４（S＝１／３）

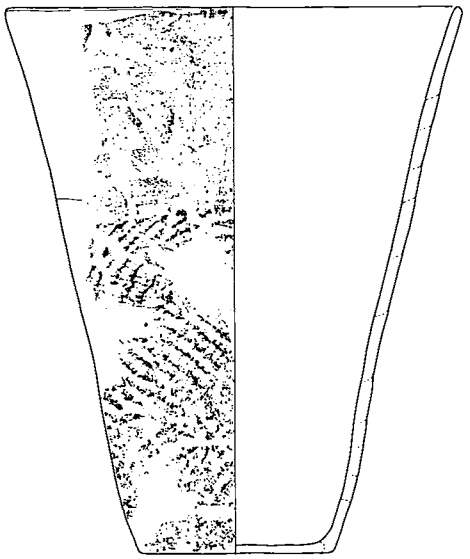


90　G－1　16土坑

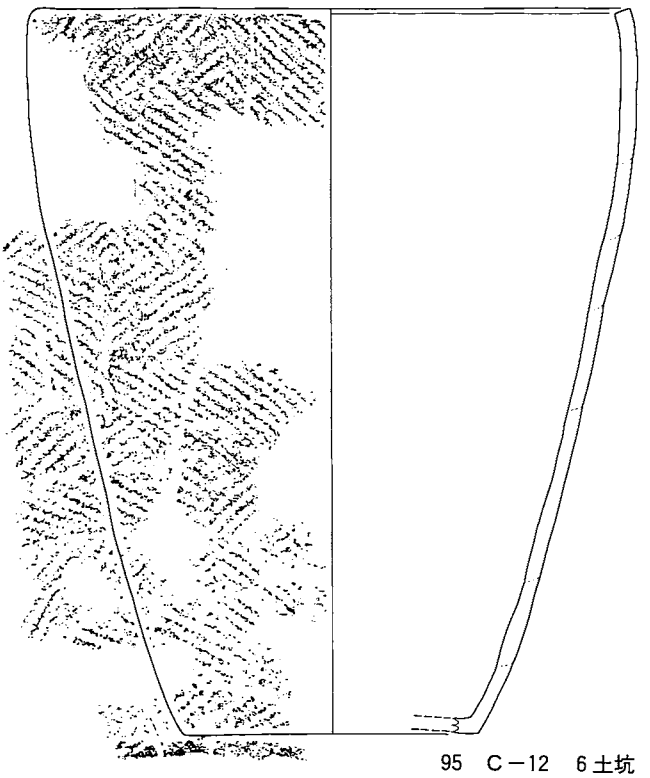
93　J－3　P－103



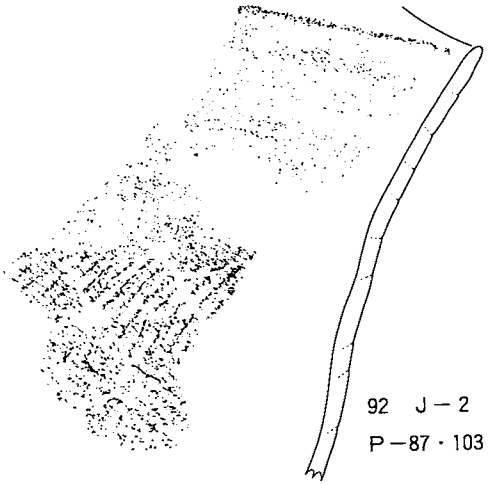
94　F－2　2号土器



91　F－2　Pit－50



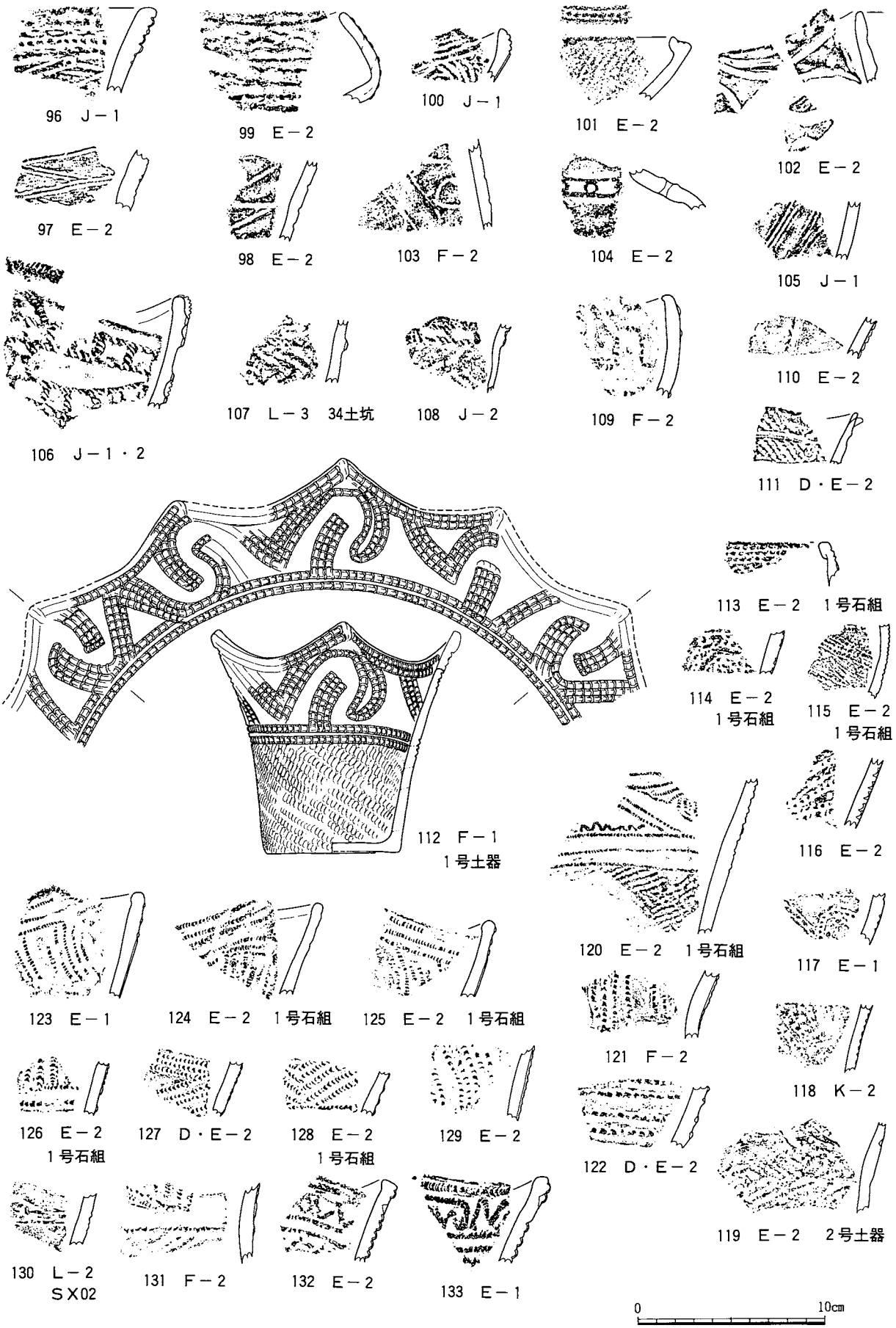
95　C－12　6土坑



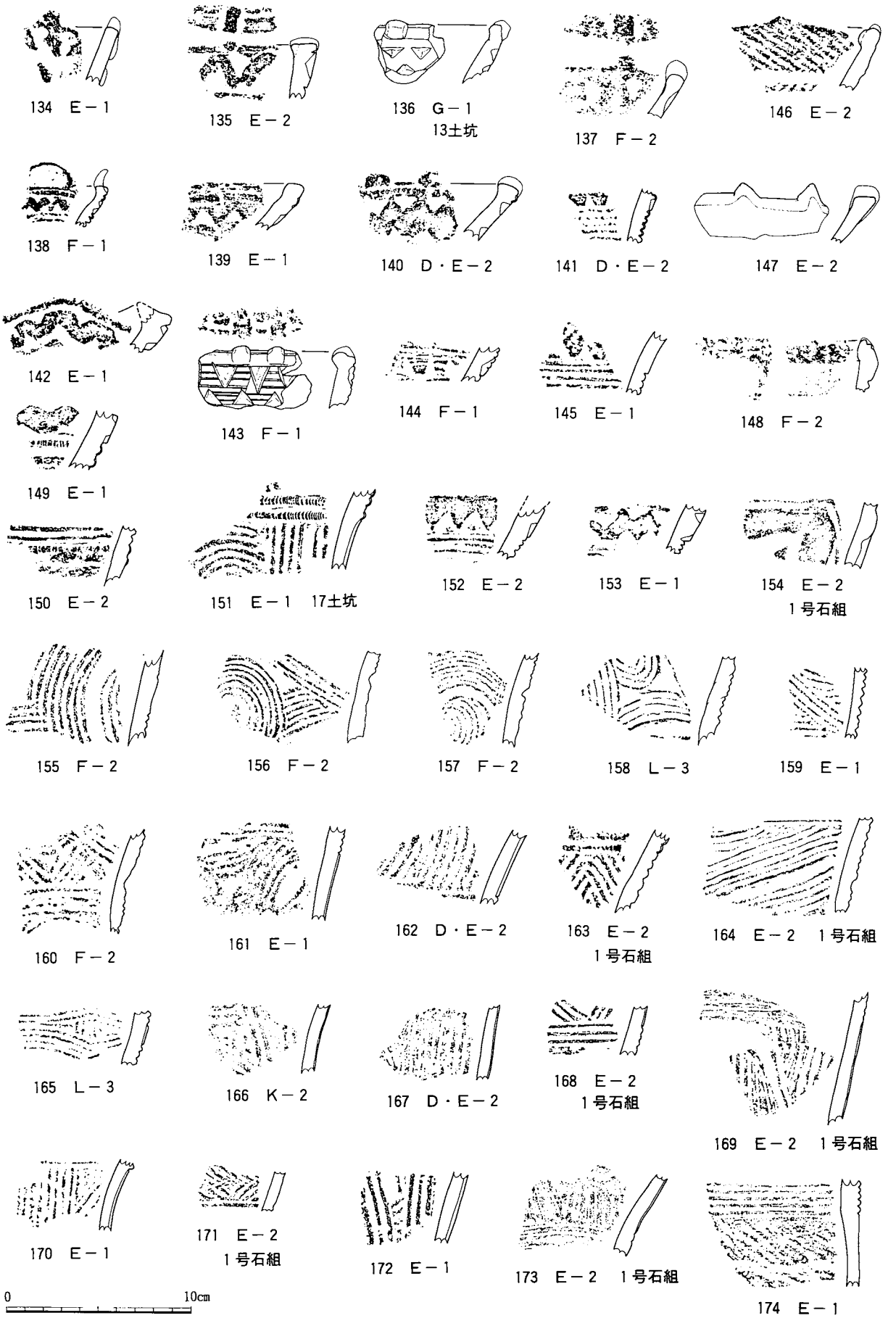
92　J－2
P－87・103・107

0　10cm

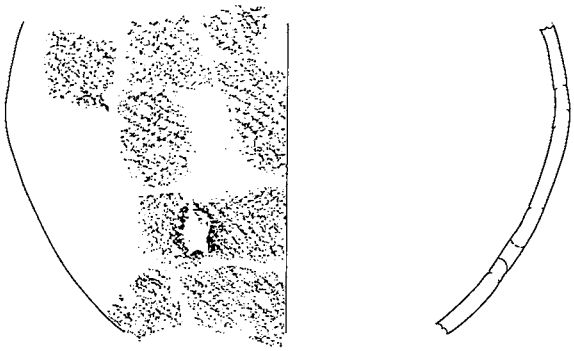
第24図　縄文土器実測図5（S＝1／3）



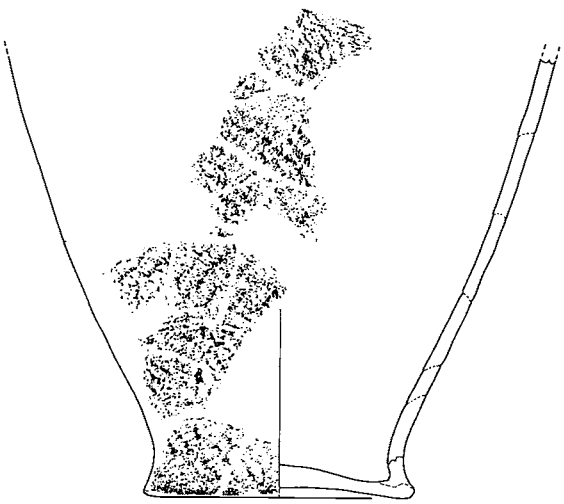
第25図　縄文土器実測図６（S＝１／３）



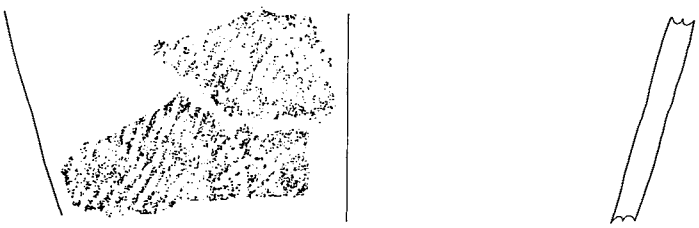
第26図　縄文土器実測図７（S＝１／３）



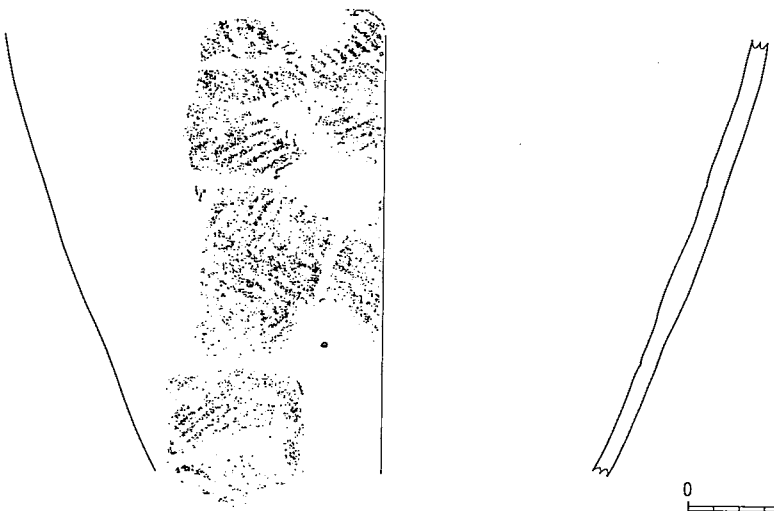
175　K－2



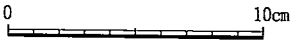
176　E－2



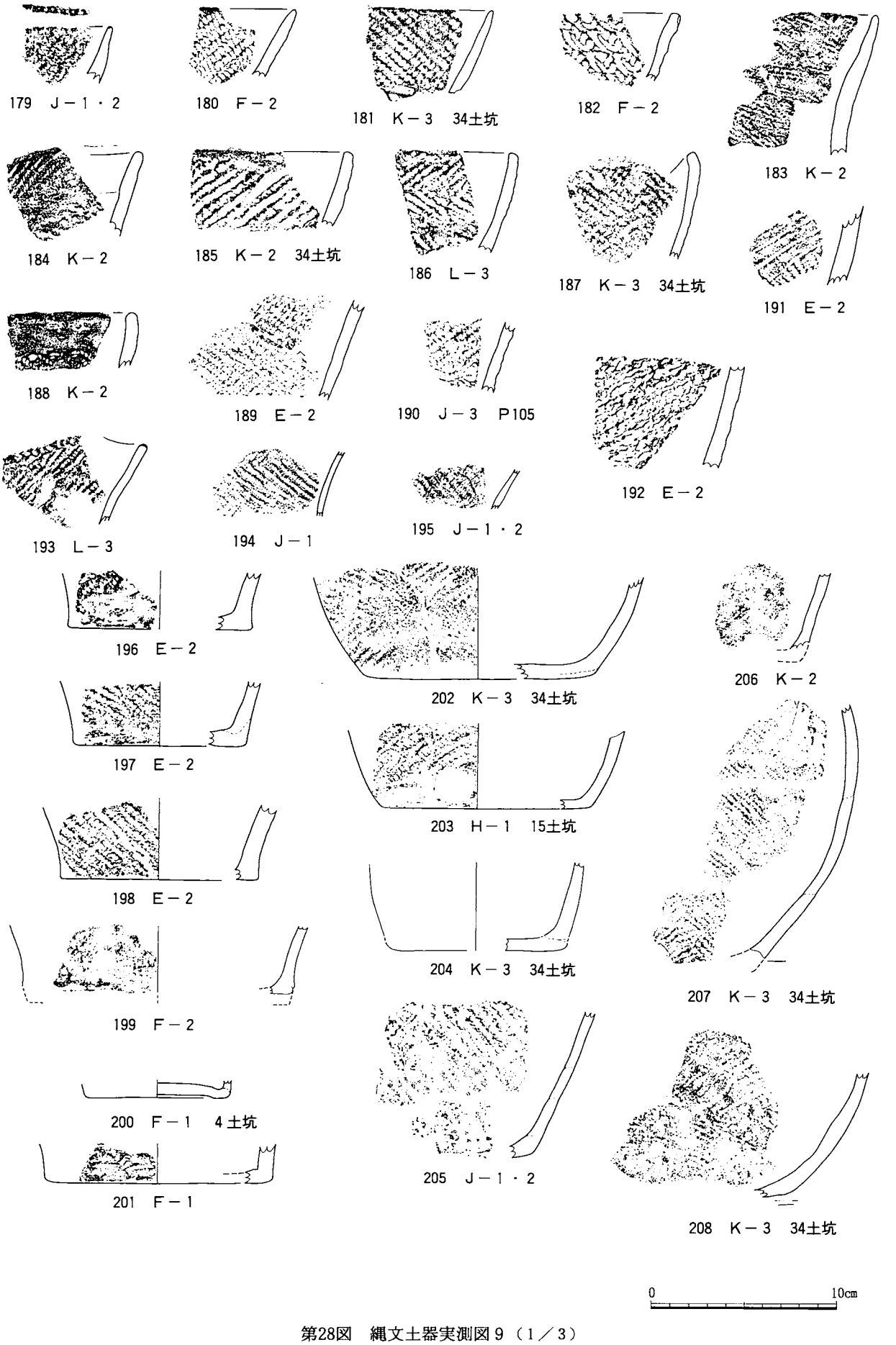
177　K－2



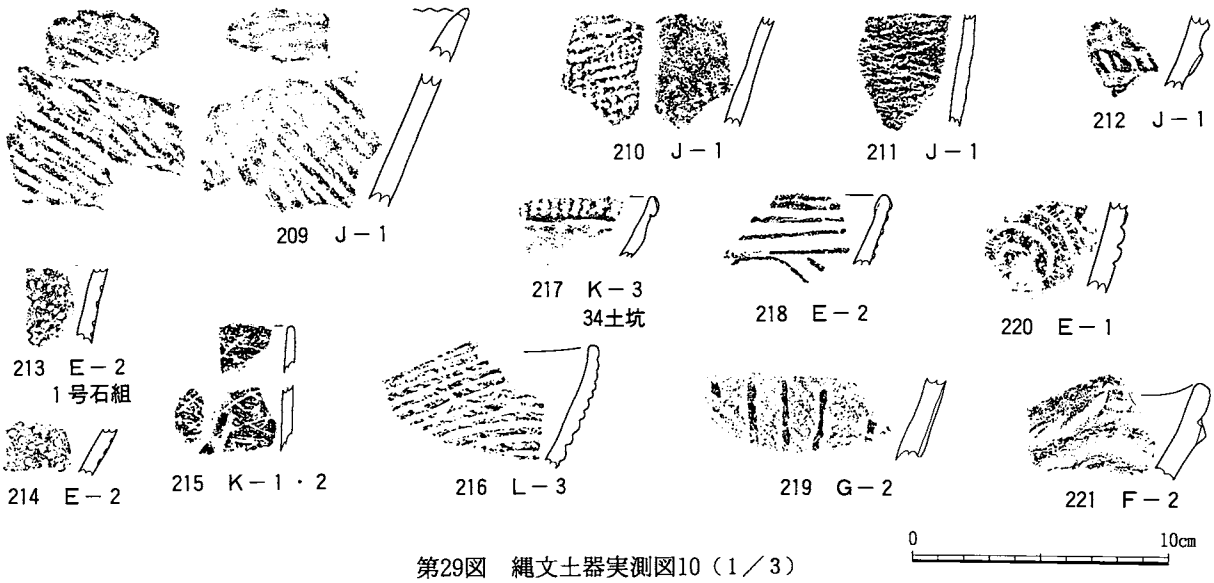
178　K－3　34土坑



第27図　縄文土器実測図８（S＝１／３）



第28図　縄文土器実測図９（１／３）



第29図　縄文土器実測図10（1／3）

のである。器形、文様モチーフともはっきりしない。103は縄文地に沈線でモチーフを描き磨消すものである。104はいわゆる縁孔土器である。

第11類（105）　半裁竹管状の工具で密に沈線を引くものである。諸磯ｃ式と考えている。

第12類（106～111）　北白川Ⅱｃ式と考えられるものを一括した。106から109は無文地に梯子状のモチーフを描くものである。106と107は同一個体である。波状口縁で、胴部は羽状縄文が施される。口縁端部と頸部にはそれぞれ直線的な梯子状モチーフが描かれるが、その間はこれを変形、あるいは連結させて文様を描いている。また、口唇部から連なる隆線も見られる。隆線上には斜めの刻みが施される。108も梯子状のモチーフを採る隆線の下位に羽状縄文がみられる。109も無文地上に隆線で梯子状のモチーフが描かれるものであるが、前述のものに比べ隆線が細い。110は一条だけ隆線が施されている。隆線は109よりさらに細かい。111は縄文地に１条の水平な沈線が引かれるものであるが、土器胎土の類似からこの類に納めた。

第５群土器（第25図112～174）

福浦上層式に比定されるものとその前段階のものである。器形全体の窺えるのは112のみである。５類に分類した。

第１類（112～117）　無文地に結節沈線文を施すものである。112は7.5cm、口径13.5cm、器高12.6cmの波状口縁を呈する土器である。底部から僅かに外反して立ち上がり口縁にいたる器形を採る。器体中央と口縁端部に２条一組の結節沈線文を配し、胴部は斜縄文、口縁部には３ないし４条一組で入り組み状の、あるいは渦巻状のモチーフを描いている。波頂部には縦位の突起が貼付されている。他は小片で文様構成が摑めないが、２ないし３条一組の結節沈線文でモチーフを描くようである。113、115、117の様に内湾気味の器形を採るものも見られる。113の口縁端部内面は粘土紐を貼付け肥厚させている。119には胴部の羽状縄文が確認できる。

第２類（121～131）　結節浮線文の施されるものの内、三角形印刻文、半隆起線文が同一器面内に施されないものである。やはり小片のため文様モチーフはよくわからないが、基本的には第１類と同様の文様構成を採るようである。121、122、131は他のものに比べ浮線が太く、浮線上の爪形文は片側が深い状態で施文されている。123から125の口縁部破片を見る限り、僅かに内湾気味で端部内面が肥厚している。また、120では結節を持たない細かい粘土紐が鋸歯状のモチーフで文様帯下端の浮線帯の直上に配されている。131では文様帯下端の浮線が１条のみである。

第１・２類は福浦上層の直前段階と思われるが口縁部を持たない土器については福浦上層Ⅰ式との区別がつかない。

第３類（132～145、152～154）　口縁部に三角形印刻文を施すものである。ここで用いられる結節浮線文は第２類に比べ太いものが用いられている。132、133は２本の平行した結節浮線文間に鋸歯状モチーフの結節浮線文を配し、その浮線文間を印刻するものである。133はこのモチーフが２段となり、132では鋸歯状モチーフを描く浮線が２本用いられ、重なる部分では１本が上の浮線に並ぶように配される。どちらも口縁端部内面が肥厚する。134は剝離してしまっていてはっきりしないのだが鋸歯状に隆帯を貼付けているものと思われる。143～145、149、152、153は幅広の隆帯を貼付けて、これに印刻を施すものである。149をのぞいて平行する半隆起線が同一器面内にあり、144、145はこの鋸歯状帯の上にも引かれている。また、145は鋸歯状帯の上に縄文が施されている。149は下位に結節浮線文が置かれる。他は無文地に三角形印刻を施すものである。138は耳状の突起を持つ。鋸歯状帯の上下には結節沈線文が配されている。154は、他のものがへら状工具により印刻がなされ後処理が施されないのに対し、きれいに撫でつけられている。また、印刻は三角ではないようで別の時期のものかも知れない。第３類は口縁端部まで残っている破片を見る限り口縁端部内面を肥厚させるようである。また、口唇部はやや面を持つように仕上げここに帯状あるいは紐状の粘土を貼付けて瘤状の突起を付けるものがみられる。この突起は２つで一組となるようだ。

第４類（146～148）　三角形印刻を施さないものである。146、147は口縁端部内面に粘土帯を貼付け肥厚させている。いずれも山形の突起を口唇部に配する。148は口唇端部両面に粘土帯を貼付けている。口唇部には瘤状の突起が施される。

第５類（150、151、155～174）　半隆起線で文様を描く胴部片を一括した。幅広の文様帯に渦巻を据え、これを取り囲むように半隆起線を重ね、渦の中心や隆起線の間を印刻している。印刻は幅広のものは後処理がなされきれいに仕上げられている。150、151、164は同一器面内に結節浮線文が見られる。174は半隆起線の下位に斜縄文が施されている。

第３～５類は福浦上層Ⅱ式と思われるが胴部文様を欠くものはⅠ式と区別ができない。

第６群土器（第27図175、177、178、第28図179～192）

底部以外の縄文施文土器を一括した。本来原体や胎土を含め分類するべきであるが果たしていない。胎土ははっきりと繊維の混入が認められるものに限って記したが、判断に悩むものの方が多い。

第１類（179～181、183）　口縁部の先端が尖り気味となるものである。179は口唇部に刻みが施される。181、183は胎土に繊維を含む。183は撚糸文が施される。

第２類（184～185、188）　口縁部先端が丸みを持つものである。184、185は胎土に繊維を含む。188は、口縁に無文部を置きループ文が施される。

第３類（182、186、187）　口唇部に面を持つものである。182は口縁端部外面に丸みのある押圧がなされ、ゆるい結節回転文が施されている。187は胎土に繊維を含む。

第４類（193～195）　器壁の薄いものを一括した。北白川下層式と思われる。193は口唇部に爪形文が施されている。194、195は０段多条の原体が用いられている。

第５類（175、177、178、189～192）　胴部片を一括した。175は胎土に繊維を含む。底部から内湾して立ち上がる深鉢の胴部で、これより上部で一旦くびれて開く器形となろう。177、178、189、192も胎土に繊維を含む。190には結節回転文が見られる。192の原体は直前段反撚であろうか。

第７群土器（第27図176、第28図196～208）

底部を一括した。分類は第６群同様不備がある。

第１類（176、196～201）　底部が張り出すものである。176はやや上げ底の底部からくの字に短く内屈し、そこから僅かに内湾気味に開いて立ち上がる器形となる。196～199は176程ではないが底部が張り出しやや外反気味に胴部が立ち上がる。196は胎土に繊維を含む。200、201は底部から胴部が直立気味に立ち上がる器形をなす。

第２類（202～208）　底部から胴部の立ち上がりが丸みを持つものてある。202～206の様に内湾が強くないものと207、208の様に内湾の強いものがある。205、207、208は胎土に繊維を含む。

第８群土器（第29図212～219）

前期に属すると思われるのだがよくわからないものを一括した。

213は無文地に刺突文が同心円状に施される。214は小さな円形の刺突列と平行沈線が施されている。215は薄い器壁を持ち網目状の撚糸文が施される。216は縄文地に横位の沈線が多条に引かれている。217は無文で口縁に粘土紐を貼り付けるもので、粘土紐の上には刺突が施される。218は無文地に219は縄文地に粘土紐を貼り付けている。

第９群土器（第29図220、221）

縄文時代中期に属するものである。220は半裁竹管で渦巻文を描くもので渦巻の周りの半隆起線には刻みが施されている。中期中葉頃のものであろう。221は隆線で区画を描きその周囲に刺突文を施している。中期後半の大杉谷式と思われる。

小　結

本遺跡出土の縄文土器は早期末から中期後葉にわたるが、主体となる時期は前期中葉である。関東地方の土器群と本遺跡の土器群の大まかな並行関係を見ると、第２群土器は黒浜式、第３群土器は諸磯ａ式、第４群土器は諸磯ｂ式およびｃ式、第５群土器１・２類は諸磯ｃ式、第５群土器第３～５類は十三菩提式となろう。

第２群土器は朝日ｃ式と共伴する北白川下層Ⅱａ式である。本遺跡で確認された朝日ｃ式の基本的な文様構成は、まず、口縁部に２～３条の平行沈線、頸部に１条の爪形文列を横走させやや幅広の口縁部文様帯を作り出す。この中に施される文様は３種確認でき、１つは縄文（第４類）、１つは平行沈線、爪形文列、あるいはコンパス文の横位交互施文（第１～３類の殆ど）、残りの１つは平行沈線で菱形文構成の文様を施文するもの。（２、９、32）である。現段階ではこの土器群の細分や、詳細な並行関係および出自を捕らえる手がかりが少ない。前段階の内容を持つ新潟県巻町新谷遺跡（前山1985）の中に爪形文列を菱形構成させるものや、コンパス文と交互に配置するものがあり、段階差はかなりあるものの型式的連続性は追えると考えられる。また、他地域のこの段階の土器を眺めると（細田1989）、この段階も東北の影響が大きい事が窺える。一方、共伴した北白川下層Ⅱａ式は連続爪形文がきれいに施文されるものから、爪形の両端部のみが器面に残されるものなどバリエーションが見られるが、内面に条痕調整を残すものはみられない。古手のものは含まれないのだろう。石川では北白川下層式系土器群の共伴はこの朝日ｃ式から顕著に見られるようになる。また、本群３類には北白川Ⅱａ式の爪形文と同様な爪形文を用いたものがあり、関係の強さが窺われる。

第３群土器は福浦下層式とそれに共伴する北白川下層Ⅱｂ式である。近県の資料では新潟県刈羽貝塚遺跡（寺崎他1987）の内容に類似する。土器量が少ないため不明な点が多いが、基本的な文様構成は第２群土器からの流れで追いかけられるのではないかと思う。文様構成は第２群土器の文様構成が変化したもので、まず、口縁端部に平行沈線、頸部に爪形文列という規範が崩れ、相互に、あるいは組み合わされて文様帯の上端を作出するようになる。これに組み合わされる文様は、菱形文構成のものが変形して肋骨文タイプの文様へ（60、61）、コンパス文と平行沈線の横位交互施文土器が変形して格子目タイプ

の文様へ（53、54）、それに縄文地文のものというふうに考えられる。この変化は黒浜式から諸磯ａ式への変化に類似している。このあたりが独自性が見えないと言われる由縁であろうが、細部ではかなり異なり、変化の流れとしてはこちらの方がスムーズに思える。第２群土器からここまでの変形はかなりの段階があろう。

北白川下層Ⅱｂ式および模倣土器も出土している。北白川下層Ⅱａ式からⅡｂ式への変化は、両端部のみが施文される連続爪形文が引金となって出現すると考えている。Ⅱａ式の連続爪形文はⅠｂ式のそれに比べ幅が広くかつ多条に施される。その為密接して施文され爪形文列の部分は器面よりわずかに沈み込み爪形文列間が盛り上がったように目だつようになる。この傾向はすでにⅠｂ式に確認でき、Ⅱａ式ではそれに刺突を加え強調したものも表れる。また、工具の両端を交互に支点として移動させる手法が進むと、爪の中央部が押圧されなくなり、しまいには両端のみが器面に残されるようになる。こうして連続爪形文は意味を失う。北白川Ⅱｂ式はこの中央部の盛り上がりの刺突、あるいはこの端部列を爪形文に置き換えたものと思われる。本遺跡の資料でも爪形文列の施文位置は、置き換え位置に施文しているものが殆どである。また、本遺跡のⅡｂ式の個体の中には明瞭なものがないが、鳥浜貝塚（網谷1979）では、主文様の爪形文列の間に浅い爪形文の残るものがある。Ⅱｂ式は一度Ⅱａ式の文様を描いた後、これを磨り消しているのだと思われる。さらにこの磨り消しとⅡｂ式特有の刺突法からⅡｃ式の隆線が生まれて来るのであろう。鳥浜貝塚ではこのⅡｃ式の中にも爪形文の痕跡を残すものがある。

第４群土器は蜆ヶ森式と共伴する諸磯ｂ・ｃ式、北白川Ⅱｃ式である。第５群土器第１・２類を含めその流れを考えてみたい。72は縄文地に粘土紐を円環状に貼付けるものであり、西野秀和が蜆ヶ森式の古手のものとして従来の蜆ヶ森式から分離し、小野式として型式設定した土器である。（西野1983）。また、その成立を東日本土器文化圏の伝統を基調とするものとし、貼付文の系譜として新潟県鍋谷町遺跡第２群第２類土器に注目している。小野式に比定される土器は石川県真脇遺跡でもまとまって出土している（越坂1986）。これらを見るとその特徴は平縁、あるいは起伏の僅かな波状口縁のバケツ状の器形で全面縄文施文を基本とする。口縁端部付近に円環状の貼付けとこれの上位に口縁から円管を挟み込むように垂れ下がり口縁と平行となる隆線、また、円管の下位にも１～２条の口縁に平行する隆線が巡らせられる。本遺跡には例がないのだが、前述した第３群土器の基本文様の内、波状口縁土器には口縁部の爪形文の施された２条の平行沈線の下位に円形の刺突文が施されるものがある。おそらくこの土器が波状口縁から平縁へ変化すると共に、前段階で比較的同部中位付近に置かれていた文様帯下端が迫り上がり文様が隆線化することによって出現するのであろう。なぜ隆線化するのか、現状では明確な答えを持たない。諸磯ａ式の隆線を持つ土器にも注意を払うべきであろう。西野が注目した鍋谷町遺跡第２群第２類土器は、共伴土器を見る限り小野式より新しいと言わざるを得ない。この後の変化は西野（西野前掲）や越坂（越坂前掲）に詳しい。

さて、第４群第２類は外傾接合によって隆線を作出するものである。これまで隆線の太さや形状によって分類されてきたが、蜆ヶ森式にとってはこの外傾接合の出現と消滅が大きな変換点となろう。第３類の無文土器は輪積み痕を残し隆線の名残を窺わせるものがあるものの、外傾接合は減少する。これより以降、蜆ヶ森式は諸磯ｃ式の影響がみられるようになる。ここらあたりが型式の変わり目であろう。外傾接合の出現がどの段階で表れるのか本遺跡の資料からは不明であるが、小野式以降であることは間違いない。また、これも本遺跡では確認できないが、無文地に隆線を巡らすものの中に諸磯ｂ２・３式の口縁部文様と同じモチーフを描くものがある（本遺跡では諸磯ｂ式の沈線文系の土器、浮線文系の土器の両者を確認したに過ぎない）。すると、小野式を含め蜆ヶ森式の文様は常に諸磯系の文様を施文していることとなり、文様モチーフからみる限り西野の言うように東日本系の土器圏の伝統を基調とした

ものと言うことになろうか。

北白川Ⅱｃ式の土器は本遺跡では梯子状モチーフを基調とした文様を持つものが出土している。梯子状モチーフは北白川Ⅱｂ式の鎖状モチーフが上下の爪形文列と結合することによりX字状のモチーフ、楕円区画状のモチーフ、梯子状のモチーフと変化していったものと思われる。楕円区画状のモチーフまでは鳥浜貝塚（網谷前掲）のⅡｂ式の中に確認できるが梯状モチーフのものは確認できない。隆線化以降に出現するモチーフなのかもしれない。また、縄文地に施文するものがあり、隆線化した土器の中では後出な文様なのかも知れない。網谷は縄文土器大観（小林編1989）の北白川下層式土器様式の解説（網谷1989）でⅡｂ式の後半段階に隆線文の土器が出現したと従来の編年観（網谷1982、1984）を変更したが、確かに隆線化した土器を２分化することは可能であろう。また、変更された編年からすれば本遺跡資料はⅡｂ式の新相となろうか。

第５群１・２類は結節沈線文・浮線文の土器である。時間的には諸磯ｃ式に並行すると考えているが、文様モチーフは諸磯ｃ式の土器とはやや異なり、前段階の文様モチーフを受け継いでいる（諸磯ｂ２・３式の文様を独自に発展させるという事になろう）。石川県中戸遺跡（沼田1975）では、北白川Ⅲ式と思われる（凸帯に刺突を施していない）土器と第５群１・２類が共伴しており、こちらからの影響も考えられる。

第５群土器３～５類は三角形印刻手法を持つ土器である。本遺跡の資料では平行浮文と鋸歯状モチーフ浮線文の隙間を印刻するものから、幅広の粘土帯を貼付けこれに三角形印刻を施すもの、そして土器器面に直接印刻するものの３種を確認している。手法的にはこの順に変化すると思われるが他の検証方法で追認できていない。この印刻自体は鋸歯状モチーフの強調という意味合いで出現したと思われるが、鋸歯状モチーフはどこから生まれて来るのだろうか。この出自が福浦上層式の成立を考える上での鍵となろう。現状では摑めない。大木４～５式には口縁部に粘土紐を鋸歯状に貼付けるものはあるが、関係は不明である。また、胴部の半隆起線文間の印刻手法を持つものは新しい様相で福浦上層Ⅱ式であるが、前述したように口縁部に三角形印刻を持つものは胴部文様がわからず福浦上層Ⅰ式かⅡ式か判断がつかない。

以上、出土土器について整理する中から思い付いたことを列挙してみた。うまく整理がつかず実証が伴わないが、こういう風に見たらどうだろうという意味合いで提示することにした。資料数の増加を待って再び考えてみたい。

石川県の縄文時代前期中・後葉を本遺跡の土器を通して眺めるなば、その前半期では以外と東北地方の影響が大きいことがわかる。それは、早期後半から続く繊維を含んだ土器群とまとめられ、これから脱却する当たりから北陸の独自性が見えかくれする。その後は北陸の独自性が強まった土器群が隆盛をきわめて行くが、文様の系譜を探るとやはり東日本の伝統を基調にした土器（西野前掲）の土器群であることは間違いない。また、北陸の前期中・後葉までの土器群は、資料数に恵まれないため不明な点が多く、独自の土器が見えない時期にあっては勢い関東の影響下でとか、西日本の土器の影響の基に成立したという風になってしまう。しかし、西日本の影響はそれほどでもなく、また、関東地域へは影響を与え続けているのではないだろうか、という風に今回の整理報告では思えてきた。今後の課題としたい。

本来であれば遺構単位で土器を掲げ、その一括性を検証しなければならないのだが、小片が多いことと思い込みで文様の分類を優先したことをお詫びしたい。出土位置は図版に記した。

引用・参考文献

網谷克彦　1979　「第４章　遺物Ⅰ　第１節　土器」『鳥浜貝塚』　福井県教育委員会

1982　「北白川下層式土器」『縄文文化の研究』３　雄山閣

1985　「Ⅱ　遺物」『鳥浜貝塚1984年度調査概要』　福井県教育委員会

1989　「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』１　小学館

黒坂禎二　1989　「羽状縄文系土器の文様構成（点描）－１」『研究紀要』第６号　財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団

1992　『薬師堂遺跡』　財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団

越坂一也　1986　「第６章　第１節　４　第４群土器　蜆ヶ森式土器」『真脇遺跡』　能都町教育委員会　真脇遺跡発掘調査団

小林達夫編　1989　『縄文土器大観』１　小学館

佐藤雅一　1987　『岩原Ⅱ遺跡』　湯沢町教育委員会

鈴木敏昭　1991　「土器群の変容－例えば、諸磯ｂ式浮線文土器の場合－」『埼玉考古学論集－設立10周年記念論文集－』　財団法人埼玉埋蔵文化財調査事業団

鈴木徳雄　1994　「諸磯ａ式の文様帯と施文域－文化の生成と変容－」『縄文時代』　縄文時代研究会

高橋修宏他　1982　『小泉遺跡』　大門町教育委員会

寺崎裕助他　1987　「刈羽貝塚遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇　柏崎市史編さん室

寺村光晴他　1960　『鍋屋町遺跡』　柏崎市教育委員会

長沢宏昌他　1989　『花鳥山遺跡　水呑場遺跡』　山梨県教育委員会

西野秀和　1983　『輪島市三井新保遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

沼田啓太郎　1975　「金沢市中戸遺跡調査報告」『石川考古学研究会会誌』第18号　石川考古学研究会

細田　勝　1989　「黒浜式土器成立の背景について－特に東北地方土器群との対比を通して－」『古代』第87号　早稲田大学考古学会

前山精明　1985　「巻町新谷遺跡Ｍ地点における縄文時代前期の様相」『研究発表会－新潟県の考古学－』発表要旨　研究発表会実行委員会

山内清男　1979　『日本先史土器の縄文』　先史考古学会

第2節　石　器

石器類は調査区内包層中より出土したものの他、隣接部周辺で表面採集したものも含めている。遺構内覆土中からのものは第30図11～14の４点と、１号竪穴覆土上層部よりの17・26の他、34号土坑の25（軽石）、７号ミゾの33、ピット番号50からは第31図36、17号土坑から同37、11号土坑からの39である。

石鏃（１～12・16・18）があり、平基無茎の１、凹基無茎の２～12、十字状の異形鏃16、石刀鏃ないしはナイフ形石器であるかの18である。石質では珪質の黒色頁岩がほとんどであるが、16の異形鏃は鉄石英でにぶい赤みを滞びている。

石槍（17）は穂先と茎ともに先端を尖らせており、茎基部がややくびれる整形がある。安山岩にちかい珪質の黒色頁岩で最大長3.9cm、最大幅1.3cm、最大厚0.75cm、質量2.9ｇである。

石錐（13・14）頭部に剝片の形状が一部分留められており、錐部も全周加工された13と一部分の14である。13は、金長2.8cm・最大幅1.9cm・厚さ0.54cm・重さ2.2ｇで、安山岩にちかい。14は錐先端に欠損がみられ、現存長2.87cm・幅1.6cm・重量2.1ｇで、13と同様の石質である。

石匙（15）は横形のもので、器体片面に大きめの剝離面がある。この面の刀部は弧状に加工があるが全周されていない。頂部の加工は細かく表裏両面からの加工が施されている。石質は石英っぽい珪岩と思われ、最大横巾4.3cm・長さ3.1cm・最大厚0.56cmである。

掻器（19）器体短軸断面が扁平にちかい三角形に剝離された素材からの二次加工された部分は、上面ではその片側刀部と横側で、裏面は両横端部のみとなっている。石質は流紋岩で、最大長2.35cm・最大巾3.95cm・最大厚0.8cm・重量6.7ｇである。

磨製石斧（26～28）両刃磨製石斧の３点である。27・28ともに安山岩で、28の重量は197.2ｇである。

石錘（29）１点のみである。両端の打欠石錘で、凝灰岩質っぽい安山岩の重量は221ｇである。

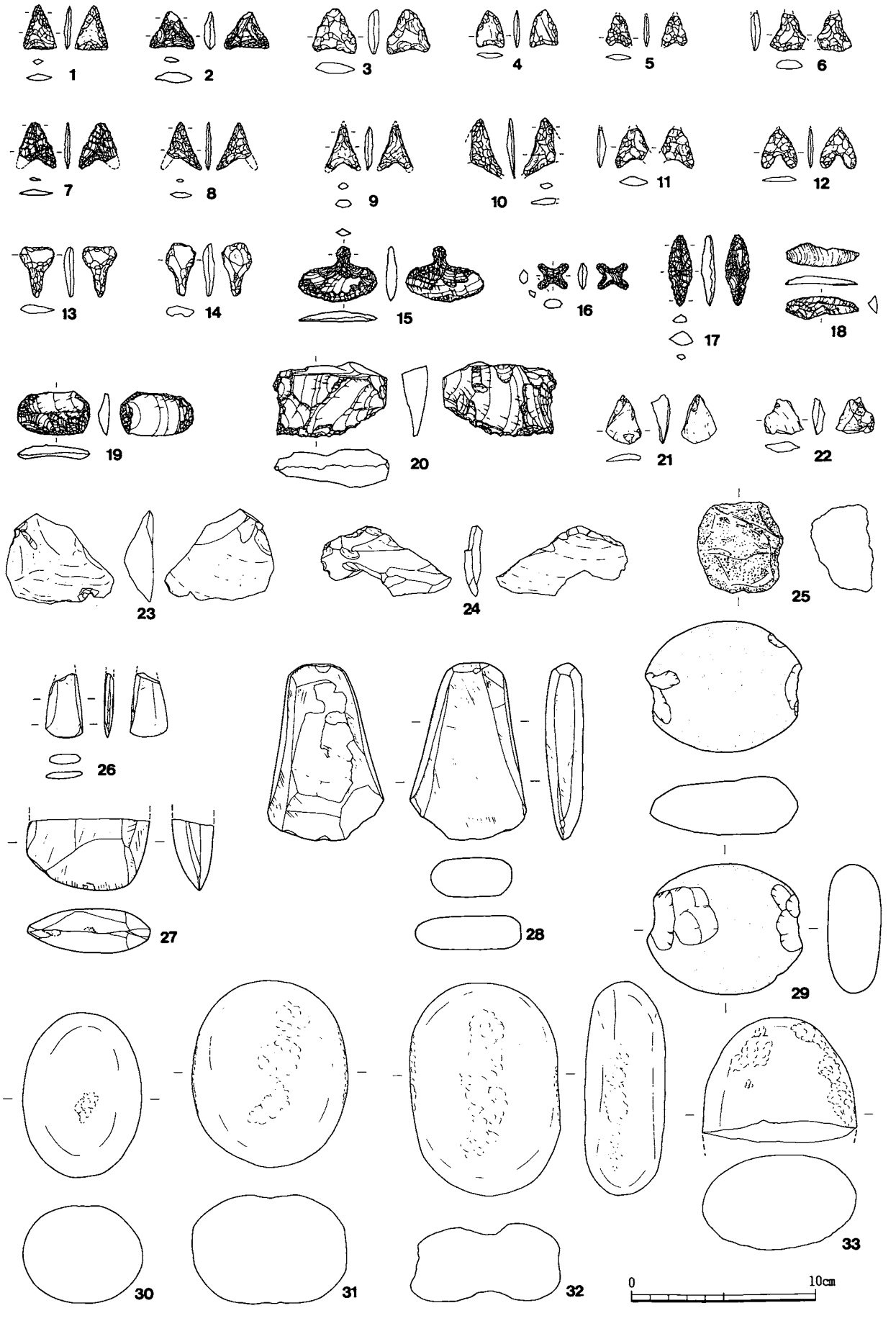
その他（30～第31図41）凹石・敲石・磨石・石皿などがある。

第3節　弥生時代以降の遺物

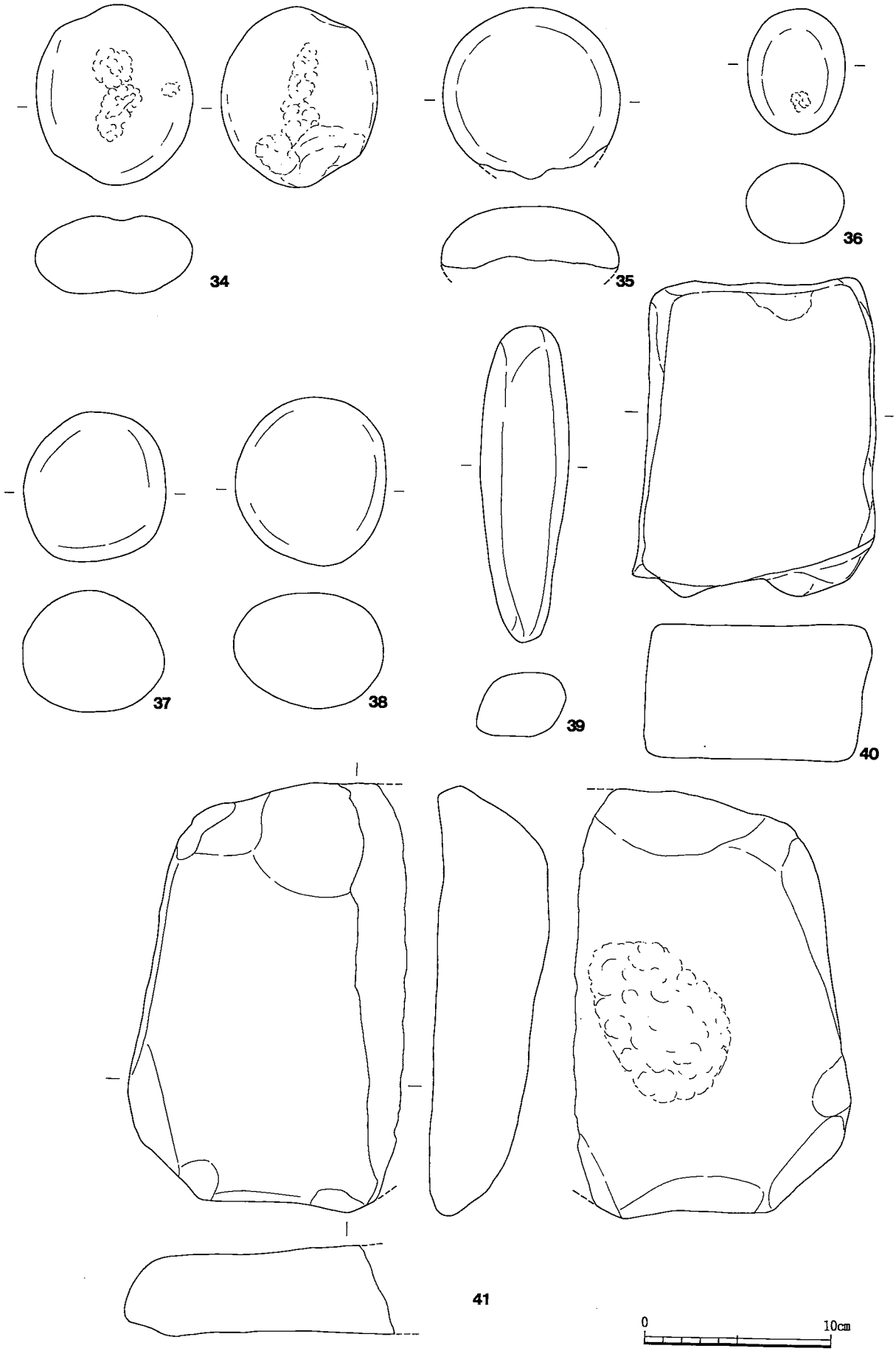
調査区内より出土した縄文時代以外の遺物をとり集めた（第32・33図）。出土状況は極めて散発的でまとまりがなく、各個体毎の年代を指し示すことは困難である。概括的には弥生時代後期後半頃の土器や、古墳時中期頃、古代（７ｃ代）と考えられる須恵器、中世の土師器皿と珠洲焼、近世後半以降と想われる陶磁器などが含まれている。

１～20は弥生土器と土師器であるが、甕・壺・鉢・器台・高坏（１・２・５・13・14・15）などが弥生時代後期後半頃の土器群と考えるものである。３・４などは古墳時代中頃の土師器甕と推測するが、５もこの一群に含まれるかもしれない。古代と想われるものでは21の須恵器体部片があり、11の椀形土器や６・７の甕形土器も７世紀前半代頃の遺物と推測する。中世遺物では珠洲焼の鉢（25・26・27）類は14世紀中頃を前後する時期が考えられ、土師皿（24）では16世紀後半～末頃とみられる。近世の遺物（第33図31～34）には、素地が灰白色で鉄釉がのる碗（31）と染付（32）の他、体内面に14本の櫛歯状具による、卸し目が全面体についた高台付のすり鉢などがある。

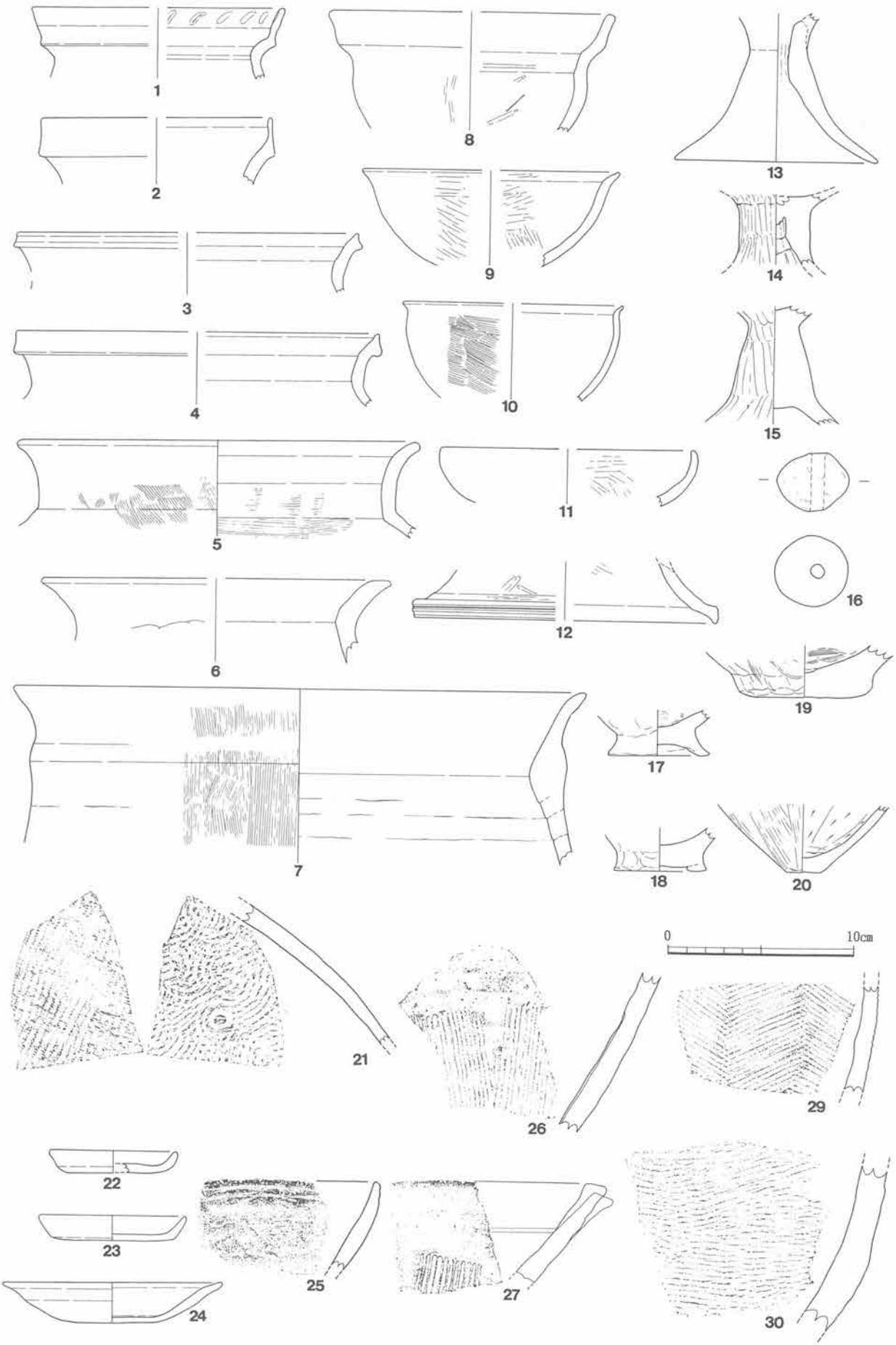
砥石（35～38）は４点あるが、中世に属するか近世かは判らない。36は上限２面が砥面となる荒砥石で、現存長8.2cm・端部厚4.4cm・折損側端部が3.6cmにすり減っている。石質は砂岩っぽい安山岩である。35・37・38は４面とも砥面となっている仕上砥で、表面に平滑感がある。35は現存長5.0cm、最大巾3.0cm。37は現存長8.5cm・最大巾3.7cm・最大厚2.7cmに折損側端が1.9cmとすり減っている。38の片側端が若干欠けるがほぼ完体にちかい。現存長21.9cm・最大巾4.5cm・最大厚3.7cmで、方桂体の端部側角にも使用しており、鎌などの湾曲した道具類にも使用されたと考えられる。



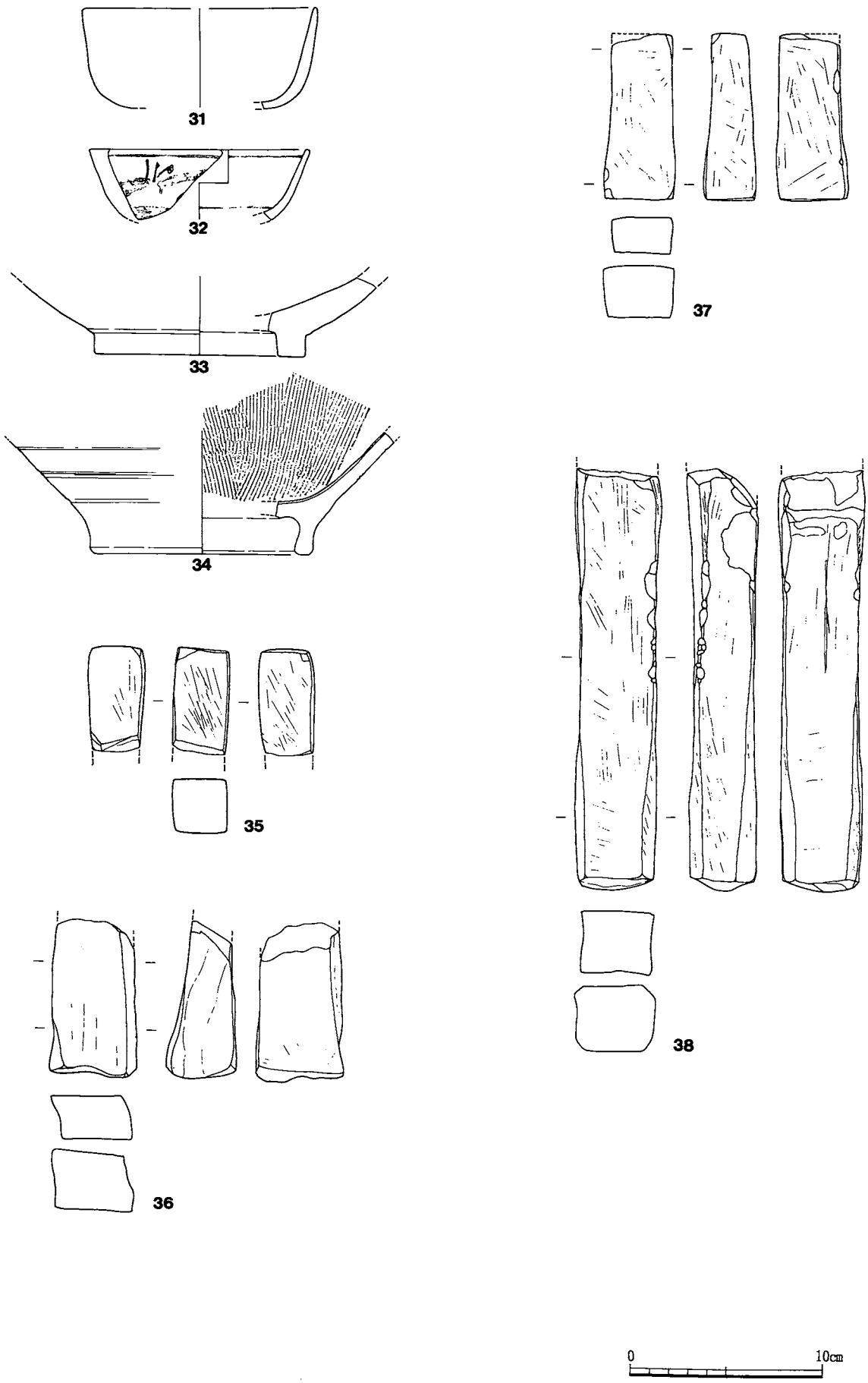
第30図　縄文時代石製品実測図（その１）



第31図　縄文時代石製品実測図（その２）



第32図　弥生時代以降の出土遺物実測図（その１）

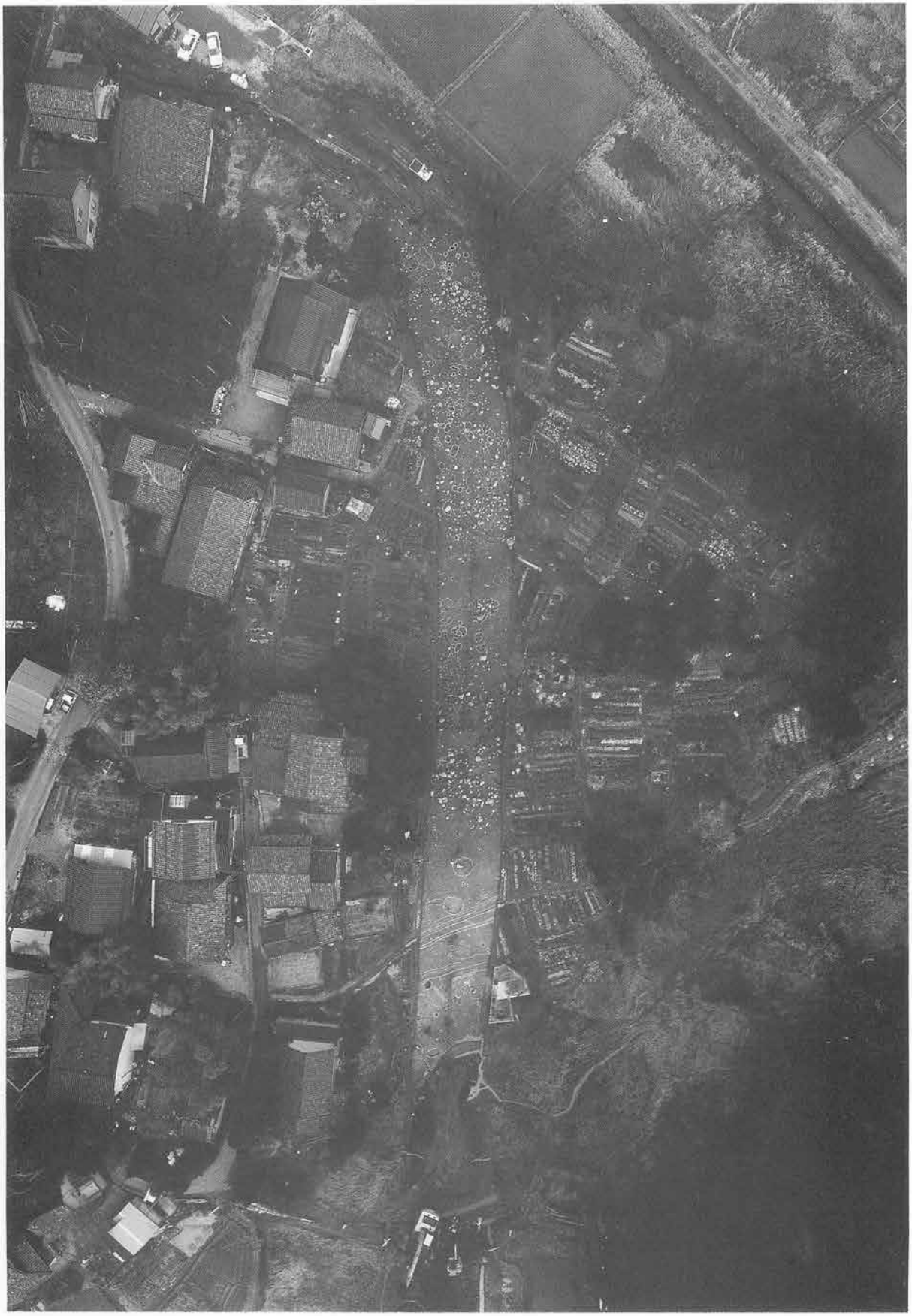


第33図　弥生時代以降の出土遺物実測図（その２）

図版1　航空写真1

遺跡の位置（1991年度撮影）

図版2　航空写真2



調査区全景

調査区1（A～C区）

図版4　航空写真4

調査区2（C～G区）

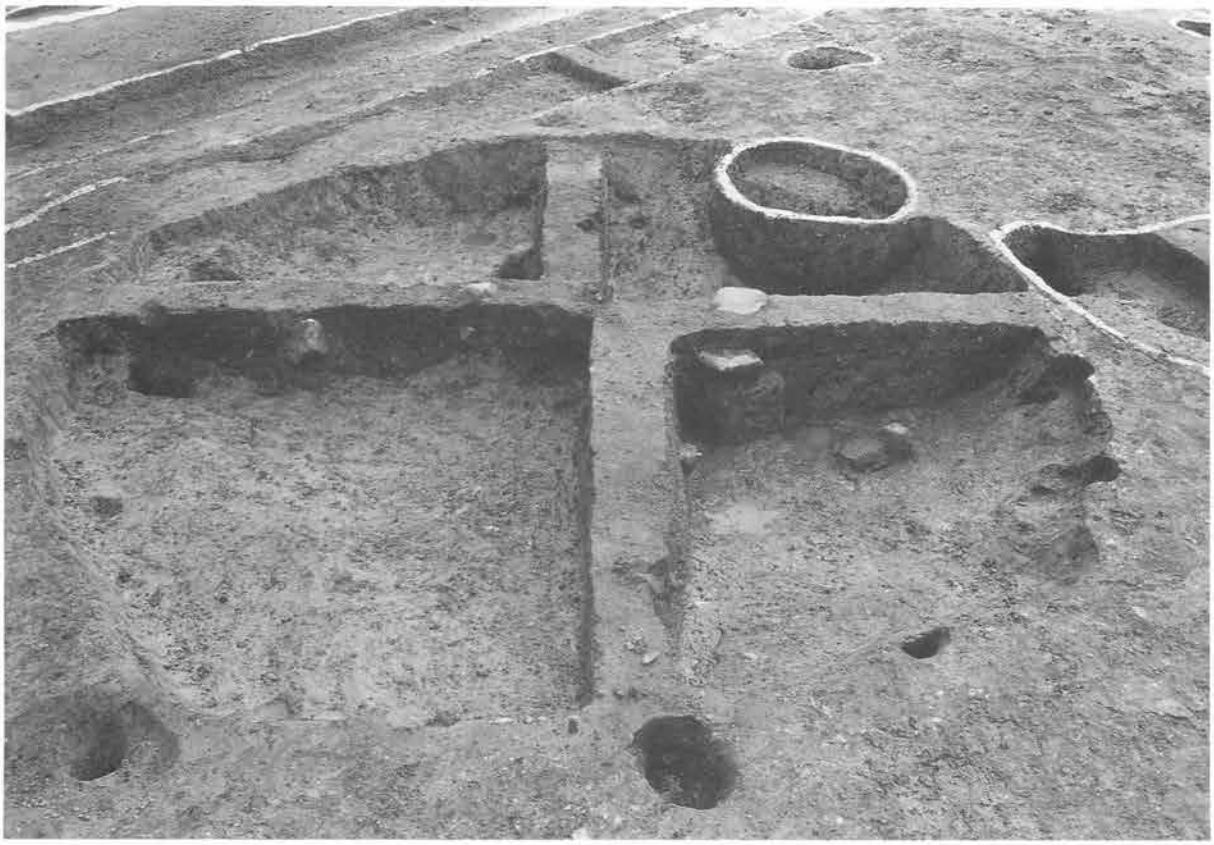
図版5　航空写真5

調査区3（G～K区）

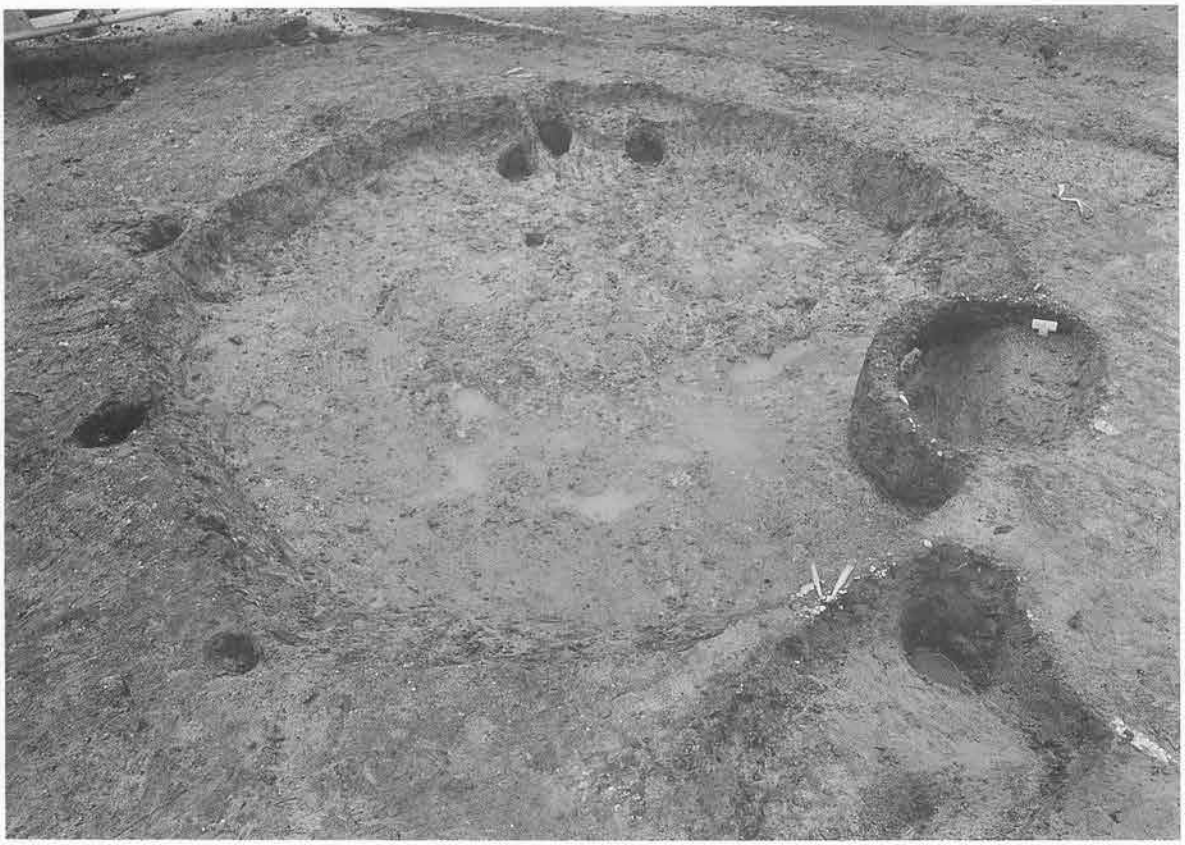
図版6　航空写真6

調査区4（Ⅰ～Ⅰ区）

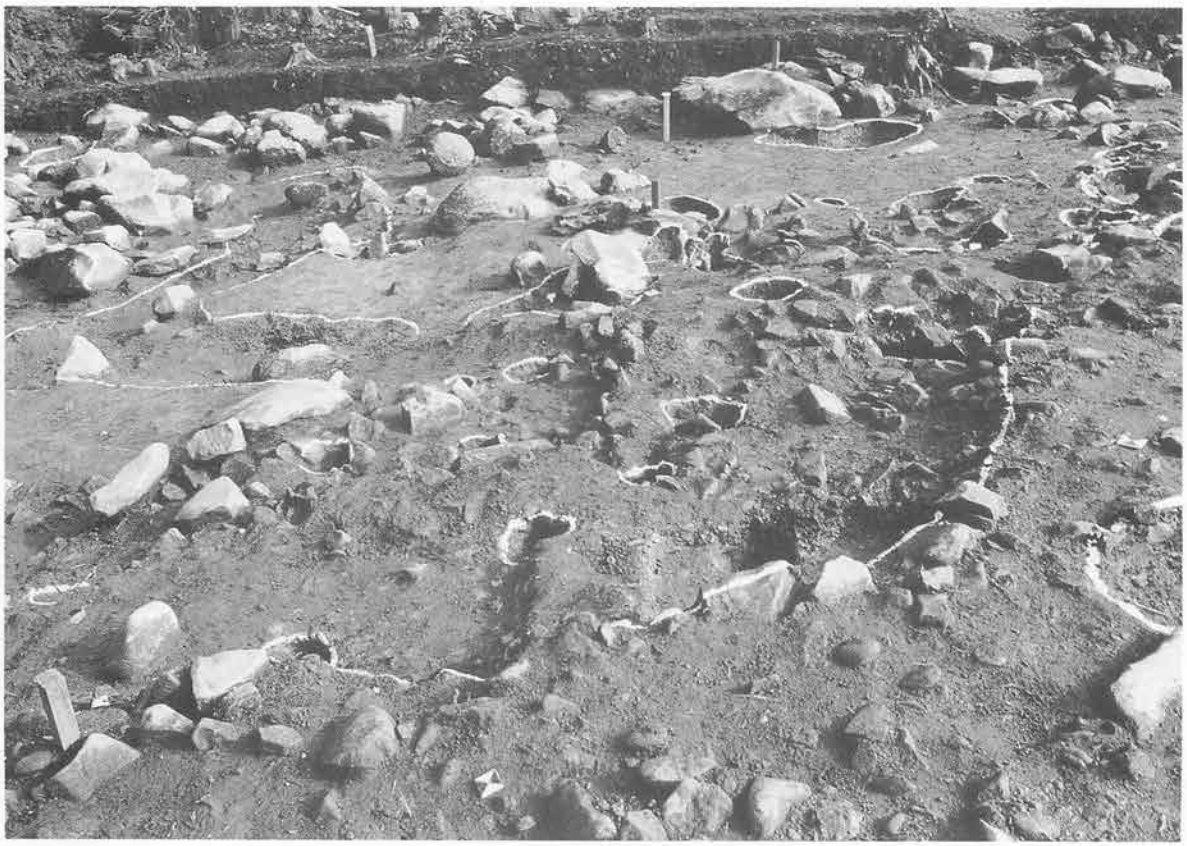
1号竪穴状遺構、6号土坑、9号溝周辺（東から）



1号竪穴状遺構完掘状況（西から）

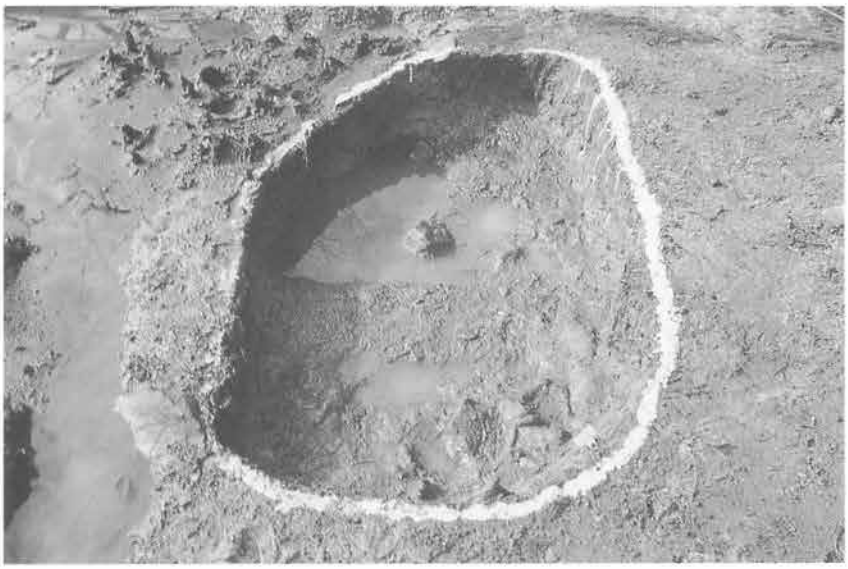


1号竪穴状遺構完掘状況（南から）

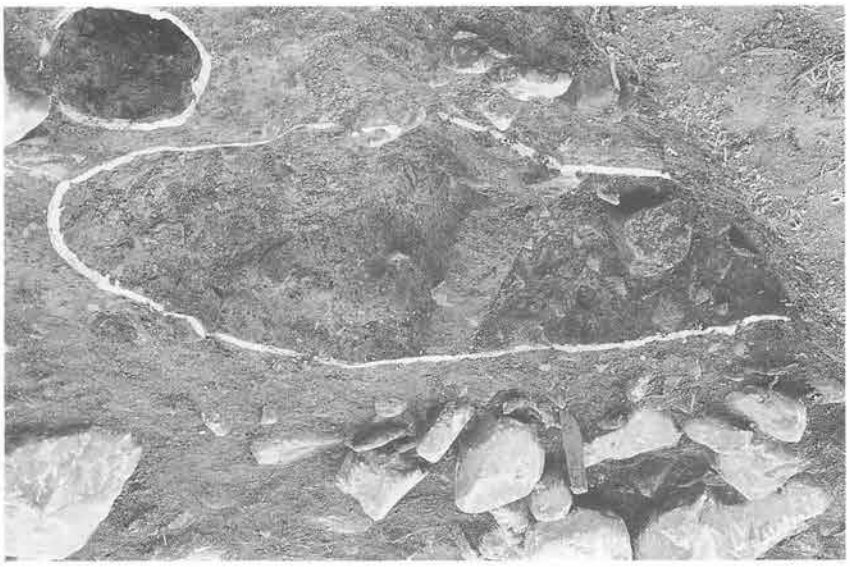


2号竪穴状遺構完掘状況（南東から）

5号土坑（南から）

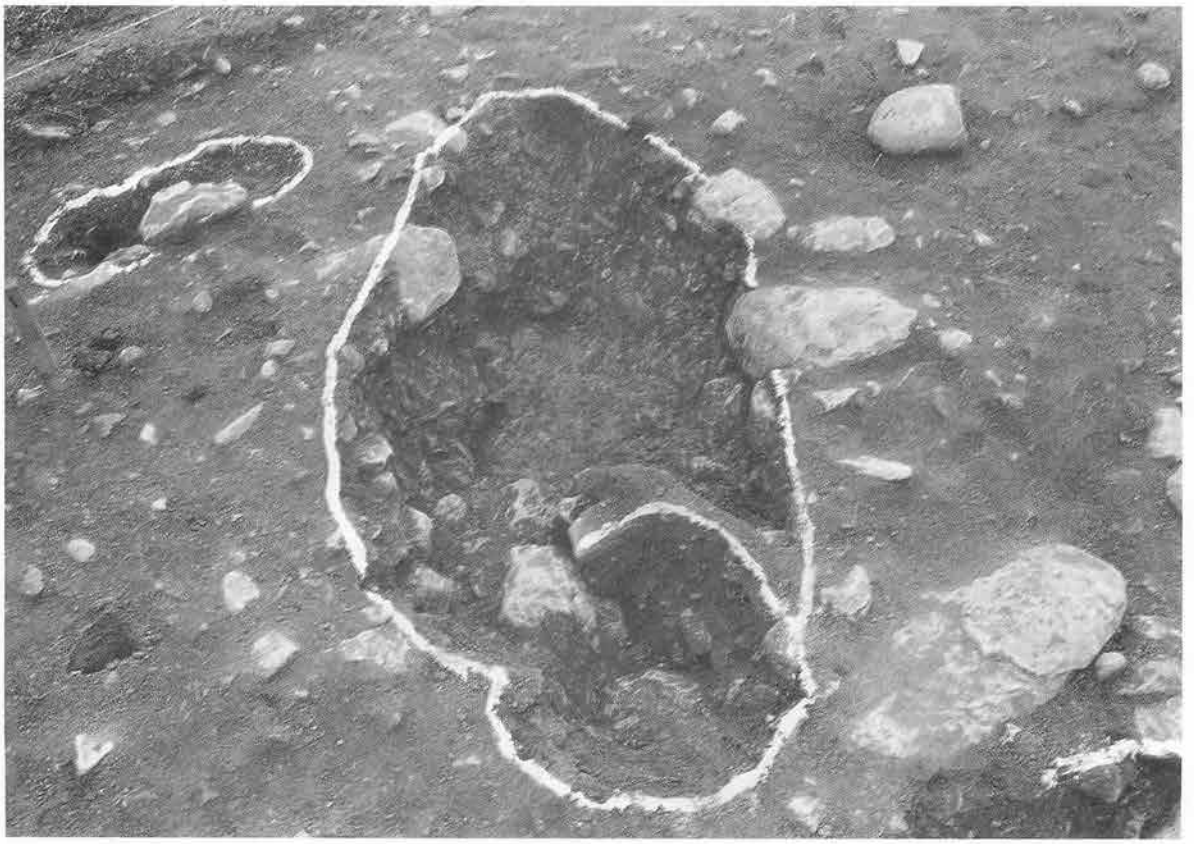


5号土坑完掘状況（北から）



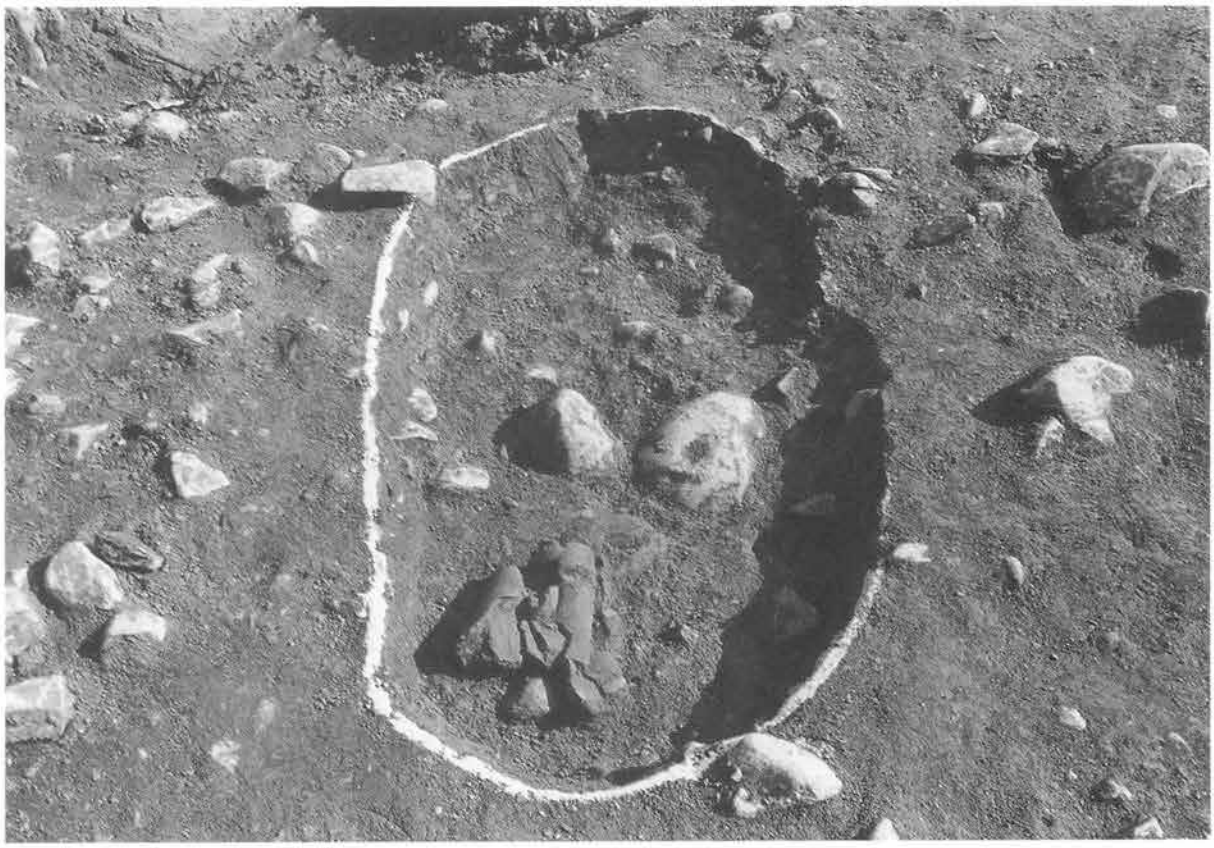
7号土坑完掘状況（西から）

6号土坑完掘状況（東から）



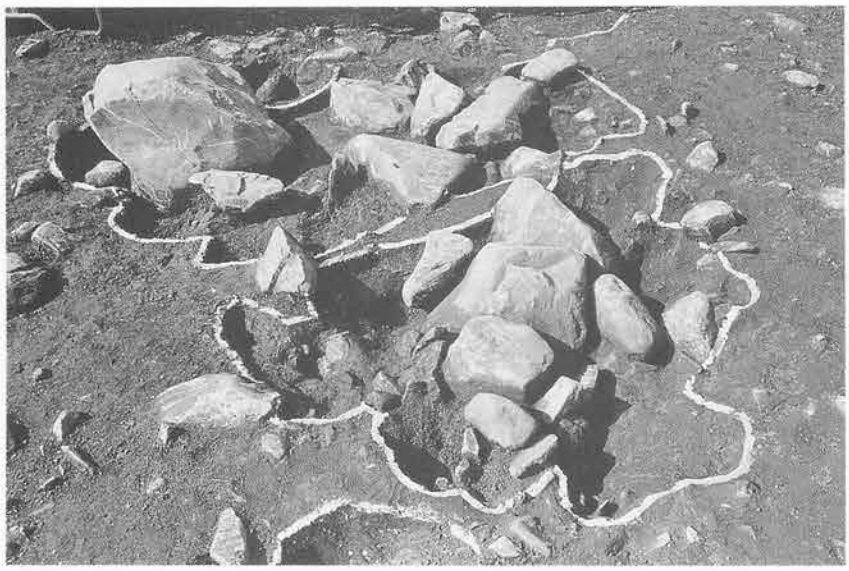
10号土坑、ピット39完掘状況（南から）

15号土坑完掘状況（南から）



16号土坑完掘状況（南から）

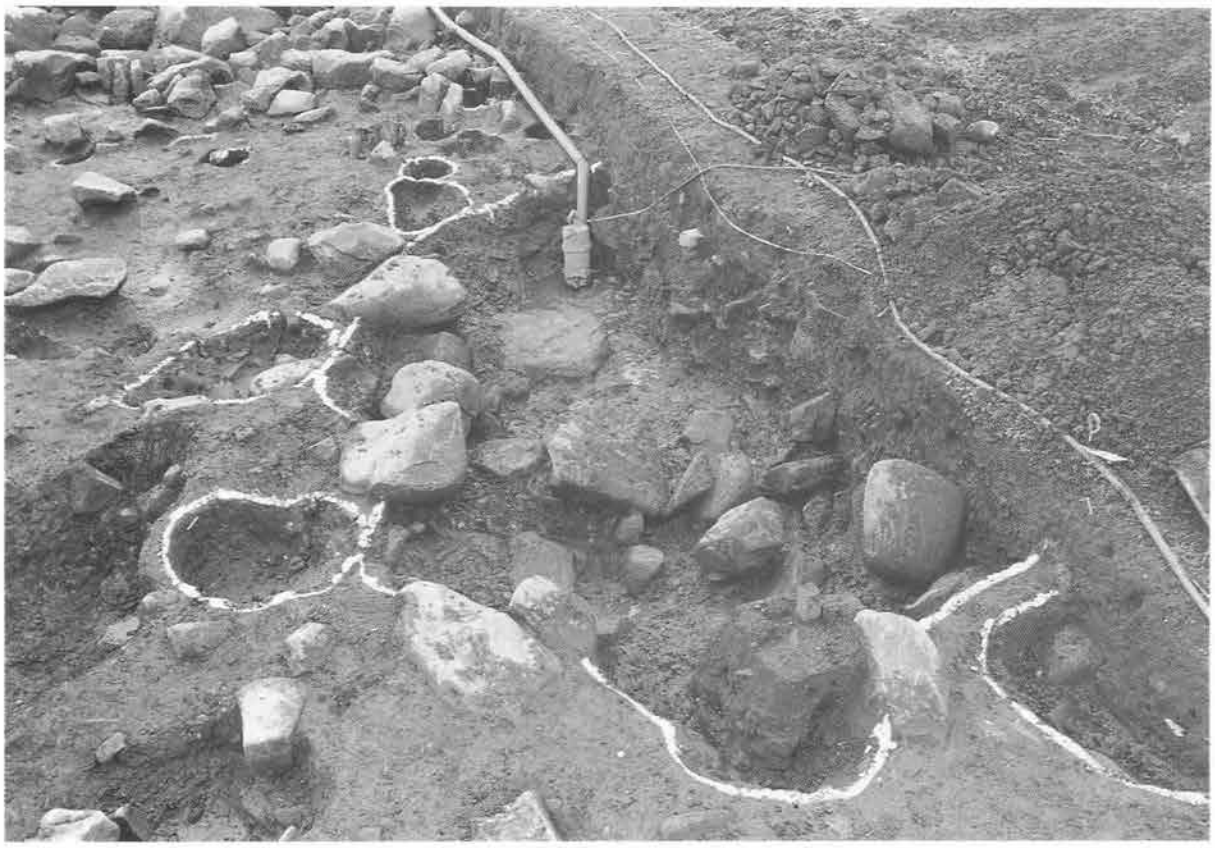
図版12　遺構6



12、13号土坑完掘状況（東から）

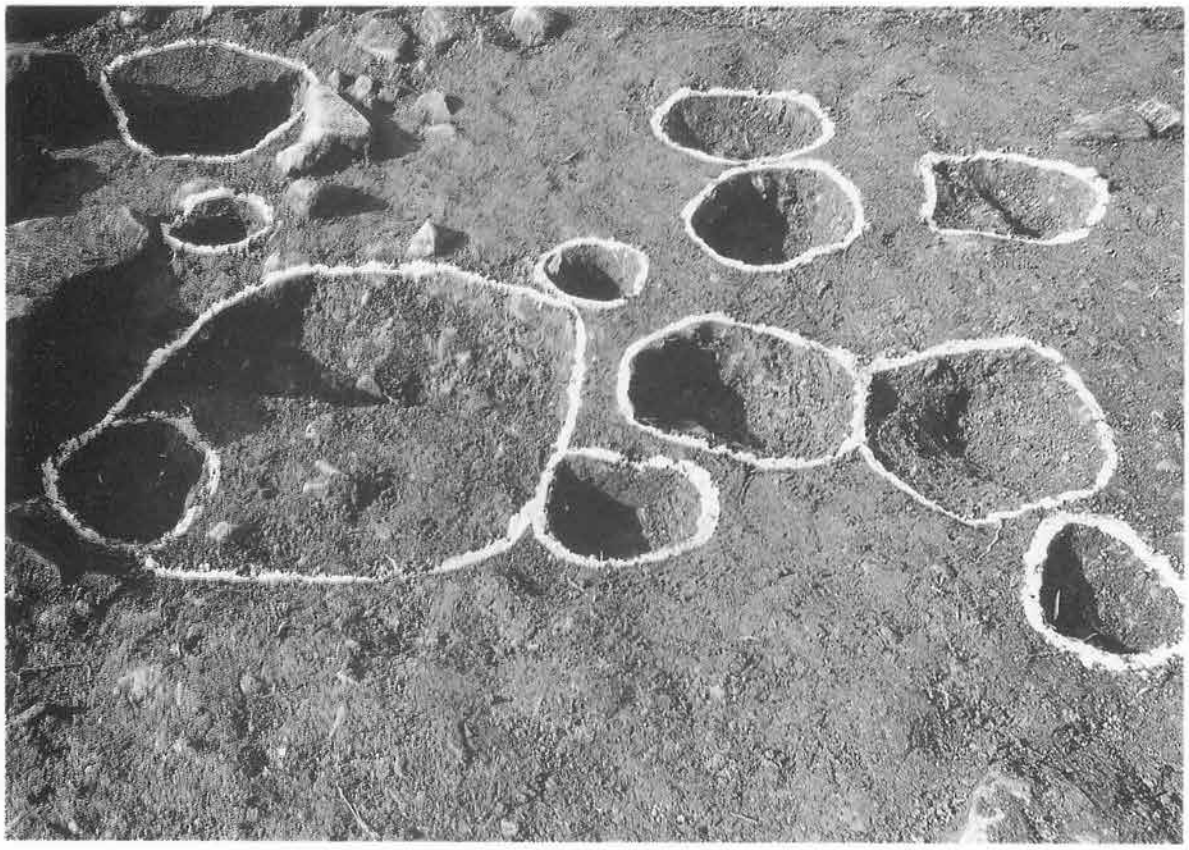
28、31号土坑完掘状況（南から）

E、F－2区 作業風景



17号土坑完掘状況（北西から）

26～27、29、30号土坑完掘状況（北から）



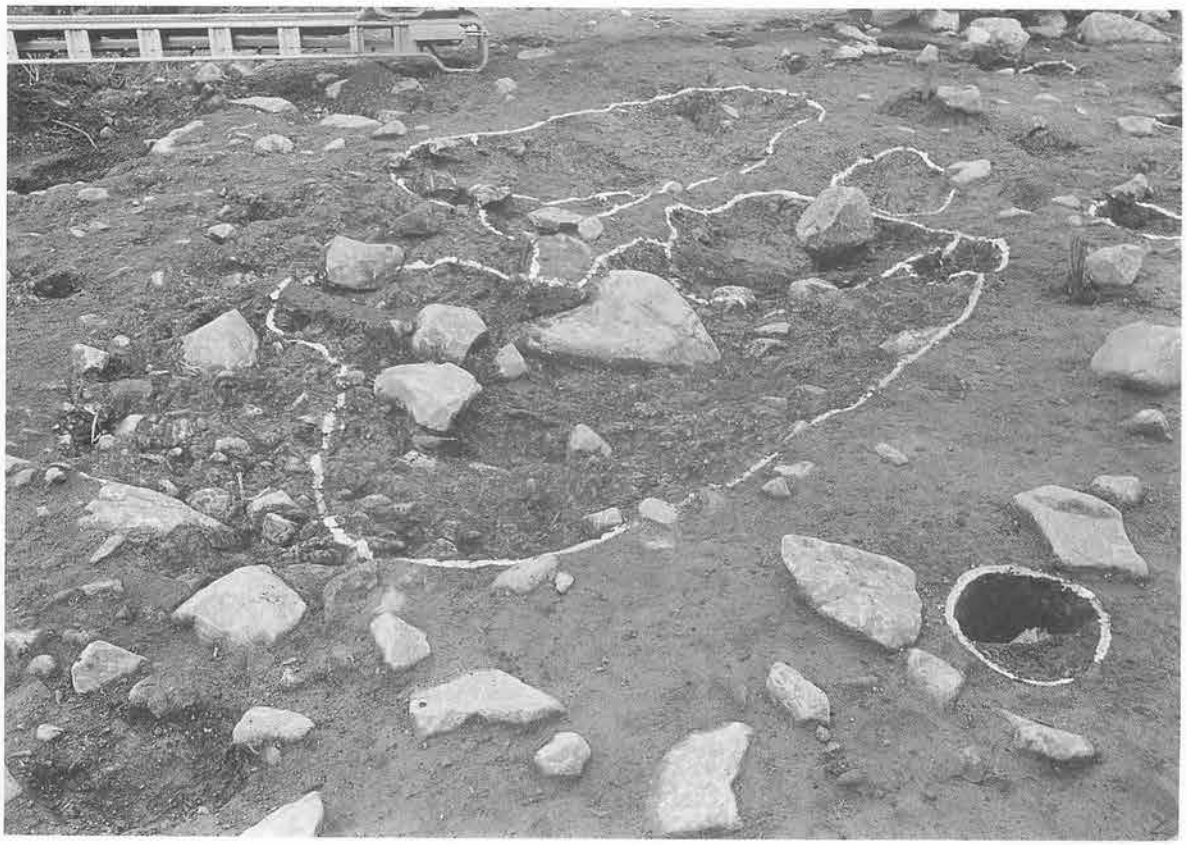
21、22号土坑周辺完掘状況（南から）

28、31号土坑完掘状況（南から）

34号土坑遺物出土状況（南から）

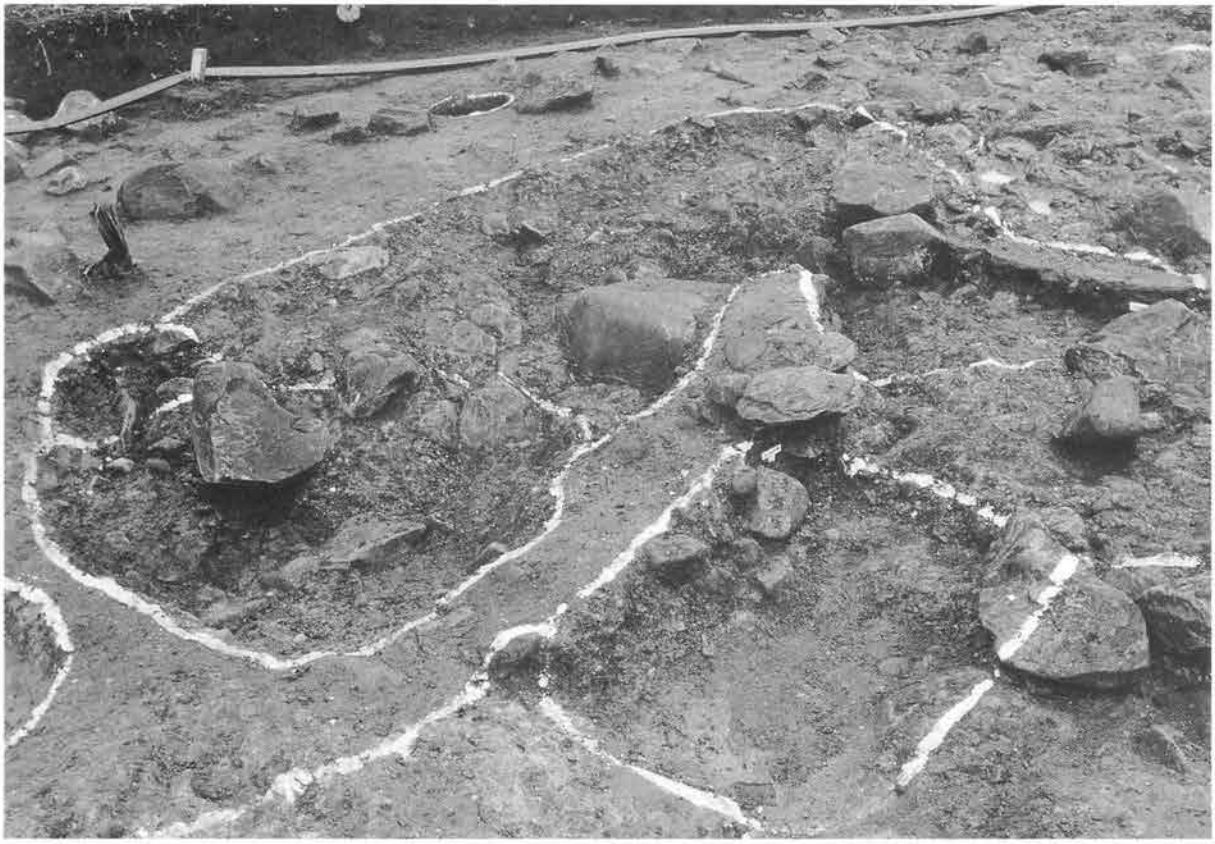
同上（南東から）

9号溝完掘状況（西から）



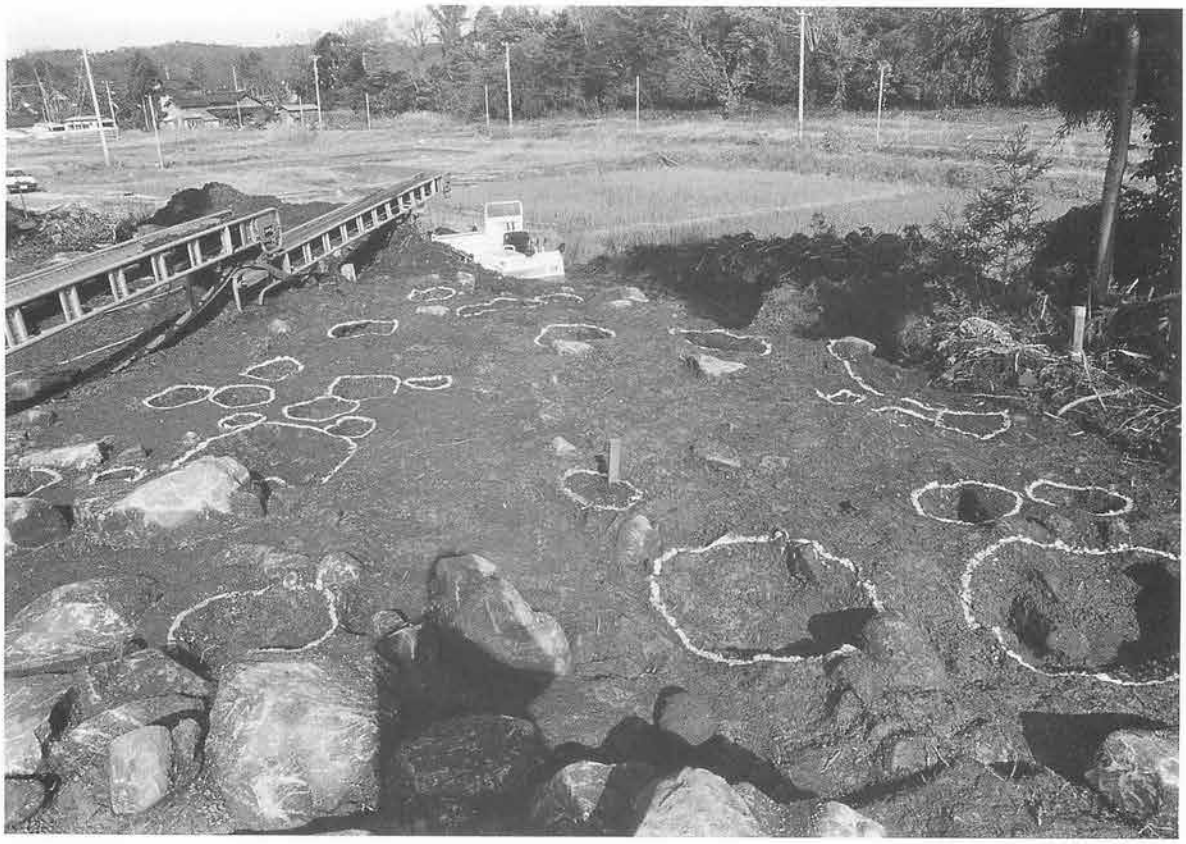
1、2号不明遺構完掘状況（南から）

1、2号不明遺構完掘状況（東から）



1号不明遺構完掘状況（南から）

1号石組遺構完掘状況（南から）

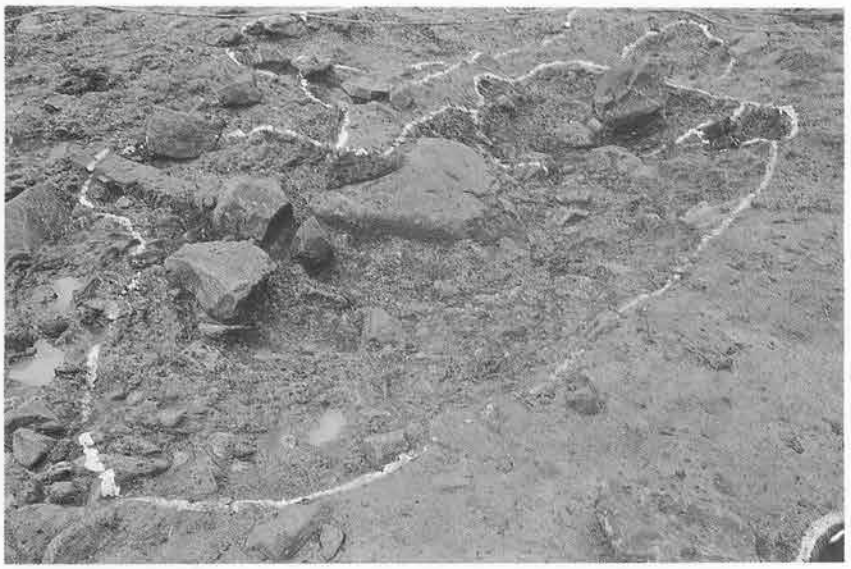


ピット79～82周辺完掘状況（東から）

Ａ区より西側を望む

Ｆ区周辺作業風景（西から）

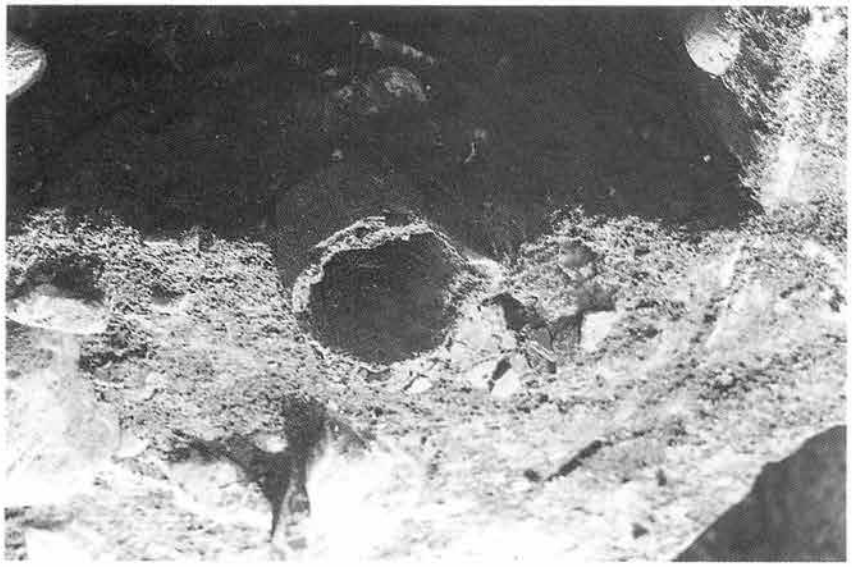
6、7号溝周辺完掘状況(北から)



2号不明遺構（南西から）

1号土器出土状況（南東から）

2号土器出土状況（南から）



ピット50土器出土状況（西から）

金ケ崎小学校児童体験発掘風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおついせき
書名	大津遺跡
副書名	農免農道整備事業田鶴浜西部２期に係る発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中島俊一、本田秀生、川畑　誠
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921 石川県金沢市米泉町４丁目133番地　℡(0762)43-7692
発行年月日	西暦1995年３月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
大津遺跡（おおついせき）	石川県鹿島郡田鶴浜町大津（いしかわけんかしまぐんたつるはままちおおつ）	17401	31008	37° 3′ 40″	136° 51′ 10″	19910903 ～ 19911218	1,000	農免農道整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大津遺跡	集落遺跡	縄文時代早期、前期後葉～中期後半、弥生時代後期、古墳時代中期	竪穴状遺構　２基 土坑　34基 溝　11条 ピット　多数	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	縄文時代の土壙墓２基などの墓域を確認した。

大　津　遺　跡

―農免農道整備事業田鶴浜西部
2期に係る発掘調査報告書―

平成7年3月26日　印刷

平成7年3月28日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町4丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692番(代)

印　　刷　北國書籍印刷株式会社